
摩訶不思議っ！？女子高生の魔法生活

鈴羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

摩訶不思議っ！？女子高生の魔法生活

【Nコード】

N6328K

【作者名】

鈴羅

【あらすじ】

まだ記憶の植えつかない頃、親に捨てられた西蒹香喃。

高校生の彼女は、ずっと如月家に育てられてきた。自分と如月家の違いに悩み始めた時、自分と家族の血のつながりがないことを知り、迷惑をかけないためにも一人暮らしを決断する。

そこで見つかったのが激安アパート、紅祇荘^{あかぎ}。大家はなんと、香喃の一つ上18歳の紅桐沙捲という青年。そこから香喃の摩訶不思議な生活は始まった。

激安アパート

私の名前は香喃^{かなん}。今高校2年生。ここで一つ。お気づきかもしれないけど。私は文章を長くするのが苦手。でも、このほうがトントン進む。テンポもいいし。とりあえずこのテンポで話を進めたいと思ってるから・・・そこらへんはよろしく。

今、私はちいさな一戸建ての家に住んでる。血のつながった親はいない。死んだのかもしれないし、どこかで生きているのかもしれないし。そこら辺は気にしたことはないけど。残してくれたのは、かすかな記憶と名前だけ。私はまだ小さい頃に捨てられたらしい。赤ん坊の、まだ記憶がしっかり残せないときに。ずるいと思わない？自分たちの顔を思い出さないように、いちいち時期を選んで捨てたのよ？

ちいさな揺りかごに、名前を書いた紙と、ぐずる私のために置いていった唯一のおもちやを残して。その時に来てくれたのが、今まで私を育ててきてくれた如月家^{かづき}の人間だった。

10歳くらいまでは何の疑いも持たないで、普通に父さん、母さん、って言ってくらしてこれた。でも、やっぱり思春期つてものを迎えると変わってきたの。如月家の人は、私と全然似てない。顔つきから体まで。正反対って言ってもいいくらい違う。

そんなギャップに疑いを感じてきたときに、追い打ちをかけるように耳に入ってきた話。私は如月家の人間じゃない。いきなり言われた。一家全員呼び出して、大声で。それで私は、一人で暮らすことを決めたってわけ。そのほかにもわけはあるのよ？たとえば・・・不景気。あとゝ家族じゃないってわかってから感じた、二人の兄のうち、下のほうから送られてくるいやらしい視線。そりゃそういう年だったのはわかるけど、妹だって思ってた人間を・・・ねえ？それで嫌気がさした。でもね、一人もいいかなって。一人暮らしっていうとなんかかっこいい？とか思っちゃったりもしてたかもしれ

ない。

「香喃。お昼、食べちゃった?」

話しかけてきたのは、私の立場を知っても一緒にいてくれる親友。名前は笠木優奈^{かほま ゆうな}。明るくて、クラスのムードメーカーかって感じの元気いっぱいごく普通の女子高生。

「まだだよ。」

「じゃ、食べよ?」

そういつていそいそと優奈は机を寄せた。

「で、どうなのよ?」

優奈が聞いてくる。なにを?と聞き返すと、パシパシと腕をたたかれた。

「一人暮らしだつて。なんか憧れちゃうんだもん。」

「そう?まあまあだよ。」

そう答えてみたものの、やはり一人、というのは自由でうれしかった。アパートの資金はなぜかほかのところより、何倍も安い。それは、女子高生にはかなりありがたく、バイト代だけで十分に賄え、そのほかに余裕もできるほどだ。で、そのアパートに決めたいきさつを話そうと思う

私は、一人で不動産屋に来ていた。にこにことした感じのいい主人にある一つのアパートを紹介された。

「ここ何でどうでしょう?安いですし、近くに駅もありますよ?」

「・・・そうですね。」

見てみると、作りは古いが、よさそうな物件だ。興味を持ったのを見て主人は切り出した。

「どうです?今から見にいつてみましようか?」

「え?いいんですか?」

アパートが気に入りにかけていた私は、ぜひ行きたいといった。だがひとつ気になることが・

「でも、今から行っていいんでしょうか・・・？あっちの都合もあるんじゃない・・・」

「いいんですよ。実はね・・・この大家と私、古い友達なんですよ。」

「え、じゃあ行きたいです。いいですか？」

「ええ。もちろんですよ。行きましょう。」

主人に導かれ、私はそのアパートに向かった。

写真と本物は全く違う。実際の家はもつと古かった。しばらく建物を見上げていると、主人に呼ばれ、中から誰かが出てきた。すると主人が出てきた大家と握手する。

「いや、久しぶりですなあ！すっかり大きくなりましたよ・・・」

「ああ、遠藤さん。」

見に行ってみると、なんと大家とはまだ香喃とそう変わらない青年だった。

真っ黒な髪に漆黒の瞳。どこか綺麗な人だと思った。

「その子が入居希望者？」

あわてて前に出て頭を下げる。

「えっと、西蒹香喃にしあきです。」

青年はうつすら笑って自己紹介した。

「僕は紅桐沙捲くわくしゅう。君、ずいぶん若いけど、学生さん？」

「あんただって若いだろ？」

遠藤が紅桐を見て苦笑いする。

「えっと・・・高校生です。今年で17になります。」

「へえ。どうしてここに来ようと思ったの？」

「・・・っと、今私他人の家に住まわせてもらってて、もう高校生ですし、一人でも大丈夫だと思うんで、一人暮らしをしようと思って・

・このアパートに。」

「ふうん・・・」

気まずくなりかけ、遠藤があわてて相槌を打つ。

「そうなのかい？親御さんもいるんだろう？実家なら別にいてもいいんじゃないかい？」

香喃はうつ向き気味で言いにくそうに口を開く。

「親・・はいません。私、捨て子で、拾ってくれたのが今の家の人たちなんです。」

そういうと、2人は眼を伏せた。遠藤は嫌なこと聞いちゃってわるかったね、と謝り、心配してくれた。

「大丈夫なのかい？」

「ええ。ありがとうございます。」

そこに紅桐が手続書をもって現れた。香喃はびくつと驚き、紅桐を見る。まったく気配がなかった。足音がしなければ、さっきまで動いていたという気配はみじんにもない。

「どうしますか？今、ちょうど空きがあるので、ここで手続きもできますよ？」

香喃はあまり悩まずにサインした。このアパートは雰囲気も良く、地形を考えてもかなり便利だ。しかもとどめとばかりに、家賃が水道、電気代込みで一カ月2万円。激安だ。

「じゃあ、いつから来ますか？」

そう言われ、逆に聞き返す。

「いつからいいですか？」

そう言ってもってきた荷物をポンとたたく。

「今日からでもどうぞ？」

香喃は大きくうなずいた。

「じゃあ、今日からすみませす。荷物、これだけなんで、運び込んでもいいですか？」

「いいですよ。じゃあ、部屋の説明するんでついてきてくださいね。」

「じゃ。僕はここで。」

そう言つて大家は帰り、紅桐はすたすたとアパートへとはいつて行った。

紅桐に連れて行かれたのは、これで2万円！？つてくらいいい部屋だった。

エアコンついてる、水道ついてる、風呂ついてる、トイレついてる、キッチンついてる・・・それにインターネットの回線まで来ている。紅桐はどんだん部屋の説明をしていく。香喃はメモをとるのに必死だった。

「これがガスの元栓ね。これが水道で、これが・・・」

アパートの外見からは想像もできないほどきれいな部屋だ。そう思つてみると、説明が終わり、紅桐がこつちを向いた。

「で、荷物はそれだけなんですか？」

「え・・・あ、はい。」

「それで・・・その今住んでる家にはきちんと連絡したかな？」

「してないですけど・・・いいんです。一応一人で暮らすつてことは言つてありますし。」

「・・・そう。じゃあ、これ。部屋のカギ。」

鍵を渡され、香喃は前から思つていた疑問をぶつけてみた。

「あの、紅桐さん、今いくつなんですか？」

すると、怪訝そうなまなざしを流された。あわてて理由をつける。

「えっ・・・いや、あの、若く見えるから、どうして大家なんてできるのかな？とか・・・すいません。」

もごも言つてしていると、紅桐はぼそつと言った。

「18。いろいろあつてね。自分からなつた。・・・あと、紅桐さん、つてのはやめてくれる？」

「え？じゃあなんて呼べば・・・？」

「沙捲でいいよ。」

年が近いことに親近感を覚え、少し安心したような気がする。

「じゃ、よろしく。住民にあいさつとか、そういうのは自由だけど、みんなフレンドリーなほうだから」
そう言って沙捲は隣の部屋に入った。香喃は驚き、つい呼びかけた。
「くどっ・・じゃなくて、沙捲さん！部屋、そこなんですか!？」
「そうだけど？」
「じゃ、お隣ですね。これからよろしくお願いします。」
「こちらこそ。」

こうして私の一人暮らしは始まった。

まさかの出来事

挨拶も終え香喃はもとも置いてあったソファに寝転がった。このソファだけではない。テレビも冷蔵庫もタンスもベットも机も。いきれないほどたくさん新品の品が部屋に置いてある。沙捲によると、全部使っていていいらしい。学生の香喃はありがたくそれを聞き入れ、今こうして物を使っている。「これで2万円・・・」パソコンもある。電気ケトルまである。香喃はそれが信じられなかった。すると、ドアをたたく音が耳に入った。

「沙捲ですけど、いますか？」

香喃は念のためドアスコープをのぞき、確認してからドアを開ける。

「あ、よかった。ちよつと話したいことがあってね。」

沙捲は部屋に入り、中を見回した。香喃がお茶を入れようとすると、感心したように言った。

「あ、それ使えた？難しいのに。」

「え・・・普通のじゃ・・・？」

香喃は自分の手前にあるケトルを不思議そうに見た。沙捲は少し考え、香喃に切り出した。

「ね。魔法って信じる？」

「え・・・なんでです？だって、そんなものないんじゃない？」

「いいからさ。信じるか信じないか。」

沙捲に言われ、香喃は小さいころ思ったことを口に出してみた。

「あつたらいいなって思いますよ。自分も使えたらな〜とか・・・あつ・・・いや！信じてるって言うか、

あつたらいいな、つてだけで！！」

自分の言ったことが恥ずかしくなり、手で顔を覆い隠した。それを沙捲はゆっくりと解き、真剣に言った。

「ね、魔法を使えるようになりたいっていったよね？・・・なってみ

「ない？魔法使い。」

「は？でも魔法つて・・・ないですよ？あはは・・・」
すると、沙捲は香喃の手を握り、眼を見据えた。

「なっ・・・？」

「香喃ちゃん、すっごく素質があると思うんだよ。」
やけに目が輝いている。

「素質??？」

そういうと沙捲はケトルを手に取った。ボソツと何かを言うと、口が開き、バクバクと閉じたり開いたりする。牙が生え、香喃にかみつこうと手の中で暴れた。

「なっ！！なに？なにになに!??」

香喃が驚くと、沙捲が落ち着いて、と声をかける。

「これ、普通のケトルだよ？君は普通に使ってた。そうだよ？」

「え・・・え、そうですよ！普通の・・・」

香喃はなるべくそれから離れ、沙捲を見る。すると沙捲はクスクス笑っておいで、と手招きした。沙捲に近づくと、真剣に言われた。

「このケトル、僕が魔法をかけたんだ。人を脅かすように。」

「なんで!??どうして?そんなことして・・・」

その時香喃は理解した。ここが激安なのは、魔法の素質を見るために人を寄せるため。なぜここに人が入らない?・・・それはこの魔法に驚いて逃げて行くから。なんでここにこんなきれいな家具が置いてあるか・・・それは、沙捲が魔法をかけて置いておくから。なんで沙捲が横に住んでいる理由。悲鳴を聞きつけるため。そうするとある疑問に行きつく。

「どうして魔法をかけたのに・・・私は普通に・・・？」

「よく気付いたね。それが素質なんだ。僕がかけた魔法を打ち消して使える。すごい魔力を持つてるって話さ。」

「でも、魔法なんてっ!・・・」

香喃はさっき見たものを思い出し、沙捲を見た。

「もう一回やるうか？」

「やつ！やですー！」

必死に考えをめぐらしても、答えに行きつくことはなかった。魔法、なんてそもそも受け入れること自体が無理に等しい。すると沙捲は言った。

「で、こつちの要件は、魔法使いにならない？って話。」

香喃はひそかに興味があった。もしかしたら自分を捨てた両親を探せるかもしれない。もし、どうにもならなくても顔だけは見てみたい。記憶にあるのはただ温かいなかだけ。気になるのも仕方ないと思うのだが。

「・・・でも、どうやって？」

「僕が手とり足とり教えてあげる。ね、君みたいに才能があるのってそんなポンポン出てくるものじゃないんだ。駄目かな？」

香喃はしばらく考え、ついに決めた。

「やります。本当に・・・冗談じゃないですよ？魔法ってなんですか？何ができるの？どうやって学ぶの！？」

「ふふふ。ありがとう。これからしっかり教えるから。」

沙捲はそう言ってドアに手をかける。香喃は驚いて呼び止める。

「何もしないんですか？」

「今日はね。あと、合鍵。もらったから、もしかしたら勝手に入るかも」

「そ・・・そんなあ・・・」

香喃はうなだれ、あることを思いついて沙捲に聞いた。

「ここの住民ってみんなそうなんですか！？」

「いや、ほとんど違うよ。じゃあまた明日ね。」

そう言って沙捲は出て行った。

ソファに体を沈ませて考える。今、ケトルは動かないし、魔法だのなんだの言われても絶対に信じられない。だが、魔法が実在したという証拠に沙捲が使っていたカップが置いてある。香喃はため息をつき、洗い物を始めた。

次の日・・・

講師が教室に入り、まだざわざわしている教室内を落ち着かせる

「静かに。今日は新しい生徒を紹介します。さ、入りなさい。」

転入生を一目見て、香喃は腰を抜かしそうになった。

「なっ！・・・あ・・・」

一人大きな声を出してしまい赤面して下を向く。

「両親の仕事の都合でこの学校で勉強することになったそうだ。さ

あ、自己紹介して。」

「はい。昨日引越してきました、紅桐沙捲です。よろしくお願
いします。」

沙捲が顔を上げると、女子が色めき立つ。その端正な笑顔に男子さ
えも一瞬固まった。

「じゃあ、西蒹くんの隣に座って。わからないことがあったら何で
も聞きなさい。」

そう言われ、当たり前のように沙捲は香喃の横に座る。香喃が文句
を言おうとすると、先にとっこりと笑顔で言われた。

「よろしくね。西蒹さん。」

「っとう・・・」

香喃はわけのわからない唸り声を出して、机に突っ伏した。そのあ
と、講師が何を話そうと香喃の耳が受け入れることはなかった。

休み時間、香喃が沙捲にわけを聞こうとすると、一気に女子が群が
った。

「ねえ、好きな食べ物なに？」

「ねえ、好きなタイプは？」

「ねえ、私　っていうの！メアド交換しよ！」

そんな会話にぐったりし、香喃は教室の隅でいじけている男子の近

くでため息をついた。すると、沙捲はスタスタと香喃に寄ってきた。
「ちよっ・・・」

「話したいことがあるんだけどさ。」

「話したいことがあるのはこっちです！」

香喃がやつということを許された文句を言い、続けようとする、
沙捲に遮られた。

「ちよつと外でない？」

沙捲の提案にうなずくと、女子もついてこようとした。

「ちよつといい？」

そう言っても聞こうとはしない。あきれぎみに沙捲が右手を上げる。
すると二人を除く全員が固まった。

「な・・・なに？ちよつと！？七海なつみ！理恵りえ！！？」

「大丈夫だ。ちよつと時間を止めただけだ。」

すると、香喃を軽く押しながら教室の外へと出した。また同じように
手を上げると一気に活気が戻った。

「さ、気付かれる前に行こうか？」

沙捲に手をひかれ、香喃は屋上に来た。そのときチャイムが鳴る。

焦る香喃を見て、沙捲がまた時を止める。香喃が安心し、質問を浴
びせかける。

「どうして来たんですか？あなた年違うじゃないですか？私の隣に
来たのも魔法なんですか？」

「君の言ってることはほとんどあってるよ。あとね、僕がここに来
た理由は君の才能を開花させるため。年が違うのは・・・いいんじ
ゃない？」

「よくないですよ！！」

沙捲はクスクスと面白そうに笑う。香喃は思わず固まり、数秒後ハ
ッとなった。

「・・・で、学校に来るのはいいとしましょう。」

「本当？うれしいよ。」

「顔に当たり前って書いてありますよ。話の続きですが、訓練って

何をするんです?」

「訓練?・・・ああ、まあ訓練みたいなものかな。いろいろ試してみ
るつもりだから、内容は秘密。」

「秘密って・・・」

「ほら、もう時間戻すよ。早く教室に行こう。」

来た時と同じように手をひかれ、香喃は教室に入った。

とたんに授業が始まる。こうして香喃の少し変わった生活は、本格的に始まった。

めざめ

沙捲が勝手に年をごまかしてまで学校にやってきてから早一週間。訓練するとか言っつてこの生活で変わったことはほとんどない。強いて言えば、女子からの視線がきついつとか、今まであんまり仲良くなかった子がいきなりべたべたしてくるとか、どうせそれくらい。あ、どうせつていうのは、このアパートの若大家の表現だから。私はどうせなんて思っつてない。

で、ここで皆さんに謝罪したいことが一つ。私は話のいっつちばん最初にたしか、「一人暮らしを始めた」つていったはず。前言撤回。今は正確に言つと、「二人暮らし」になつてる。そのうちの一人はもちろん私。あたりまえよね？もう一人が問題。18にして大家。18だつていうのに17歳の学生と一緒につまらなそうに勉強してる。やめときゃいいのにね。それで、ここが一番重要。私となぜかわり始めたかつていうこと。やさしく笑顔でこのアパートはいいよ？とかいつて、入居したとたん魔法は信じる？とかいつて私を魔法使いにする試みを始めたやつ。そのために学校にまで来て、年までごまかして、ついに私の横の席を「魔法」で陣取つてるやつ。もうわかるよね？名前は紅桐沙捲。自称、つていつか、私はもう完全に信じ込んでるんだけど、魔法使い。そりゃ、私だつてついで一か月前に「魔法があるんだよ」つて言われても危ない奴で済ませてたかもしれない。でも今じゃ全く違う。だつて私自身魔法使いになりたいつて思っつてる。おかしいでしょ。笑え笑え。笑つてるよ！今に見てる！！・・・コホン。まあ、私語が非常に多くなりましたが、ここから本当に本題。

「ね・・・ケトル暴走してない？」

私の部屋で私の（私のつていったつて、もともとあったものなんだけど・・・）ソファアを陣取ってる男。

「沙捲さん？あなたが術を解いてくれればそんな心配いらないんですけど。」

「駄目だ。暴走したら魔力が弱ってるってことだから。まあ、その前に体に出るけどね。」

「体に？」

「熱、全身の痛み、頭痛、原因不明の腹痛。これが普通のときね。まあこれは魔力を使いすぎたときの例だから心配しなくていいんだけど、人体の自然発火。魔力じゃ飽き足らなくて体を使い始めた時の。」

「大丈夫です。まだ魔力さえ使えませんか。」

皮肉交じりに言い返し、香喃はコーヒをすすった。そして、疑問をぶつける。

「なんでうちにいるんです？隣なんだからいいでしょう？」

「なんかね。一人だとさみしいんだよ。君もそうでしょ？」

「そんなことはありません。」

言い返してやると、沙捲は本当に笑顔で笑う。それに一瞬見とれてしまう自分が本当に悔しい。本当に人形みたいに整った端整な顔立ち・・・そのせいで私は学校で嫌な眼で見られてるけど。

「しかたないねえ・・・魔力の使い方を教えてあげようかな。」

「本当ですか！？」

思わず身を乗り出す。すると、沙捲は香喃の額を指でつついた。

「もう印も消えたし、いいころか。」

「印、つけましたよね？何の意味があるんですか？」

「あれは、君の魔力に嫌なものが寄ってこないようにつけた。」

「寄ってくるって・・・？」

「幽霊、悪霊、生霊、妖怪、・・・。」

香喃は耳をふさぐ。

「ま、印が消えるってことは自分で追い払えるってことだから安心

してね。」

香喃は気づく。それを素直に口にした。

「じゃあ、除霊ができるようになるってことですか？」

「ん、それは基礎中の基礎だからね。できて当たり前。君は・・・もうかなり前からできてたはず。」

「ふうん・・・」

香喃が感嘆の声を上げる中、沙捲は香喃の手を取って、話し始めた。

「じゃ、使い方教えるから。簡単だよ・・・」

そこから、沙捲の声が頭に直接響くような感覚に襲われる。思わず避けようと体をよじると、強く押さえつけられた。

「大丈夫。落ち着いて聞け。今、方法を植えつけてる。」

必死で呼吸を整えると、頭の中に声が響く。

「自分の呼気と一緒に魔法を発したい部分に気をためる。そこから気を魔法にしたい形に変える。そうしたら魔法をイメージして力を解放しろ。加減をしつかりしろよ。強すぎず弱すぎず、ちょうどいい強さで。」

説明が終わり、沙捲は手を離れた。だが香喃はしばらくボーっと宙を見つめていた。

「おい？無事か？」

「ん・・・？」

目をむけると、パシッと頭をはたかれた。そのせいで目が覚める。

「おい、大丈夫か？」

「うん。なんか変な感じで・・・」

「まあ、気絶しなかっただけいいほうだろ。」

「え？気絶？」

「・・・なんでもねえ。」

沙捲はだまり、香喃は体を少し動かし変化がないのに首をかしげた。

「なんもなつてないんですけど。」

「バカ。腕見てみる。」

香喃が見ると、腕輪のようにペンタクルが彫られている。それは虹

色に輝くと、フツと消え、うつすらと痕だけが残った。沙捲は眼を見開いて腕を強くつかんだ。

「おい、今何色に光った!？」

「に・・虹色ですけど・・?あれなんだったんです?」

そういうと、沙捲は自分の腕に指をあてる。すると、香喃と同じ文様が紅く燃え上がるように光った。

「わ・・綺麗・・」

「この色はな、力の強さを表すんだ。いいか、階級を言うからメモでもしとけ。気絶するのは嫌だろ?」

「はっ・・はいっ!」

香喃がメモを取る体制になったのをみて、沙捲は話し出す。

「いいか?下級から言つと、緑、黄色、オレンジ、ピンク、紫、紅、水色、青、白、金色、銀色。銀と金は同じような力だ。そして・・・お前の虹色は最上級だ。1000年に一度出るかでないか、それくらいの確率でしか持てない魔力。僕だってこれを入れても2度しか見たことがないんだ。」

香喃は一つ気になったことがある。

「寿命が延びたりとかするんですね。」

「なぜそう思う?」

「だって、沙捲さん1000年に一度出るかでないかのを2回見たんでしょ?」

「ツチ・・妙なことばかり気にしやがって・・まあいい。聞きたい?」

「はい。ぜひ。」

そういうと、沙捲は遠くを見るようにして話し始めた。

「僕が魔法使いになったのは人間の年齢でいうと18歳だ。君の一つ上つてとこかな。で、今から何年前って話になるとかなりあいまいになる。」

「何年前なんです?」

「78・・・ん・・786年前。あ、違う。789年前だった

ようなきがする。」

「なっ・・・700!?!じゃあ、実年齢は・・・?」

「誤解しないでくれ。気持ちは18歳だ。本当の年は・・・797歳。」

「さつきから、一番気になってたんですけど・・・口調がめっちゃ変わってるような?性格も?」

「これが素だ。いつもはあのゆるい野郎を演じてるがな。」

ふんと鼻を鳴らし、不機嫌そうに眉を寄せた。

「魔力の制限は自分にしかできない。考えて行動しろ。」

年を指摘されたのが嫌だったというかわいらしい事実、香喃は吹き出しそうになった。

「なんだ。」

「ぷ・・・くふっ・・・な・・・んでもない!」

香喃は腕で口を押さえ、沙捲のいるソファーにうつぶせになった。ようやく落ち着き、何となく聞いてみる。

「長い間生きてるってさみしくないですか?だって、誰もいなくなっちゃうんですよ・・・」

「それに気付いたのはお前が初めてだよ。みんな長く生きたいって言ってるけどそんないもんじゃない。」

「私、沙捲さんが死んだら死にます。」

突然言われ、いつも無表情の沙捲が紅くなる

「だって、その頃になって知ってる人って言ったら沙捲さんしかないですよきつと。嫌じゃないですか、自分を知ってる人がいなくなっていくのって。」

「まあな。」

冷静になり、沙捲は立ち上がる。

「今日、またここで寝るつもりですか?」

「・・・」

香喃がそう聞いた時には、もう香喃のベットで寝息を立てていた。

香喃の危機 1

「沙捲さん。沙捲さん！遅刻します！！沙捲さん！！！」

何回も呼んでいるのに〜！内心いらいらしながら沙捲をたたきおこした。

「んだよ？」

「学校！毎回毎回これじゃ、ほんと駄目ですって！先きますよ！」

「わかった。」

「わかった・・・じゃないんですよ！私の訓練のために学校に年ごまかしてきたんでしょ！？あなたが来てくれないと私が恨まれるんです！」

必死に名前を呼ぶと、ようやく沙捲は起きた。実はまだ出る時間の1時間前。いつもいっつもぎりぎりなので香喃自身の腕時計以外すべて1時間早めたのだ。

「朝ごはん出来てますから。」

「はいはい。」

「早く着替えてください！」

「はいはい。」

「はいはい。・・・じゃなああい！！ほらほら、沙捲さんの好きな豆腐の味噌汁ですよ。今なら熱々ですよ。」

香喃が食べ物でつると、不思議なくらい素直に行動する。朝ごはんをゆとりをもって食べていると、沙捲が不機嫌そうに言う。

「なんで時計1時間も早めたんだよ？」

「あ・・・ばれてました？でも、このほうが楽じゃないですか？」

沙捲は時計を戻そうと魔力をためたところで止まった。

「やってみ？」

「なにを？」

「時計。戻してみ。」

香喃は昨日言われたとおりに気をためて使った。そのとたん、強す

ぎる魔力のせいで時計がそっくりそのまま23じかん戻る。

「あ・・・」

「あ・・・じゃねえって。もっと加減しろ。」

「でもいいじゃないですか？時間もびつたりですよ？」

「ふう〜・・・つたくよ。」

「あつ！とつくに時間過ぎてるじゃないですか！？はやく！」

香喃は沙捲の手を引き、あわててアパートを出た。

「ううう・・・」

「なに唸ってんだ？」

沙捲が言うと、香喃は一気にまくしたてた。

「間に合いませんよ！？ほら見てください！絶対に間に合いません！」

「はいはい。」

「はいはい。じゃなくてええ・・・もう・・・いいです・・・諦めま
すよ。」

「なんだ？前授業遅れた時はそんなに焦ってなかったのに？」

「う・・・」

香喃にはひそかに思いを寄せる講師がいた。数学の鷹西亮先生^{たかにけいろう}。ル
ックスもまあまあ。それにしてやさしくて・・・そんなでもってユーモ
アのセンスに長けていて・・・香喃からすれば完璧に「タイプ」だっ
たのだ。

そして、ここが香喃の焦る理由。今日の1時限目は数学。もうおわ
かりでしょう・・・「恋する乙女」なんです。言い方が古い、とか言
わないで。もうこれしか当てはまる言葉がない。

「ふ〜ん。」

「な・・・なんですか？」

「講師がねえ・・・」

香喃は人の多い駅だというのに大声を出した。

「なんでわかるんですか!?!どうして?」

「魔法には個性があるの。俺はガードの仕方をしらない他人の考えを読み取ったり、先の行動を見たりもできるわけ。」

「そんなあ・・プライベートの侵害じゃないですか!?!」

「ガードしてればいいんだよ。」

「うう。」

香喃が泣きそうになると、沙捲は柄にもなく困った顔をする。

「そんなに出たかったのか?」

香喃は迷ったが素直にうなづく。沙捲は立ち止まって考えている。

「・・・なにやってんですか?」

「授業始まるの何時?」

「えっと9時です。」

「じゃあ、間に合う。」

「え?いくらなんでも・・・」

無理ですよ、と香喃が言おうとすると、沙捲は香喃の手を引いて宙に浮く。そのまま香喃を抱えて空を飛んでいく。

「いっ・・・きゃあああああ!」

「静かにしてくれ。耳に響く。」

「とっ・・・私・・・飛んで・・・私・・・とっとなとと!」

「君はこの生まれだ?それともニワトリか?」

返事がないのに気づき、香喃を見てみると、目を輝かせている。下を覗き込むため体がゆらゆらとゆれている。

「おい・・・」

「うわあ・・・すごい・・・沙捲さん!私もこういいうのできるようになるんですか!?!」

さっきまで泣きそうだった香喃が声をあげて笑っているのを見て、沙捲は含み笑いをした。

「無神経な君にはむりだね。」

「むっかつく~~~~!」

そうこうしているうちに見慣れた校舎が目映る。今宙を飛んでい

るだけで精いっぱい沙捲は香喃に言った。

「時間を止める。」

「え?」

「そうしないと、俺とおまえは一生変人扱いだぞ。」

「やです!」

香喃はそう言っつて前の沙捲をまねるように手を突き出す。すると、驚くほど簡単に時が止まる。横を飛んでいた鳥はそのままの形で固まり、雲の流れも止まる。

「よし、そこに下ろすからな。窓を開けてくれ。」

香喃はベランダに放り出され、打ちつけた背中をさすりながら窓を開ける。沙捲が滑るように降りてきて、香喃よりも先に教室へはいった。教室はちょうどホームルームで担任が入ってきたところだ。まだ授業は始まっていない。

「ありがとうございます!沙捲さん!」

「・・・ふん。」

二人は支度をし、席に着く。香喃は沙捲に聞いた。

「どうやってとくんですか?」

「自分の出した魔力を抹消していけ。」

「どうやって?」

「消えてく感じだ。兎に角やってみろ。」

香喃が言われたとおりしてみるとこれもまた簡単に解けた。優奈に話しかけられる。

「あれ?いつ来たの?」

「ひっ・・・え?さっきだけど?」

背中に冷たい汗が伝うのを感じながら話した。

こうして、香喃の長い1日は始まった

香喃の危機2

沙捲の空中浮遊（業界？まあ業界ではないが、業界用語では空を飛ぶことをこういうらしい。）によって授業に間に合った。何もしてないのに顔をほころばしてしまうのが自分でもわかる。沙捲が小声で文句を言う。

「ニヤニヤしてんじゃねえよ。気持ち悪いいな。」

「・・・ふふ。」

何を言われても怒れない。沙捲のおかげで来れたのだから。それほど嬉しかった。朝のいろいろな作業が終わり、休憩をはさんで授業が始まる。

「起立。礼。」

号令がかかり、一瞬遅れて香喃も立ち上がる。バラバラと生徒が動き始め、香喃はストーンと座る。相変わらず、いや始めよりもたくさん女子が群がる。香喃はここ最近で学んだことがあった。慣れというものは本当に、本っ当に恐ろしい。というわけで、香喃はもう居場所を移すことはなくなった。

「ねえ・・・今日の帰りヒマ？みんなでお茶でも飲もうと思ってんだけど、沙捲くん来てよぉ。」

「そうよ！来て来て！絶対楽しいから！」

沙捲は香喃に最初のころ見せていたやさしいキャラクターを見せる。

「ごめんね。香喃と帰るから。」

「なっ!?!」

そんなことを言えば顰蹙を買うのは目に見えている。香喃はあわてて否定した。

「違う！違いますよ！ちょっと沙捲さん！！そんな約束してないじゃないですか!?!」

「じゃあ、今約束する。」

「ふざけたこと言わないでください！」

香喃は立ち上がり、教室を出た。背中にひしひしと感じる視線の理由はもうわかつている。沙捲があいいうことを言う理由は、香喃の訓練だということはわかってはいるがやはり言い方つてもものもある。とりあえず教室から離れようと思い、廊下を走って角をまがるようにすると、突然目の前に人が。

「・・・きゃあ！」

バランスを崩すと、手を引っ張られ後ろに倒れることは避けられた。「すみませんっっ！」

「大丈夫？廊下は走っちゃだめだよ？」

「あ・・・はい・・・？？」

声を聞いて、まさかと思いい顔を上げる。そしてまた倒れそうになった。

「大丈夫？どこか打ったかな？」

やさしい声の持ち主は、もちろん鷹西講師。香喃はまだ手を握っていることに気付き、あわてて振りほどく。

「すみません。ほんとに大丈夫ですの！」

また走りだしそうになる衝動をあわてて抑え早足で歩き去ろうとした。だが、足をグリツとひねってしまった。

「だっ！」

派手な音を立てて転ぶ。恥ずかしくて涙が滲んできた。そこへ鷹西がしゃがみ込み、香喃を起こした。

「あはは・・・ほんとに大丈夫？」

「は、はいっ・・・」

「授業始まるよ？えっと・・・西蒹だっけ？」

「はい。西蒹です。」

「下の名前は？」

「香喃・・・ですけど。」

「そう。香喃ちゃんね。じゃあ、僕は教材取りに行くから・・・

あ、そういえば、足大丈夫？」

「大丈夫です。ありがとうございました。」
鷹西が見えなくなると、香喃はしゃがみ込んだ。ものすごくうれしかった。たくさん生徒の中で名前を覚えていてくれたことも（まあ、たまたまかもしれない）、手を引いてくれたのも。一人ではしゃいでいると、授業のことを思い出した。もうそろそろ時間だ。そう思っただち上がると、ひねった足に激痛。声が漏れないように口を押さえた。それでも我慢して教室へと向かった。

教室に入ると同時に感じる視線。香喃は内心ため息をつきながら席に着く。

「おい、足どうした？」

「な、なんで知ってるんですか？」

沙捲に聞かれ香喃はびつくりする。

「歩き方がおかしいんでな。」

「な・・・なんでもないです。」

「ばあか。お前ほど俺はバカじゃねえ。さっきなんで知ってるんですか？って言ったろ？」

「ちよ、ちよつと転んだだけですから。」

二人の会話は鷹西が教室に入ってきたことで終わった。香喃に気付くと、笑いかけてくれた。赤面すると、沙捲がジロつと香喃を見る。香喃は、これまでにないほど集中して授業を受けることができた。

学校の帰り、香喃が一番恐れていたことが起きる。沙捲がトイレに行っている隙に女子が香喃に群がる。

「な・・・？」

「西蒹。調子乗ってんじゃねえよ？」

「え？私そんな・・・」

「うるせえよ。今日の帰り、裏屋（うらや）で待ってるから。来なかったらわ

かるよね?」

裏屋とは、ここらへんの昔の地名なのだが生徒の間では学校の廃屋のことを示す。廃屋、幽霊の話盛りだくさんの薄暗い倉庫。講師などめつたに来なく、普段は全く人通りもない。香喃は背中に嫌な汗をかいた。そのとき沙捲が教室に入る。女子は最後に一言。

「沙捲くんに言ったら殺す。一人で来なよ。」

そういつて離れて行った。沙捲が席について聞いてきた。

「なに?どうかしたか?」

「・・・なんでも・・・ない。」

香喃は本当のことを言うことができなかった。

「香喃。帰るぞ?」

「きよ、今日のごめん無理なんです。友達と会う約束してて。」

「俺も行く。」

「女の子なんですって!はい、鍵。入ってていいんで。冷蔵庫に「飯も作り置きしてありますし。」

「・・・いいけど。気をつけろよ。」

・・・嘘は言っていない。嘘は。あくまでも嘘ではない。香喃は沙捲と時間をずらし、痛む足を引きずりながら裏屋へと向かった。

「おせえよ!」

クラスの女子のリーダー格、笹木ささきが怒鳴る。香喃はいたって冷静だった。きちんと言うことを言って、なるべく早めに帰してもらおうとも思っていた。

「なにシカトしてんだよ?ん?」

「ごめんなさい。」

「てめえがこのごろちようしにのってんからよ、注意してやること思っで。」

注意で済むのか？と内心思ったが口には出さなかった。

「で、内容なんだけど。こうしようと思って。」
突然背中に走った激痛。香喃は廃屋の冷たい床に突っ伏してから蹴られたことに気付いた。

「ぐっ・・・」

「じゃあね。反省したら明日にでも出してやる。」

ガチャツとドアが閉まり、南京錠のしまる音が響いた。香喃はあわてて起き上がるうとしたが、足を痛めているためゆっくりとしか起き上がれない。ようやくドアをたたくがもう反応はない。何度もドアにぶつかり、開けようとするが以外にも丈夫だ。香喃は泣きそうになりながらしゃがんだ。殴るなら殴ればいいのに。閉じ込めるなんて・・・

「・・・」

また立ち上がり、ドアをたたく。手が痛む。冷たいコンクリート造りの廃屋は香喃の体温を奪っていった。

「？」

数学教師、鷹西亮は勤務も終わり、学校を出ようとしていた。だが、どこからか音がする。亮は足をとめ、耳をすませた。・・・廃屋のほうからだ。何かをたたく音がするような気がする。亮は知らず知らずに足をそちらのほうへと向けていた。

もうだめだ。手も痺れて感覚がない。足だって心なしか腫れてきているような気がする。香喃は冷たい床に座った。ふいに沙捲のことが気になった。きつと今頃夕食でも食べているんだろうな。遅いかおもって迎えには来てくれないだろうか？・・・いやだめだ。予定があることにしてしまったし、その内容なら遅くなっても、仕方ないほどにししか思われない。誰か助けて。涙で滲む目で窓からのぞ

く夜空を見上げる。その時だった。

「誰かいるのか？・・・気のせいかな？」

そのとき、香喃は叫んでいた。

「助けてください！います！この中です！！！」

すると、一拍置いてかなりの勢いでドアが開く。月の光に照らされたシルエットを見て、香喃は泣きそうになった。

「講師せんせい……」

「香喃ちゃん！？どうしたの？」

香喃はすべて話した。

「そうか。よし。わかった。僕が全部言ってあげるよ。」

香喃はなぜか大ごとになるのが嫌だった。こうして生きて帰れたのだから。しかも助けてくれたのが講師だったのだから。

「あ・・・いえ。そんな大ごとになんて・・・私の態度が悪かったのかも知れないので・・・」

「それは・・・個人の自由だけど・・・本当にいいの？こんなことまでされたのに・・・？」

香喃は黙ってうなずいた。すると、講師もそう、と言ってドアに手をかけた。

「？」

鷹西はドアを開けるのではなく閉めた。香喃が何を言っても答えない。近づこうとすると、ガチャツと音を立てて鍵を閉めた。そして、鍵を自分のポケットにしまい、香喃に近づいてくる。反射的に香喃は下がる。

「講師？」

「ふふふ。かわいいねえ・・・うれしいな。こんなに可愛い子を・・・」

「そついうなり、鷹西は香喃を壁際まで追い詰め、両腕を押さえる。」

「講師！何つ……」

気付くと両手は縛られ、片手で上に押さえつけられていた。そしてもう片方の手で香喃の顎をグツと掴む。

「やめっ……!!」

香喃の抵抗も虚しく、足も縛られ、口にはガムテープが張られる。

「ひっ……」

香喃は鷹西の眼が狂喜に満ちているのを見た。とたんに激しい恐怖感に襲われ、自由の利かない体で後ずさる。

「ふふふ。大丈夫だよ。もつと楽しくなるから。」

香喃は壁際に逃げ、どうにかして逃げようとする。

香喃の目の前には鷹西の手が迫っていた。

香喃の危機3

「むっ・・・むぐっ・・・」

息苦しい。ガムテープを無造作に口に貼られたためうまく息を吸えない。

「大丈夫。痛くしないからね。」

暴れる香喃に鷹西が語りかける。そんな言葉でおとなしくできるわけがない。こんな暗い場所に閉じ込められて、手足をしばられて、拳句の果てには口にガムテープまで貼られて。香喃は鷹西の手つきをプロのものだと確信した。

「ひっ!・・・うう!!」

鷹西の手が伸びてきた。香喃は思い切りそれを蹴り飛ばす。すると、傷ついたような顔をして香喃をみた。

「なにをするの? 僕のこと好きなんでしょ?」

「ううう!!」

香喃は唸って首を激しく振る。こんなやつ好きになった私が悪いんだ。そう思うと涙が出そうになる。こんな奴に涙なんぞ見せるものか。自分に言い聞かせるようにしてこらえた。

「かわいいね。君みたいな子、初めてだよ。」

香喃の頭にある事件がよぎった。

「女子高生行方不明事件」

香喃が高校に入ってすぐの事件だ。椎名美月という2年の先輩が行方不明になった。犯人は捕まっていない。その1ヶ月後美月は遺体で発見された。

全身に震えが走る。体の震えがとまらない。「女子高生行方不明。翌日廃屋で発見」・・・そんな記事が脳裏をよぎった。香喃は、ただ震えてドアを見つめることしかできなかった。

「香喃ちゃん?」

ガタガタ震える香喃を見て、鷹西がガムテープをとる。だが香喃はしゃべれない。それをいいことに鷹西はゆっくりと手を伸ばし始めた。

遅い。遅すぎる。沙捲はイライラしながら部屋の中を歩き回る。嫌な予感がムクムクと膨らんでいく。香喃は女友達と遊ぶと言っていたがこの時間はさすがにおかしいのではないだろうか？あと、あの教師。なぜか気に入らない。目の奥に気味の悪いなにかがある。目が会ったたびに悪寒が走るようななにかが。

「ツチ・・・しょーがねえなあ・・・」

沙捲は拳を机にたたきつけ、鍵を片手に家を飛び出した。

「さて・・・始めよつかなあ〜？」

鷹西が手袋をはめる。行方不明事件の犯人が見つからないわけ。それは死体や凶器にまつたく指紋が付いていなかったから。香喃は震えながらその作業を見ていた。包丁。縄。ビニール紐。小柄なハンマー。リュックの中から次々と出てくる凶器。美月を殺した小柄な果物ナイフもあった。そのとき、かすかな声が聞こえた。

「・・・香喃！・・・いるのか？・・・ツチ・・・」

そのとき、香喃の金縛りが解けた。

「ここです！ここ！廃屋の中！！！！！！」

「そこか！？」

沙捲の足音が響く。鷹西は焦って香喃を押さえつける。だがもう香喃は黙っていないなかった。

「助けてください！！沙捲さん！ここです！！」

「このクソガキ！」

沙捲がドアを蹴破って入ってきたのと、鷹西がナイフを振りかざすのはほぼ同時だった。

「伏せる！」

思わず言われたとおり伏せる。もうナイフの刃が迫っていた。香喃が目を閉じると、爆発音が響く。焦げ臭いにおいが漂い、香喃がうつすらと目を開ける。

「つたく・・・教師のくせによ。」

沙捲が息を切らして立っていた。手首の紋様がつつすらと光り、消えた。

「沙捲さ・・・ん・・・」

「気をつけろつつただろ？」

鷹西を見ると、頭を抱えて立ち上がった。

「貴様・・・」

「講師せんせい・・・？」

香喃が沙捲の近くから呼びかける。なんだか人が変わってしまったようだ。すると沙捲が香喃に言った。

「何か憑いてるのがわかるか？」

香喃はそう言われ、目を凝らして講師をみる。後ろに何となくもやがかかっているように見えなくもない。沙捲が香喃の考えを読み取って言った。

「そうだ。そのもやは地縛霊だ。」

「そ・・・そんな・・・」

信じられない、というように首を振る。すると、いきなり鷹西が香喃に襲いかかる。だが、香喃は予測していたかのように動く。鷹西は、香喃によけられ、壁にしたたかにぶち当たる。

「お・・・お前、なんか空手かなんかやってたか？」

沙捲の声を聞くと、安心し、しゃがみ込む。

「どうした！？どこか・・・」

けがしたか？と聞こうとして言葉につまる。

「なに・・・泣いてんだよ・・・」

同じようにしゃがんで香喃を見る。

「怖かったか？」

「たんだろっが。」

「なんでごこってわかったんですか？」

「勘だ。」

沙捲はそう言っつて香喃の手を引く。香喃は沙捲の手が光っていることに気付いき、眼を輝かせる。

「また飛ぶんですね？」

「悪いか。」

「いえ。」

二人の影は、あっという間に闇空へと消えていった。

春休み

高校は春休み。特に用もなく家にこもりきつっている。事件からだいぶたつたが、鷹西は学校をやめ、香喃もやつと息をつけた。ついでに、あの香喃を閉じ込めた女子は、あのあと香喃が魔力を使い、たつぱり脅かしてやったのもう手を出す気力もなくなったようだ。

「香喃。」

「なんですか？」

名前を呼ばれ、振り向く。

「なんでもねえ。」

「なんなんですか、さつきから！」

このやり取りはさつきから何百回も繰り返された。沙捲は相変わらず香喃の部屋に寝泊まりし、今はソファーに横たわっている。香喃はたまりにたまった雑誌の整理をしていたので、気を散らされるのはかなりきついことだ。もう作業がはかどらなくなり、香喃は伸びをして立ち上がった。

「どこいくんだ？」

「買い物です。何かほしいものあります？」

「俺も行く。」

沙捲はそう言って立ち上がった。香喃は雑誌の山を見て、あるものに気付いた。

「沙捲さん、暇なんですよね？」

「ああ。人生で一番な。」

「なら、ここ行きませんか？無料券ついてたんですよ。」

沙捲はあくびをしながらその券を見もしないで返事をする。香喃はかばんを手に取り、靴をはく。

「沙捲さん？来るんですか？こないんですか？」

「はいはい。行ってます。」

沙捲が寝起きのまま来ようとしたので香喃はあわてて止めた。

「髪とかしてきてください。もう遅いんですよ服も直してください。その格好じゃ絶対に寒いですって。」

沙捲は面倒くさがりながらも部屋に戻った。香喃もそれを見張りようやく服装が整った沙捲の手を引く。

「はやくしてください?」

「ふん・・・」

沙捲は手を握り返し、二人はだらだらと歩きだした。

ただ歩いて行くだけではつまらない、と思い香喃はこの機にとばかりに質問を浴びせかけた。

「ほかの魔法使い、っているんですか?」

「いる。お前にもわかるはずだ。ほかの人間と違うやつはたいいていそうだ。」

「へえ・・・そうなんですかあ・・・で、魔法って人前で使っていいものなんですか?」

「お前の自由だ。」

「沙捲さんは?・・・ちよつ!?!」

突然沙捲が香喃の手を握る。香喃が驚き振りほどこうとしてもままならない。

「なんですか?」

「前のやつ。」

「?」

見てみると、5、6人ほどの俗に言う「チンピラ」。だからなに?と問うと、沙捲は言った。

「狙われてんだよ。」

「沙捲さんが?」

「バカかテメエは。」

すると、予測通りチンピラは香喃に絡む。

「ね、一人？俺たちいいとこ知ってんだけど、遊ばない？」

香喃は事件後あまりこの手のことには動じなくなつたような気がする。

「あ・・すいません。これから予定があるので。」

香喃はそういつて沙捲を見た。すると、チンピラは沙捲をみた。

「いいじゃん。こんな頼りない彼氏放つて、俺たちと行こ？」

「いやです。」

香喃はかたくなに拒否する。それを見た男たちは無理やり香喃の腕をつかむ。

「なんですか？やめてください。」

「いいじゃん。そんなこと言わないでよあ。」

沙捲に目で助けを求める。すると、沙捲はため息をついて香喃から腕を離させた。

「僕たち、これから用事があるんですよ。こんなんじゃないくて、もつとかわいい子に目をつけたらどうです？」

ちよつとそれつてひどくない？そういつてやりたかつたがそれはどなり声で中断された。

「なんだと？生意気なんだよガキが！」

そういつて沙捲に殴りかかろうとする。が沙捲は静かに止めた。

「あの、やるならもつと人通りの少ない所に行きませんか？ほら・・目を引くつていうか・・僕、自分の弱みをさらしたくないんですよ。」

沙捲があまりにも冷静なのに逆にチンピラは驚いた。

「あ・・ああ。いいぜ？賢い選択だな。」

「しょ・・沙捲さん・・？」

香喃が心配していつと、沙捲は意地悪そうに笑つた。

「お前、剣道やつてたんだろ？」

「え？・・・あ・・・はいそうですけど・・・本当に大丈夫なんですか？
こういう人たちって人がいないと本当にやりますよ？」

「いいんだよ。俺としてもあんまり見られちゃ困るし。お前は自分で身を守れよ。魔法を使ってもいいが・・・まだ加減ができていないからな。なるべく使いな。」

「あ、そうですか。」

香喃は納得して沙捲について行った。

「さあてと、どうやっていたぶろうかな？」

そう言つて鉄パイプを握りしめた男が寄ってくる。沙捲はにっこりと笑つて香喃に見せるキャラを前面に出す。

「いたぶれるもんならやってみるよ。」

「ああ？何をいつてんだ？」

「しょーがねえな。殺さないほうが難しいんですよ？」

「ああ？なにいつてんだため・・・」

男の声は途中で途切れた。香喃が目線を追つてみると、沙捲の腕が変化し始めた。

「しょ・・・沙捲さ・・・」

香喃がおびえると、沙捲は優しく言った。

「大丈夫だ。」

沙捲の腕が真つ赤に燃え上がっているのだ。香喃はそれをみて幻覚だと理解した

「怖いですか？」

沙捲は男たちをあざ笑うように言う。普通ならここで逃げるのだが、男たちはまだあきらめていない。「沙捲さん・・・？」

香喃が沙捲に気を取られて一瞬の隙に、男の一人が香喃を押さえつける。

「やつ！・・・やめつ・・・」

手にはナイフ。沙捲は焦った。そして、小さく舌打ちをして香喃に言う。

「自分の身は自分で守れと言っただろ？」

「・・・う・・・」

香喃はバカにされ、悔しそうに息を漏らした。沙捲が呆れたように言う。

「ったく・・・こんなことしないとだめなんですか？がっかりですよ。」

「なんだと!？」

沙捲は一瞬のすきをつき、香喃の首近くにあつたナイフを手が切れるのも構わずはたき落した。

「香喃！自分でどうにかしろ！」

香喃はそう言われ、はじめたように鉄パイプを握りなおした。ゆつくりと立ち上がるうとする男の足をはらい、襲ってくる他の男もパイプで応戦する。勝ちを確信した時、急に視界が揺れる。

「なっ!？」

さつき足を払った男が香喃の腕を掴んで転ばせたのだ。バランスを崩した香喃に棒が振り下ろされようとした・・・だがいくら待っても衝撃は来ない。目を開けると、沙捲が男を押さえつけている。

「馬鹿！早く使え！」

香喃は鉄パイプを前から来た男に投げつけて気を集めた。また、簡単に魔力が集まる。

「沙捲さん、なにをすれば!？」

「なんでもいい！殺さない程度にだ！」

香喃は考えた。風を起こすといつても下手をすれば人を殺してしまうだけのことはあるだろう。そしてあることを思いつく。頭の中に浮かんだものを形にする。男たちの声がしたのを合図に香喃はゆつくりと目を開けてみる。・・・大成功。男たちはトカゲのような顔にコウモリのような翼。早い話、龍ドラゴンに追い回されているのだ。笑い出しそうになるのをこらえて見ていると沙捲が横にいた。

「ほお・・・思いつかんかったな。」

「あはは・・・私が魔法っていうとこれくらいしか思いつかなくて。」
そして香喃は沙捲の白いワイシャツが紅く染まっているのに気付い

た。他のことに気がそれたことにより、龍ドラゴンはきえた。

「沙捲さん！血です！血！！大丈夫ですか！？」

香喃のあわてぶりに沙捲は小さく笑い、大丈夫だと呟いた。

「大丈夫じゃないです！！あの・・・さつきですよね・・・すいません・・・私・・・」

香喃が泣きそうになると沙捲は取り乱した。

「なっ・・・泣くなって！おい？」

すると、香喃は意外そうに顔をあげる。

「沙捲さんがあわてるの、貴重ですね。」

「寝言は寝て言え。」

「ひどいですよ！？あの・・・本当に大丈夫ですか？魔法で治せたりとかします？私それだったらやります！」

「・・・まあできるが・・・本当にやるか？」

「だって・・・血が・・・教えてください。」

暗い路地でこんな会話をすることになるとは・・・内心そう思いながらも頼んだ。すると、沙捲は淡々と話し出す。

「いいか？魔力つてのは加える力と与える力つてのがあるんだ。加えるほうに特に手法はない。でも与えるほうとなると、色がつくんだ。」

「い、色？」

「色だ。与える魔力はいくつかの種類がある。で、今回は体がもちそうにねえから治癒だけ話す。」

沙捲の顔色が悪い。香喃は沙捲の首に指をあてる。

「なにやってんだ？」

「脈。弱くなってる。」

沙捲は春休みに入る直前の授業を思い出した。脈の正しい方を習ったような気がする。

「で、治癒の色は緑だ。だから、緑の魔力を思い浮かべて手を当てる。」

沙捲は香喃の手を自分の傷口へと導いた。

「傷が治るのを想像しながらその魔力を少しずつ流し込んでいく。」
香喃が言つとおりには治癒をはじめめる。

「これで・・・終わるときはどうすれば・・・？」

「手を離せばいい。」

香喃が手を離す。傷は跡かたもなく消えていた。

「サンキュ。」

「ほんとに治つた・・・。」

香喃は驚きのほうが大きかった。そして血まみれのシャツを見て、苦笑いした。

「今日はもう帰りましょう？そんな血まみれのシャツじゃ補導されかねませんよ。」

「でも、行きたかつたんじゃないのか？」

「いえ。券があつたから行つてみようつてだけですよ。沙捲さんに倒れられても困りますし。」

香喃は笑つて沙捲の手を取つた。

二人は、さっき来た道に戻つた。途中でさっきのチンピラにあつたが、香喃と沙捲が手を少し動かすと腰を抜かしながら走つて行つた。

アブナイお出かけ1

「・・・おい・・・おい・・・おい!・・・起きろっつてんだよ。」
「・・・ん・・・?」

不機嫌そうな声をした誰かに揺り起こされる。それでも目を閉じていると、いきなり走った衝撃。

「いつつたあああ!」

「自業自得だ。」

目を開けると、沙捲が目の前で仁王立ちしていた。手にはお手製のハリセン。香喃は起きないわけにはいかなかった。時計を見るとまだ5時半。どうりで外も薄暗いわけだ。

「なんでこんな時間に起こすんですか?まだ寝れるじゃないですか
ああ・・・んん・・・」

香喃が布団にもぐろうとすると、沙捲は布団を剥ぎ取った。

「今日は出かけるといっただろ?」

「こんなに早いなんて聞いてないいい・・・」

「いいから早く着替える。」

香喃はしぶしぶ着替え、洗面所で歯を磨いた。すると、沙捲が隣の部屋から言った。

「朝飯できてっから。早く食うちまえ。」

「へえ・・・珍しいですね・・・」

香喃がいくと、立派な料理が並んでいた。

「こ・・・これ沙捲さんが・・・?」

「いや・・・こいつらに頼んだ。」

そういつて指を指すと沙捲の後ろからぞろぞろと小さな人間が出てきた。

「なっ・・・どなたです・・・か?」

声を裏返らせながら、香喃は平静を保とうとした。沙捲は笑いをこ

らえた。

「ホビットだ。」

「ほ．．．ほびつと？」

「妖精だ。」

「妖精．．．」

香喃が呆然としているうちにホビットは消えていた。沙捲はホビットたちが作った料理を頬張り、香喃にも勧めた。香喃はソロソロとスクランブルエッグを口に運び、感嘆の声を上げた。

「おいし．．．これすごいおいしいです。」

「よかつたじゃねえか。」

沙捲は黙々と箸を動かしている。香喃もつられるように食べた。

「あ．．．」

明らかに不機嫌な沙捲に恐る恐る聞いてみる。

「なんだ。」

予想通りの返答。だが、これを聞かないと早く起こされた不満が募ってくる。

「どこ行くんですか？今日、出かけるとはいつていましたけど．．．こんな早くにいけないといけない所なんですか？」

「魔界だ。」

沙捲は服を整えながらいう。

「は？魔界？」

「そうだ。お前が魔法使いになる権利があるか、テストする。後は申請手続きだ。」

「そんなことしないといけないんですかあ．．．」

「テストは難しいがな。お前なら大丈夫だろ．．．加減さえできれば。」

「う．．．」

沙捲は香喃の手をつかみ、今となっては住み主がない等しい部屋

にはいる。

「っ・・ヶホツヶホ・・」

大量に巻き上がる埃を吸い、香喃は咳き込んだ。

「どこ行くんですか？」

「魔界。」

「魔界って・・・なら何でここに来たんですか？何か忘れものでもしたんですか？」

沙捲は香喃を強く引き、部屋の真ん中へ放り出した。

「わっ！」

沙捲も続き、何かを唱える。

「沙捲さん？なににして・・」

「何でここへ来たんだ、といったな。それはここが魔界の入り口だからだ。」

香喃が風を感じ、下を見ると、ぽっかりと穴が開いている。奥には闇が続き、思わず沙捲の腕をつかんだ。

「いいか。つかまってるよ。」

「えっ！ちよ、ちよっと！ちよっとまってる！」

香喃の頼みは闇へと消えた。その瞬間二人の体は穴へと吸い込まれていった。

ブラックホールのような穴は、二人を飲み込むと低い振動音を残して閉じていった。

アブナイお出かけ2

「いったああ・・・」

「平気か？」

腰を打ちつけ、香喃が地面を転がっているというのに、沙捲は平気な顔をして手を差し出す。香喃は手をとって立ち上がり、周りが暗いののに、なぜか細部まで見えることに気づいた。

「ここ・・・もしかして・・・」

「魔界だ。行くぞ。」

沙捲はスタスタと歩き出し、香喃もあわててそれにつづいた。

香喃が追いつくと、沙捲は淡々と説明をする。

「今日はお前が自分の力で魔力を使うんだ。テスト内容は告げられていない。その場できちんと頭を働かせろよ。」

「はっ、はい・・・あの、魔法使いってほかにも来てるんでしょうか？」

「来てるぞ。あとな、この世界では魔法使いなんて言葉はない。」

「じゃあ、なんて呼ぶんですか？」

「一般的には魔術利用師。それを略したのが魔術師だ。だが、他人に魔法を教えるようになった魔術師は魔術宣教師まじゆつせんきょうしという。それを略すと魔教師まきょうし。ほかにも、魔法を使う分野によって魔戦士ませんしや魔術癒師まじゆじゆし・いちいち説明したら何日もかかるくらいいるだろうな。」

「沙捲さんは何ですか？」

沙捲はコホンと咳払いして言った。

「俺はすべての資格を持っている。」

「す、すごいじゃないですか!」

沙捲は鼻で笑った。

「そんなやつはいくらでもいるさ。簡単なものが多いからな。俺だつてほとんどはかじっている程度だ。」

「へえ……」

そんな話をしていると、沙捲が立ち止まった。後ろを歩いてきた香喃は立ち止まったことに気づかず、沙捲の背中にぶつかると。

「わ……ちよつと急に立ち止まらないでくださいよ。」

「ここだ。」

沙捲が指差す先には、真つ黒な城がそびえたっていた。

沙捲は一言も話さずに歩いていく。

「しよ、沙捲さ……?」

香喃が口を開きかける。

「静かにしてる。喰われるぞ。」

「くつ、くわつ……うぐつ……」

香喃の口をふさぎ、沙捲は歩いていく。しばらくすると、手を離して話していい、と言った。

「喰われるつて、なにに!?!」

「悪魔、妖霊、鬼、幻獣……」

「も、もういいです……」

香喃はげんなりとうつむく。その様子に沙捲は笑っていった。

「大丈夫だ。お前の魔力なら対抗できる。」

「自信ないですよ……沙捲さんのテストってなんだったんですか?」

「俺は……確かドラゴンと戦わされた。」

「……もう受かる気がしません。」

香喃は意気消沈し、ふらふらと沙捲につれてかれた。

沙捲は大きな扉の前に立って香喃に注意した。

「いいか？ここから先はお偉いさんばかりだ。失礼のないようにしろ。死ぬのはいやだろ？」

「はっ・・・はい！」

固まる香喃に沙捲は苦笑いして声をかける。

「緊張するな。いざとなったら守ってやつから。」

「・・・ありがとうございます。」

沙捲がドアに手を当てると、勝手に勢いよく開いた。

「行くぞ。」

沙捲の言葉を聞き、香喃は部屋へと足を踏み入れた。

部屋はたくさんの方がいた。沙捲はその中を一直線に進んでいく。

「閣下。私の弟子を連れて参りました。」

まるで、中世のヨーロッパのような言葉遣いだなどと思いながら、香喃も沙捲につづいて頭を下げる。沙捲の話している相手は、閣下というには無理のある小さな老人だった。その老人はゆっくりと口を開いた。

「ほう・・・その娘がそうなのか？」

「左様でございます。」

「娘よ。こちらに來い。」

香喃は一瞬と惑ったが、沙捲に目で促され、老人の足元にひざをついた。

「では、魔力の階級を確かめる。」

香喃の頭に手が置かれる。すると、体が浮くような感覚が襲う。次の瞬間、香喃の魔力が燃え上がった。

「おお！虹色の魔力とは・・・」

老人は驚いたように手を離し、香喃を見た。すると沙捲が口を開いた。

「私が魔力を目覚めさせました。すさまじい才能の持ち主だとわか

り、ぜひ魔術師として成長して行ってほしいと思っております。」

「おお・そのとおりじゃ。娘よ、名を何と言つ?。」

「西兼香喃です。」

「そうか。香喃。おぬしには、魔術師としての資格があるかテストを受けてもらう。時間になったら使いを送ろう。それまでレインと待っておれ。」

「?。」

レインとはだれか?そう思い、首をかしげると、沙捲が腕引っ張った。

「あんな、魔術師には二つ名前があるんだ。続きはゆっくり話すから。早く来い。」

老人に一礼し、早足で去っていく沙捲に、香喃も同じように一礼し、あわててついていった。

「ま、待ってください沙捲さん!。」

香喃がいうと、沙捲は立ち止まった。そして、香喃が追いつくと今度はゆっくり歩き出す。

「名前が二つってどういうことですか?。」

「ひとつはお前の知るとおり、沙捲。魔術師だって元は人間だ。自分のもともとの名だ。もうひとつは、魔術師と認められたときのみ与えられる名前。主に洋名ようめいだ。俺は、レイン・ストライフ。お前にもじきに与えられる。」

「レイン・ストライフ・雨って意味ですか?。」

「ああ。」

沙捲は悪魔を模った椅子に座った。香喃も恐る恐る座り、沙捲に聞いた。

「沙捲さんと話していた人誰ですか?。」

「魔術を生み出した帝王だ。」

「あの人・・・ですか?。」

「何度も言わせるな。」

沙捲は椅子に深く腰掛けた。

「もうそろそろだ。しゃべってばかりいないで精神統一でもしろ。」

「私、やり方知らないんですけど？」

「目を閉じて何も考えなきゃいい。」

香喃は言われたとおり目を閉じた。その後10分もしないうちに使いが来た。

「いよいよだぞ。」

「はい。」

香喃は静まり返った部屋に足を踏み入れた。

アブナイお出かけ3

香喃は、沙捲と引き離され、部屋の中央へと通された。

「・・・」

「そう緊張するでない。」

帝王はそう言っ手て手を上げる。すると、低い振動を起こし、香喃と他の新米魔術師（以後略 生徒）を取り囲むように光の檻が出来た。「では、今から診断を始める。」
そう言っ横に居る使者に指示を出した。

「診断の内容を公表しよう。今回の内容は・・・ミノタウロスと戦うことじゃ。」

すると、牛の頭、人間の体をした怪物が鼻息荒く出てくる。香喃は体をこわばらせた。

「それぞれ剣を渡す。一人ずつ戦ってもらっぞ。」

「・・・！」

生徒たちが驚くと、帝王は朗らかに笑った。

「大丈夫じゃよ。このミノタウロスはわしが作り出したものじゃ。攻撃されても痛いという感情はない。」

不安なのはそこじゃない、と言いたかったがグツとこらえた。香喃は沙捲を見た。眼が合うと、大丈夫だ、と頷き、香喃を勇気づけてくれた。

「さあ、始めよう！」

帝王が両手を上げると、衝撃音が走り、暗かった室内に明るいうランブがともる。香喃が周りを見回すと、大勢の観客がいる。そんな中、順番が決められた。・・・運の悪いことに香喃は一番最後。

もうやけくそだ！どうにでもなれ！そんな思いを抱きながら、枷の外れたミノタウロスを見ていた。

次々と名前を呼ばれた挑戦者が出て、また倒されていく。大概是殺される前にミノタウロスが止められ、死者は出ていない。あと二人で香喃の番だ。

号令がかかり、ミノタウロスが襲いかかる。あつという間に挑戦者はふつとばされ、檻にぶつかって気絶した。香喃は重い気持ちで次の挑戦者を見守った。香喃と同じくらいの女の子。長い黒髪を高い位置で結んでいる。

「佐賀希さかのぞみ……はじめ。」

かなり持ちこたえている。振り下ろされる腕をよけ、剣で果敢に切りかかる。だが、体格の差というのは恐ろしい。すぐに足を取られて希は頭を打ち付ける。意識はあるが立ち上がれそうにない。

「やめ！」

制止の合図がかかる。だが興奮したミノタウロスは止まらなかった。会場がざわめき。希の師が止めに入ろうとするが、檻に阻まれる。大きな斧が頭の上で振りかざされる。

「よせ！！！」

帝王が叫ぶがそれも聞く耳を持たない。香喃の体が考えるよりも先に動いた。剣を持ち直し、希とミノタウロスとの間に入る。そのとき、香喃は自分のしたことに気づく。

「あー！」

考える暇もなく斧が迫る。沙捲の音が聞こえる。私はまだ死にたくない。それは希も同じに決まっている。そう思うと魔力が勝手に手に集まる。それを強烈な怒りにまかせてミノタウロスにぶつけた。激しい揺れと爆発音。それでも香喃は持ちこたえた。もうもうと煙が巻き起こる。せき込みながら眼を開けると、黒焦げになったミノタウロスがいた。後ろには希が震えながら座っている。

「だ……大丈夫？」

「……あつ…………ありがとう。」

手をさしのばし、希を立たせた。すると檻が消え、パチパチと拍手

が聞こえてきた。

「合格じゃよ！おみごと！！」

帝王が香喃に寄ってきた。希はふらついてその場にしゃがみこむ。香喃はあわてて支えたが一緒に倒れ込んだ。沙捲が寄ってくる。希の指導者もだ。

「大丈夫か！？」

「え．．あ．．はい。大丈夫です．．」

希は指導者に抱えられている。二人は香喃を見ると、頭を下げている。

「ありがとうございます。」

「大丈夫ですか？」

「ああ。少し怪我しただけだ。」

そう言つて二人は救護室へと入つて言つた。

「あの、沙捲さん？」

「なんだ。」

「私、合格なんですかね？」

「当たり前だ。」

「助けちゃったんですが。」

「あれは．．俺にもわからない。おまえはミノタウロスを倒した。

それは合格の値だろう？」

「はあ．．」

すると、帝王が香喃を呼んだ。香喃が行くと、入れ墨のある腕を握つてこう告げた。

「おぬしは合格した。名前を与えよう。」

そう言つて香喃を台に上がらせる。額に指を当て、光を帯びた何かを引き出す。それを玉座に置くと、見たこともない文字が浮き上がる。

「おぬしの真の名は．．ラナ．アーシャ。闇と光を併せ持つもの。」

「．．あ．．ありがとうございます。」

香喃はギクシャクと礼をし、玉座から降りようとした。が、こわば

つた足は玉座の段差に突っかかり、そのまま下へと体が落下した。
「!?!」

慌てて足をつこうとしたがそれもままならない。こんなところで死ぬの……?すると、誰かが自分を受け止めた。

「あ……」

「あ……じゃねえだろ?もう少しやせる。」

香喃は沙捲に文句を言おうとしたが、思わず笑ってしまった。すると、帝王がコホンと咳払いをして、言った。

「さて、テストは終わりじゃ。さあ!自由じゃ!飲んでくって騒いでくれ!!」

キヤラ崩壊。そうとしか言いようがない。普段の落ち着いた老人は飲んだくれの爺さんとなった。香喃は苦笑いしてそれを見つめ、歩いて行ってしまった沙捲を追いかけた。

「沙捲さん?パーティー、行かないんですか?」

「……」

「沙捲さん?」

香喃が呼ぶと、沙捲は真っ赤な顔で振り返った。ふらふらと揺れ、そのまま倒れた。

「沙捲さん!!?!」

香喃が駆け寄り、ゆすると、沙捲はうつすらと眼を開けた。

「沙捲さん?具合悪いですね!?きゅ……救護室……!」

香喃は沙捲の頭の下に手を差し入れ、周りをきよるきよると見回した。すると、沙捲は起き上がった。

「大丈夫だ。」

「大丈夫じゃないでしょう!?無理しないでください。どうしたんですか?」

「……いや……わからん。」

「誰か呼ばないと……」

香喃は沙捲の額に手を当て、熱さに驚いた。

「熱・・・口開けてください。」

「あ?」

「喉見るんです。風邪なら腫れているはずですから。」

思ったより素直に口を開けたので、香喃は喉をのぞいた。予想通り腫れている。

「とっ・・・とりあえず、どこかで横になったほうがいいです。」

香喃はそう言って沙捲に肩をかし、ゆっくりと歩く。ドアを開けると、広々とした休憩室があった。ちょうど横になれるソファもある。

「そこ、寝てください。今何か飲み物でも持ってきますから。」

香喃が冷蔵庫を開けると、たくさんの冷えたドリンクが置いてあった。

「沙捲さん。水とジュースどっちがいいですか?」

「お茶。」

どっちかじゃないし・・・そう思いながらも探すとお茶があった。沙捲の元に行くと、さっきよりも熱が上がっているようだった。

「お茶です。飲めますか?」

「ああ。」

香喃は少し考えてから部屋を飛び出した。後ろで沙捲の驚いた声がした。

「おい!??どこいくんだ!??」

「だれか人を呼んでくれます!寝てください!」

だんだん遠くなっていく足音を聞きながら沙捲は眠りに落ちていった。

アブナイお出かけ4

「わっ！・・・すつすいません！！」

「おっと・・・大丈夫かい？」

角で思い切り人とぶつかる。顔を上げてみると、希の指導者だった。香喃に手を貸して起き上がらせると、頭を下げた。

「さつきはありがとう。・・・そんなに急いでどうしたんだい？」

「そっ・・・それが、沙捲さんが倒れて、あのっ熱があるんです。すごくー！」

香喃はあわてて話した。

「香喃ちゃん、だったね。いや、ラナ・アーシャか。僕は、魔界だとガザって言われてるんだ。ガザ・スト ヴァ。人間の名前だったら雄太なんだけどね。よろしく。」

「はっ、はい。よろしくお願いします。あ・の・・・」

香喃が足踏みすると、ガザは分かった、と頷いて香喃の指さす部屋へと走った。

沙捲は、ソファアに横になっていた。香喃は沙捲を覗き込む。脇からガザも顔を出し、額に触れた。

「ツチ・・・酷いな。」

「どうしたら・・・」

ガザはしばらく考え込んだ。

「レインは、何か変なものを食べたり飲んだりしなかったかい？」

「え・・・たぶんしてないと思います。パーティーにだって行っていませんし・・・」

ガザは沙捲の頬を軽くたたき、沙捲を起こした。

「おい、大丈夫か？」

沙捲は薄く目を開けてガザを見た。すると、眼を見開き起き上がった。

た。香喃がそれを止め、沙捲を寝かせる。

「このまま救護室に連れていく。いいな？」

「ああ・・自分で歩ける。」

起き上がるうとする沙捲を、ガザは大きな腕で抱え、スタスタと歩きだした。

「離せ。」

「無理は禁物だ。もうつくから我慢しろ。」

香喃がドアを開け、4人は救護室へ入った。

「おい！いないのか？」

ガザが言うと、何もなかった空間に小柄な女性が現れた。香喃が驚くと、ニツコリ笑って話しかけた。

「あら、新米さん？はじめまして。」

「は・・・はじめまして・・・」

茫然とする香喃にガザが説明する。

「ミラ・レヴェル。ここのドクターだ。ミラ、レインの様子がおかしい。」

ミラは沙捲を診察し始める。

「かわいそうに・・・苦しいわね・・・」

「大丈夫なんですか？」

「・・・ちよつと、・・・隣で話しましょう。」

ミラはそう言つて沙捲を残して隣の部屋へと移った。

この部屋はホルマリン漬けばかりだ。香喃は吐き気を催し、口を押さえた。

「あら・・大丈夫かしら？」

「だ・・大丈夫・・で・・?っ」

香喃は深呼吸し、自分を落ちつけた。様子をしばらく見て、ミラは話しだした。

「レイン君、今は落ち着いてるけど、危険よ。・・・」

「なにが原因だ？なんでこんな・・・」

ガザが言うと、ミラは言いずらそうに眼を泳がせる。そして口を開

いた。

「原因は分からないわ．．．でも、病名は明らかよ．．．聞きたい？」

香喃を見て言う。ゆっくりうなずくと、ミラは言った。

「．．．死熱病。」

「！．．．嘘だろ？」

二人の反応を見る限り、悪いのはわかる。香喃は具体的に聞きたいと言った。ミラが口を開こうとしたが、ガザが遮った。

「．．．死熱病というのはな、自分の体温のせいで死ぬんだ。レインはいまのところ免疫のせいで進行はしていないが、最高温度は60度以上。そのせいで細胞ごと熱されて最後は死に至る。しかも、熱が上がっても、脳が死ぬのは最後だ。患者は、全身が焼けるのを感じながら苦しむ。」

「そんな．．．でもそんな病気聞いたこともないですよ？本当に．．．？」

「本当よ。この病気は魔界では起きなくなったはずなのに．．．誰かが意図的にウイルスを入れたとしか思えないの。」

香喃は、そっぴと二人に提案した。

「治るんですよね？だったら薬をもってきて．．．」

「この病気、本当だったら何億年も前に滅びているはずなの。だから当然薬だっぴ一緒に滅んでるわ。」

「じゃあ．．．私、帝王様に相談してきます！あの人、魔力を生ま出した人なんですよね？」

香喃は立ち上がった聞いていた。

「あ．．．ああ。そっぴだ？」

「じゃあ、何か治療法を知っているかも知れないじゃないですか！？」

「だがない．．．」

「沙捲さんをみすみす死なしたりなんてしませんよ！私、約束しちゃったんですから。」

走って行った香喃をしばらく見て、ドアを振り返る。二人はビクッと体を硬直させた。

「・・・お・・・お前、いつから・・・？」

ドアの横には沙捲がもたれかかっていた。二人は起き上がれないと思っ て鍵をしなかつたのだ。沙捲は宙を見つめていった。

「香喃が吐きそうになつたところからだ。」

「ツチ・・・」

「つまり初めからってことね？」

ミラはため息をついて沙捲を座らせた。

「動くとそれだけ進行が早まるのよ？ 安静にしていなと・・・」

「ふ・・・」

ガザは覚悟を決めたように笑う沙捲を見つめた。

「約束・・・か・・・。馬鹿だなあいつ。」

沙捲は苦笑いした。ガザはなるべく明るくふるまつた。

「約束ってなんなんだ？ 約束したっていったが・・・」

「俺が死んだら、あいつも死ぬそうだ。」

「・・・いい子じゃない。あなたの柄じゃないけどね。」

3人は沈黙し、気づいた時には沙捲の寝息が静かに響いていた。

「ハア・・・ハア・・・あ・・・の・・・」

香喃は膝に手をつき、息を切らしながら帝王を見た。

「どうしたどうした？ そんなに焦って。」

「しょう・・・じゃなくて・・・レインさんが・・・」

「？ なんじゃ？」

帝王が聞き返すと、香喃は自ら玉座に上がって一礼した。

「レインさんが・・・死熱病にかかったみたいなんです。」

「ほっほっほ。冗談を言うでない。あの病気はわしがここを作りだしてからわずか20年で滅びた病気じゃよ？ 今頃起こるわけがない。」

「

笑いながら言う帝王は香喃は怒鳴りつけた。

「本当です！今こうしては全速力で走ってきて、わざわざ嘘言っ
わけないじゃないですか！？ちゃんと聞いてください！」

「！・・・しかたない・・・見に行くかのお・・・」

帝王はその場に立ち、次の瞬間には煙だけを残して掻き消えていた。
茫然としていると、新たに煙が起こった。

「おお、もうしわけない。おぬしを連れるのを忘れておったわい。」

「えと、救護室です。」

帝王は香喃の腕をつかんだ。二人は煙だけを残して掻き消えた。

「？・・・？え・・・」

「まだきつかったかの？もうしわけない。」

香喃はしゃがみこんで強烈な吐き気をこらえた。目の前の景色がグ
ルンと回る。落ち着いてから病室を見たが、沙捲はいない。

「あ・・・あれ？」

移動の衝撃に気づいたガザが手招きをする。

「こつちだ。」

「あ・・・はい。」

帝王はすたすたと歩き、沙捲を見て、眼を見開く。そして、香喃を
見て頭を下げる。

「すまんの。おぬしは嘘を言っていなかったのぉ・・・しかしこれ
は・・・」

「治療法をお聞きしたいんです。」

「・・・無い。いや、無いわけではないが。限りなく無いにちかい。」
香喃は必死に言った。

「あるんですね？教えてください！」

「わしの・・・倉庫なんだが・・・」

倉庫、と聞くと、ガザとミラは体を硬直させた。

「どうしたんです？」

「い・・・いや。倉庫と言うと・・・良い思い出が無いような・・・」

「同じく。」

「ほっほっほ。素直じゃのお・・・」

「なんでそんなに・・・？」

「化け物に襲われた。」

二人で声を合わせた。

「そ、それって二人で行ったんですよね？」

「いや、違うな。俺はガゴイルに。」

「私は、バハムートだったかしらね。」

帝王は朗らかに笑った。

「わしもいまじゃ制御不能だからの。そこに薬があつたような気もするんじゃないが・・・」

香喃は生唾を飲み込んで言った。

「私、行きます。どうせ放っておいても死ぬんですし。」

ガザとミラは約束を本気で守る気だというのを感じた。

「ならばわしが送ろう。おぬしらは、行かんのかね？」

帝王と香喃は意味ありげに二人を見た。すると、二人はため息を吐いて言った。

「行きますよ。行けばいいんですね？」

香喃は大きくうなずいて、もう一度沙捲の横に立った。しゃがんでうつすらと開いている沙捲の眼と眼を合わせた。

「行つてきます。沙捲さん。」

「・・・よせ。」

「やですよ。とにかく行つて来ますから。・・・死んだら駄目ですからね。」

「・・・無理言つな。」

沙捲は苦笑いしてまた眼を閉じた。香喃は立ち上がって、帝王に言った。

「さ、行きましょう。」

「おお。威勢のいい娘じゃな。気をつけよ。わしから、これを渡そうと思つ。」

そう言つて、帝王は手の中に防具と武器一式を呼び出した。全てをつけさせ、簡単に説明する。

「魔力の度合いによつて使い道と威力も変わるぞい。上手く使いなさい。」

「あ・・ありがとうございます。」

香喃は防具が重すぎてふらふらとしている。

「ほっほっほ。重すぎるのお。」

そう言つて手を触れると、何もつけていないのように軽くなった。

「薬は一番奥じゃ。健闘を祈る。」

「はい。」

3人は、帝王の手によつて倉庫へと移動させられた。部屋には煙と静かな寝息だけが残つた。

アブナイお出かけ5

「つつつ．．．」

やはり、この引つ張られるような感じにはなれられそうもない。

「大丈夫か？」

ガザが小声で言った。

「はい。」

「やっぱり慣れないわねえ．．．」

ミラは埃を払い落しながら言った。倉庫、といつても自然の中にポンポンと荷物が置いてあるだけだ。

「どこにあるんでしょうか．．．」

「奥つていつてたけど．．．どこが奥なのかしらねえ．．．」

香喃は森を指さして言った。

「森の奥じゃないですか!？」

そついつて歩きだした。二人はやれやれという感じで行った。

「ラナ?どこだ?」

「ここです。」

ガザが呼ぶと、上から声が聞こえた。

「おつ．．．おい!？」

木の上から二人を見て、香喃は手を振った。二人は、香喃の後ろを見て硬直する。

「お．．．い．．．ゆつくり後ろを向いてみる。」

香喃が不思議に思つて後ろを向く。がその瞬間、猿とも猫とも似つかない生き物が香喃に襲い掛かる．．．?

「ラナ!今助ける!」

ガザが木の上に登ろうとすると、香喃は笑つて手を振った。

「大丈夫ですよ。この子何にもしませんから。」

恐る恐る木に登り、二人が香喃を見ると、襲いかかったと思われた生物は、猫のようにゴロゴロと喉をならして香喃にすり寄っている。「どうしたんですか？」

「どうって・・・なあ・・・？」

ガザが後から来たミラに言うと、同じように首をかしげた。

「どうやって手懐けたの？」

「え・いや・・・居たんで道でも知ってるかなと思まして・・・」
二人は顔をひきつらせて笑い、落ち着いてから香喃に聞いた。

「で、道はわかった？」

「ええ。やっぱりこの森の奥でいらしいんですけど・・・それが「それが？」

「危険なんだそうです。この子の仲間もたくさん食べられてるみたいで・・・でも、間違いはないそうなんです。」

「・・・どうするきなの？」

念のためにミラが聞いた。

「行くに決まってるじゃないですか？行くしかありません。」

香喃はきっぱり言い、木から飛び降りた。二人もすぐに香喃についていった。

「気をつけないとな・・・ここからは最低限の会話しかしないようにする。いいな？」

ミラと香喃は頷いた。が、香喃はあわてて二人に聞いた。

「あの、しよ・・・じゃなくて・・・レインさんにウイルスを混入させたのって誰なんですか？」

「・・・」

ミラが俯く。ガザが重い口を開いた。

「ミラの・・・指導者。それしか思いつかないんだ。」

「!?そんなこと・・・!」

ミラが香喃に言った。

「あるのよ。私の指導者は、・・・もう縁は切ったんだけどね。最悪の人だったわ。」

ミラに代わってガザが言った。

「名前は・・・ライ・グランフォーナ。レインの恋人だった。」

「レインさんに恋人なんていたんですか?」

「いたんだよそれが。そんでな、ライは性格が悪かったんだよ。そしてレインに振られた。」

「そこからレインに逆恨みするようになったのよ。」

「・・・そうなんですか・・・」

香喃は考え込んだが、すぐに二人に言った。

「殺させませんよ。そんな人に。早く行きましょう。」

「おうっ。」

ガザは返事をして、いつまでも俯いているミラを引っ張った。

「・・・悪いのはミラさんじゃないです。早く薬を見つけて帰りましょう?」

「そうね。」

香喃が言つと、ミラも歩きだした。

森の奥に入るにつれて、ガサガサという物音があちこちで響くようになった。最初のうちはその度に足を止めていたが、もう気にすることはしなかった。

すると、ミラが二人に叫んだ。

「あつたわ!!あれよ!!」

ミラに続き、二人もかけだす。

「ほら薬よ!やったわ!」

ミラが薬を手にとったと同時にその体が地面に打ち付けられる。香喃が眼を見開き、ミラを見ると足を植物のつるのようなものから

めとっていた。

「ラナ！取って！」

ミラはひるむこともせず、香喃に薬を放る。香喃はそれを受け止めてガザに渡した。

「うっああ！」

悲鳴を聞き、香喃は振り返って弓を引く。だが、矢が放たれることなく、香喃も腕ごと蔓にからめとられた。香喃はまだ無事なガザに叫んだ。

「一人で行ってください！はやく沙捲さんを！」

「ふざけるな！置いてなんか行けるか！」

「早く・何のために来たと思っているんです？・ぐっ・大丈夫ですから・」

ミラも香喃の後に続いて言った。

「そう・よ。早く行って・」

「だがな・」

ガザがまだひかないので、香喃は足元に火の球を放った。

「つつっ！なにすんだ！？」

「早く行かないと殺します。」

香喃は本気でガザに攻撃した。ガザは飛び退りながら辛そうに顔をゆがめた。

「悪い・生きるよ。すぐに迎えに来る！」

「・死にませんよ絶対に。」

蔓に絡まれた二人を残し、ガザは掻き消えた。

アブナイお出かけ6

「ミラさん・大丈夫ですか？」

香喃が自分自身も締め付けられながら言った。ミラは空気を漏らしながら返事をした。

「ははっ・・・まだ余裕・・・あなたは？」

「ちょっと・・・危ないかも・・・しれないです・・・」

肺から空気がどんどん抜け出していく。香喃は必死になって喘ぐが空気はほとんど入ってこない。

「どうする？植物よね、これ。焼いてみよっか。」

「・・・ええ。それしかないですね・・・」

二人が魔力を集め始めると、甲高い悲鳴が響き渡った。

「おやめっ！！！殺してやるわよ！！！」

ミラがビクンと体を震わせた。それと同時にきらびやかなドレスを身にまとった女が現れた。二人をなめまわすように見て、ミラに気づくと、ニヤリと笑った。真っ白な歯が、真っ赤な唇によく目立っていた。

「ミ〜ラア？なにをしてるの？あなたはまだ私の弟子よお？あらしの小娘は？」

香喃の体に鳥肌が立った。女は美しかった。誰もが振り向くような絶世の美女。だが、眼が違う。血のように紅い眼。その中にはどす黒い怨念がこもっているのが見て取れた。

「ミラ？その小娘は？」

「・・・」

ミラは黙っている。香喃は頭に血が上るのがわかった。

「ミイラア？聞こえているなら返事をしなさい！！！」

ミラがおびえて顔をそむける。香喃はついに怒りが爆発した。

「ミラさんはあなたの弟子なんかじゃない！！あなたにそんな権限あるわけないじゃない！！小娘小娘五月蠅いのよ！！！」

「!・・・ああら、な・ま・い・き。」

そう言つて女は閃光を飛ばす。がそれは香喃をからめていた蔓に当たり、香喃は地面に落ちた。

「・・・沙捲さん・・・いえ、レインさんにウイルスを入れたのはあなたなんですね!!」

「あら、あたりよ。」

ライはつかつかとミラに歩み寄つた。

「ミラ?なにをおびえているの?私はあなたの母親なのよ?」

「ち・・・ちが・・・う・・・!違う!!」

ミラは激しく首を振つた。涙が散り、地面にしみ込んだ。

「あなたは私の物・・・私の子。」

ライがミラの頬に触れた。だがライの体は凄まじい勢いで5、6メートルほど吹き飛んだ。

「ミラさん・・・こつちへ。」

香喃が魔力の球を放ち、ミラに静かに言つて庇うようにたつた。

「本当に・・・あなたはライの子なんですか?」

「ええ。本当よ。私は・・・嘘をついてたわ・・・」

泣きそうになりながら香喃に言つた。香喃はミラの腕をとつて立ち上がった。

「いいんですよ。血のつながりなんて関係ありません。いくら悪い人の腹から生まれたからって、子供が悪人になるわけじゃないですもの。」

「・・・ありがとう・・・」

その時、ライの指先から閃光が飛んだ。香喃は用意していた盾をかざした。すると、盾は鏡のように閃光を跳ね返す。

「戦えますか?」

「ええ。」

「じゃあ、私はライの気をそらします。最後はあなたが終止符を打ってください。」

我ながら、くさいセリフだとは思つたが、これが一番当てはまるよ

うな気がした。ミラは血のつながりのせいで長年苦しまされ、悩んできたのだ。香喃は原因を作ったライが許せなかった。

「行きますよ・・・1・・・2の・・・3!!」

香喃の合図と共に二人は駆けだす。ライは香喃に眼をつけた。

「小娘がああああ!!」

狂ったように叫び、香喃に閃光を飛ばす。香喃は盾を前に放りなげた。閃光が香喃の腕を切り裂く。生温かい血が噴き出すが、気にせず走る。ミラを守りたい。沙捲を苦しませたライが憎い。怒りが渦巻く頭でその言葉だけが回っていた。ライが投げた短剣が頬をかすめた。香喃は剣を振りあげてライの腕を切った。

「ははは！はずれよ！」

勝ち誇った笑い声が途中で爆音にかき消された。香喃が膝から崩れ落ちながら見ると、ミラが魔力の球を放って気絶したのがわかった。

「はあ・・・はあ・・・!!?」

香喃はライを見ていて体をこわばらせた。ライはまた起き上がったのだ。香喃の腕はもうぶらりと力なくぶら下がり、何も持てそうにない。足も・・・いや、体全体が限界を超えていた。

「あははは！コロシテヤル・・・殺してやるわよ!!」

ライが剣を振りかざすのが見えた。剣先が香喃に迫る。香喃は眼を閉じて声に出さずに名前を呼ぶ。

『沙捲さん・・・』

ガキインという音が聞こえた。香喃が眼を開けると、見慣れた男が立っていたような気がした。

「バアカ。つめが甘いんだよ。・・・でも・・・サンキュ・・・な

なぜか懐かしく感じる声を聞きながら、香喃はゆっくりと眼を閉じた。誰かが髪を優しくすいていた。

薄れていく意識に抗わず、香喃は気を失った。

アブナイお出かけ

「沙捲さん！薬持ってきました！沙捲さん！！??」

香喃は沙捲の居る部屋にドアを蹴破るように入った。部屋にはたくさんの人が集まっていた。ミラも、ガザも、そして希までもが集まっていた。その人々は全員泣いている。

「う・・・そ・・・」

香喃は茫然としてつぶやいた。ミラたちの中心には棺があった。香喃は逃げたくなる衝動を必死にこらえて棺の中を見た。

「う・・・そ！！うそよ！！そんなのうそ！」

中には冷たくなった沙捲が入れられていた。額には苦しんだ跡・汗や涙の跡が無数にあった。

「沙捲さん！？嘘ですよね！嫌！！沙捲さんほら薬持ってきましたから！！起きてください！！」

香喃の声は鳴き声となって消え始める。希が香喃を抱きしめた。希もすすり泣いていた。

「いや・・・いや・・・だ・・・」

香喃は沙捲の頬に手を当てる。氷のように冷たい肌に触れ、香喃は実感する。

・・・もう声は聞けない。あの減らず口も聞けない。光の宿った眼を見れない。鼓動を感じられない。笑った顔も、怒った顔も一生見ることはできない。暖かい光は消えたんだ。

「いやあああ！！！」

香喃は棺の前で泣き崩れた。

「・・・だがこんな・・・娘が？」

「・・・みたんだ！この眼で！」

怒鳴り声が聞こえる。今のこれは夢なのか、現実なのか、さっきのが夢なのか、現実なのか香喃は寝起きで回らない頭で考えた。頬は涙でぬれ、ひんやりとしていた。

「・・・起きたか？」

「・・・しょ・・・ま・・・さん？」

香喃は体を起こした。ハツとして斬られた腕や体などを見るが、傷跡どころか、不具合は全くない。夢？・・・沙捲さんも元気だし・・・。

「・・・？」

沙捲は口の端で笑って言った。

「薬、ありがとよ。」

「！・・・」

香喃は夢でないことを確認し、安心したように笑った。だが、一つ気がかりなことがあった。

「ミラさんは大丈夫ですか？ライが・・・」

「ライは投獄された。ミラの傷はひどくない。お前に比べたらずっとな。」

「でも、どこも痛くないですよ？変じゃないですか？」

「お前、何日眠ってたと思ってんだ？」

「え・・・せいせい・・・1日？くらい・・・」

沙捲はため息をついた。

「3日だ。傷がひどかったからな。」

「3日・・・え！？じゃあ学校！！」

「俺がごまかしておいた。」

今度は香喃がため息をついた。

「あの・・・さっきの怒鳴り声って・・・」

その時、ドアが勢いよくあいた。

「悪いラナ！起こしたか？」

「ガザ・・・今のが一番五月蠅い。」

沙捲がフーツとため息をついた。ガザは笑って自分の陰に隠れている人物を部屋へと導いた。

「ラナ？大丈夫かしら？」

「ミラさん!？」

香喃が驚いて立ち上がる。沙捲も一緒に立ち上がった。

「平気なんですか？」

「ええ。ありがとう。」

「ラナ、そっちは大丈夫か？」

ガザが聞くと、香喃は頭を下げた。

「薬、ありがとうございました!間に合って本当に助かりました!」
ガザがチラリと沙捲を見る。すると沙捲も苦笑いして3人に礼を言った。

「さんきゅー・・・。」

「よろしい。」

ミラも満面の笑みで言った。そして、香喃に切り出した。

「あのね、ラナ。帝王様がラナにお話があるそうなの。もう大丈夫かしら？」

「えっ・・・あ・・・はい。すぐ行きます。」

香喃は沙捲に上着を手渡され、帝王の元へと向かった。

「ここからは、二人でね。」

「ありがとうございます。」

香喃はミラ達に礼を言い、扉を開けて進んだ。

「おお来たか。待ちわびておったぞ。」

「すっ・・・。」

香喃が謝ろつとすると、沙捲が口をふさいでいった。

「すみません。傷がひどかったもので回復に時間がかかったのです。」

「おお・・・そうか。いいのじゃよ。」

帝王はうんうんと頷き、香喃に手招きした。

「ライの件は本当に悪かった。わしもライの位置を認識できなかったのじゃよ・・・痛い思いをしたじゃろう。」

「・・・いえ。平気です。」

香喃は頭を下げた。すると帝王は言った。

「防具なんじゃが・・・今わしが使おうと思ったんじゃ・・・だが、わしを嫌がりおつてな・・・」

「嫌がる・・・？物が・・・？」

沙捲が香喃に説明した。

「魔力のあるやつが物を作ると意志を持ったものが生まれることがあるんだ。」

「はあ・・・」

「で、こいつらがおぬしを気に入ったようだな。おぬしにやろう。」

帝王は香喃に防具を渡した。カタカタと防具が震えて勝手に床に降りた。

「あとひとつ、提案がある。」

「・・・？」

「ここにとどまらんか？おぬしの魔力は珍しいのじゃよ。わしとしてもいろいろ調べたい。」

香喃は沙捲を見た。香喃は身寄りもないし、学校が大好き、というわけでもなかった。

「でも・・・」

「お前の好きなようにしろ。」

沙捲もそう言って帝王に向き直った。香喃はしばらく考えた。数分後、考えをまとめ、はっきりと言った。

「私は・・・人でいたいんです。普通の世界で、ちょっと魔法が使える程度でいいんです。だから・・・」

帝王はわかったと頷き笑顔で返してくれた。

「おぬしならそう言うと思った。だが、たまには顔を見せておくれ。」

「はい！」

「レインをたのむぞ？」

「え！？・・・あ・・・ハイ。」

香喃はとりあえず返事をしたが、ふくれる沙捲を見て笑ってしまった。

「好きなだけここにいておくれ。さあ、戻ってよい。」

二人は部屋を出てミラとガザに迎えられた。

「なにを話したの？」

「・・・むぐっ！？」

香喃が口を開きかけると沙捲が塞いで早口で言った。

「なんでもない。部屋へ戻るぞ。傷の具合を見よう。」

香喃を半ば引きずるようにして、沙捲は部屋へと向かった。

「どうする？もう少し見学でもしてから帰るか？」

香喃は眼を輝かせた。

「はい！行きたいです！！」

二人は昼間だというのに真っ暗な外へと観光に出かけた。

アブナイ観光

観光に行きたいと言ったのは自分だ。でも、どこに行きたいとは伝えていないはずだ。

「しょ・・沙捲さん？ここ・・もしかして・・」

「墓場だが？」

香喃は頭を抱えてしゃがみこんだ。沙捲は驚いて香喃を見た。

「具合でも悪いのか？」

「・・これから悪くなるんです。」

香喃は皮肉交じりに言ったが、沙捲はスタスタと墓場の内部へと歩いて行ってしまう。ここで一人になったら・・そう考え、香喃は全速力で走った。

「はっあ・・・」

「なんでそんなに急いでんだ？」

「墓場だからです！なんで観光なのに墓場なんですか！？」

沙捲は首をかしげたが、香喃はなおも言った。

「普通墓場っていうのは、肝試しとか、あと身近な人が死んだときとかに来るんです！」

「そうなのか？」

キョトンとする沙捲に香喃はこころ一番のため息をついた。

「も・・いいです・・」

「？」

「で・・どこに連れて行ってくれるんですか？」

二人は歩き出した。香喃は沙捲について行くのみだ。

「有名な観光スポットだ。」

「この国の観光スポットが想像できません。」

香喃が言うと、沙捲は言った。

「墓場は通り道だ。怖いんだろ？」

「・・・ハイ・・・だつて・・・」

「わかつてるさ。人間ならみんなな。早く行くぞ。」

香喃の手を引いて、沙捲は一気にかけてだした。

「ちよつ・・・沙捲さん！早いですつて！」

香喃は両足が浮きそうなほどのスピードに必死に耐えていた。

「着いた。」

「ケホツ・・・ツハア・・・」

息を切らして沙捲を見ると、背後には巨大な城があった。香喃は啞然として沙捲に聞いた。

「なんですかここ・・・？」

「城だが？」

「いや・・・だからなんでここに城があるんですか？何の城ですか？」

「昔はここが魔界の宮殿だったんだがな。今はあの城に移ってからここは観光にしか使われてない。」

「観光？こんな・・・とこで？」

沙捲はニヤツと笑つて城を見た。

「ああ。肝試しにはもつてこいだ。ここ最近は中で気絶するやつが多いからあんまり客は来てねえからな。」

「きつ・・・肝試し!？」

「ああ。」

沙捲はスタスタと歩いて行く。

「沙捲さん!？行きたくないですつ・・・」

「待つててもいいぞ？外はもつと怖いぞ。」

そう言つて沙捲は香喃の後ろを指さす。香喃が思わず見るとさつきまで何もなかった墓場には、気味の悪い霧が広がっている。もう1

メートル先も見えないほどだ。

「しょ．．うま．．さん．．」

「怖いなら一緒に来い。あの霧は尋常じゃないぞ？」

そういつている間にも香喃の腕や足には冷たい霧がまとわりついてくる。

「で．．も．．」

「はあ．．ほら来い。別に死にやしねえよ。」

香喃は頭を抱えて深いため息をついた。

この人、根本的に違う．．．違うって．．．

「しょ．．うまさん．．何しに来たんですか．．？」

「．．．忘れもんだよ。」

沙捲は香喃の想像もしなかったことを口にした。

「もうそろそろここも老朽化してきたからな。崩れる前に取っっておかないと。」

「何をです．．？」

「ブレスレットだ。」

「はい？」

沙捲は自分の腕を香喃に見せた。そこにはつつすらと何かをはめていた跡があった。

「なんで無くしたんですか？」

「前ガザとここへ来たんだがな。その時は本当にビビってブレスレットを落として逃げちまったんだ。」

「前．．って．．」

香喃は沙捲の長寿のことも考えて聞いた。

「俺がまだなりたての時だった．．から、実年齢20くらいの時だ。」

「．．．．」

その時、足元でガサガサと何かが動く音がした。

「きゃああ!!」

香喃は体に冷や汗が吹き出すのを感じた。だが沙捲は鼻で笑って香喃を落ち着かせた。

「ただの枯れ葉だ。．．しかも踏んでいるのはお前だ。」

「あ．．」

香喃は沙捲の腕を赤面してゆっくり離した。

「すいませ．．ん．．」

「．．俺も昔はそうだった。気にすんな。」

沙捲は珍しく香喃を馬鹿にしなかった。香喃はポカンとしてしまつて慌てて先に行った沙捲について行った。

「わ!?!．．ちよつと急に止まらないでください。」

「．．ここだ。」

沙捲が急に立ち止まったため香喃は背中に思い切りぶつかった。

「ここ?つて．．」

「死刑場。」

「しつ．．死刑場!?!」

「静かにしろ。声でいろいろと集まってくるぞ。」

「．．．」

沙捲の一言で香喃は固まる。沙捲は床にしゃがんだ。

「どうしてこんなところに肝試しなんて着たんですか!?!」

香喃は小声で言った。すると沙捲は立ち上がる。その手には小さなブレスレットがはめられていた。

「それなんですか?」

「ああ。」

ブレスレットは何百年も放置されていたにしてはきれいだった。

「きれい．．ですね。」

「．．．まあな。」

「大事なものなんですね。誰かからもらったとかそういうんですか？」

「いや、俺が自分であげたものだ。」

「じゃあ、なんで？」

そのとき、香喃の目に何かが映る。沙捲の真後ろ。細い手が沙捲に向かって伸びてきている。眼を見開く香喃に沙捲は笑いながら問う。「どうした？ なにか・・・!?」

その言葉が終わる前に沙捲は突き飛ばされ、香喃にぶつかってそのまま二人は壁にぶち当たった。

「っ・・・誰!?」

香喃は起き上がって部屋を見回す。だが誰もいなかった。

「沙捲さん!? 大丈夫ですか？」

「いつつう・・・悪い。」

沙捲は頭をさすってたちあがり、香喃にも手を貸した。

「なんだったんだ？」

「あ・・・あれ？ 沙捲さん、ブレスレット・・・は？」

「っ!?!」

沙捲が腕を見ると、ブレスレットは消えていた。沙捲はあわてて部屋を探したがどこにもなかった。

「ツチ・・・」

「さっき誰かに押されたんですよね？ その時に・・・」

「ああそうだ。くそ・・・取り戻しに行く。おまえは先に帰ってる。」

香喃はしばらく考えて、首を振った。こんなところから一人で帰るのはまっぴらだ。しかも前のように沙捲に死にかけられるのは嫌だった。

「やです。」

「帰ってる。」

「嫌ですって!」

「はあ・・・ったく・・・命の保証はねえぞ？」

「いいです。」

沙捲は眉をしかめた。香喃はそれを無視して言いよったため、沙捲はようやくあきらめた。

「この中に居るのは確かだ。」

「・・・探しましょう。」

二人は死刑場をでて、真つ暗な城の中を歩きだした。

アブナイ追跡

「いつ!？」

「おい・・静かにしろ。」

香喃は何かに躓いて転んだ。・・転んだのはまあいい。だがつまりいたものが最悪だった。

「大丈夫か？」

沙捲に手をかり、香喃は立ち上がった。下を見て、叫びそうになった。分かっていたように沙捲は香喃の口をふさいだ。

「やあ・・・ひっ・・」

「わかつてる。大丈夫だ。」

香喃は人間の死体に躓いて転んだのだった。その腐りかけた眼は虚ろに香喃を見ていた。

「な・・んでこんな・・とこに・・?」

沙捲は座り込んで死体を調べ始めた。

「腐敗があまり進んでいないな・・死後・・一週間弱つてとこか・・おい、平気か？」

「は・・い・・」

吐きそうになるのを堪えてそれをじつとみていた。沙捲は確かめるように言った。

「誰かに殺された。剣か・・いや、ナイフか？」

淡々と告げる沙捲の横で香喃はただ震えた。すると、沙捲がゆっくりと立ち上がって香喃を見た。

「・・悪かったな。行こう。」

「・・この人・・このままでいいんですか？」

香喃が死体に眼を向けると、沙捲もしばらく考えた。

「とりあえずひと段落してからまたここに来るぞ。そうしたら埋葬しよう。」

「・・・」

「今はとりあえず、こいつらに仲間入りしないようにすることだ。」

「ハイ。」

沙捲は香喃の手を引いて死体から遠ざけた。

「行くぞ。」

「はい。」

二人はまたあるきだした。

突然沙捲が立ち止まり、香喃に静かに、と合図した。

「・・・？」

沙捲は眼を細めて遠くを見た。香喃もよく見てみると、真っ暗な中に二つの眼が浮かび上がる。

「！・・・あ・・・れ・・・」

「まだ気づかれてない。最初に仕掛けるぞ。隠れてろ。」

沙捲に言われ、香喃は角に隠れた。するとすぐに爆音とそれに勝る醜い叫び声が聞こえた。

「しよ・・・！？」

沙捲さん、と声をかけようとする、後ろから口を押さえられる。

「む・う！！！」

「どうした？おい？」

薬品の匂いが鼻をつく。香喃は首を振って抵抗するが力が入らなくなっていくのがわかる。

「香喃！おい！？」

「・・・ま・・・さん・・・」

ほとんど囁くようにして名前を呼び、香喃は意識を手放した。

アブナイ再開

「おい！どこいったんだ！？香喃！」

いくら叫んでも沙捲の声は虚しく響くだけだった。

「ツチ・・・」

舌打ちして床に倒れた何かに近づいた。大体予想はついていた。

「やっぱりてめえか。」

「ふふ・・・いい気味。あの子、死ぬわよ。」

床に倒れているのはライだった。投獄されたと言っていたがなぜここに居るのか・・・？そう思って気功として沙捲は固まった。

「・・・ライ・・・」

ライは眼を見開いて息絶えていた。いくらこんなやつだとしても、殺すことはなかった・・・後悔と怒りが入り混じった眼でライを見つめ返す。

「・・・ごめんな。」

沙捲はライの目を指で閉じさせ謝った。手を合わせて、沙捲は香喃の消えた方向へと走った。

「・・・ん・・・？」

ガンガンと頭が痛む。きつと二日酔いはこんな感じなのだろう。すると、聞き覚えのある声が入ってきた。

「起きた？気分はどう香喃。」

「ゆ・・・うな・・・？」

「あつたりい。まさかこんなところで会うと思わなかったでしょ？」

香喃は起き上がるうとして手足に手錠がしてあるのに気付いた。腕の手錠はベットの枠をくぐっているため、ベットから離れられない。

「優奈、離して。私たち・・・」

「友達でしょ？とか言うつもり？あたしはそんなことこれっぽっちも思っちゃいないわよ。あんたと一緒にずっといたことも、友達ぶって話しあわせんのも、大変だったわよ。むかつくつたらないわよ。虫唾が走るわ。」

香喃は眼を見開く。

「なんでこんなとこに居るの？どうしてこんなこと・・・」

「そりゃ、私が魔術師になりたかったから。テストは落ちたけどね。ライがちゃんと役目を果たせれば魔術師にしてくれるって言ったのよ。」

優奈は嬉しそうに言った。香喃はゾクツと身を震わせる。優奈は魔法にかかわっていたのだ。それにしてもなぜこんなところに・・・？その疑問はとりあえず言わず、優奈を説得にかかる。

「そんなこと認められるわけない。それに、ライは罪人よ。」

「違う！でたらめ言うんじゃないわよ！」

その言葉に優奈は過剰に反応した。追い打ちをかけるように香喃は怒りにまかせて叫んだ。

「ライは罪人よ！沙捲さんを殺そうとした！！」

「違う！！！！」

優奈は金切り声を上げて香喃をはたいた。

「いっつう・・・」

「あはは！あのレインってやつ、今頃死んでるでしょうね！だってライがいるんだもの。」

その時、古いドアが蹴破られた。

「香喃！！」

沙捲が入ってきたのだ。腕にはプレスレットがはめられていた。

「沙捲さん！？あいつは？」

「ライだった。もう死んでる。」

沙捲が言うと、優奈は固まった。沙捲が来て少し冷静になった香喃は会話の間に手錠を少しずつずらす。あと少しで抜けそうなのに。水か何かあれば・・・

「う．．．そ！！うそよ！ライが死ぬわけじゃないじゃない！」

激しく動揺する優奈に沙捲はブレスレットを見せた。そのとき、香喃は思いついた。もう片方の手で手首を傷つけて血を垂らす。ぬると手錠が滑り始める。

「そ、それ．．．ライのブレスレット．．．？」

「ああ。俺がライに送ったものだ。すぐに送り返されたがな。」

「じゃ．．．あ．．．」

「現実を見る。おまえは魔術師じゃないし、ライは死刑囚だ。いくらお前が香喃を殺したって魔術師にはなれない。ただの罪人になるだけだ。」

「．．．そ．．．れなら！」

優奈が香喃をつかんで首に剣の刃を当てる。その

「こいつを殺すわ。別に私はこいつをさらった時点で罪人だわ。ならライに言われたことを最後までやりとげてから死ぬ。」

「優奈．．．やめて．．．」

「あんたのその目がむかつくのよ！なんで同情なんてするの！？そんなの．．．虚しくなるだけよ．．．」

優奈は泣きそうになりながら剣を握る手の力を強めた。優奈が剣を香喃の首につきたてようと腕を振る。手錠が外れた。

「やめろ！」

そのとき、香喃は行動を起こした。逆に体を前に出して優奈に足をかける。剣の刃が首をひいたがそれを素手で払いのけて優奈を押し倒した。優奈は落ちた剣の上に倒れ込み、血を流した。それでも執念で落ちていた剣を取ろうとする。

「ツチ！」

香喃はそれを蹴り飛ばして優奈の腕を押さえた。沙捲がすかさず剣をとり、優奈の腕に置いてあった手錠をかける。優奈は頭を打った衝撃で気絶していた。

「おい、立てるか？」

「．．．」

香喃はショックを受けていた。優奈の行動も、いつの間にか自分に染みついていた防御術にも。

「おい？血だ。傷見せる。」

「・・・」

香喃が黙っているのに気付き、沙捲が肩をつかんで言った。

「大丈夫だから。怪我を見せる。・・・ああわかった。お前は好きでこんなことしたんじゃない。そうだろ？優奈を傷つけたのは仕方ないことだ。」

「・・・」

香喃はコクコクと頷いた。そのせいで溜まっていた涙がぼろぼろと頬を滑った。

「・・・怖かったか？」

沙捲は震えている香喃を抱きしめていった。

「・・・」

首を弱く振り、沙捲に抱きついた。

「・・・わ・・・たし・・・血・・・みたら自分が・・・人殺し・・・みたいで・・・つえぐ・・・」

「わかった・・・大丈夫だから。」

沙捲が強く抱きしめると、香喃が小さく声を上げた。

「いつ・・・た・・・」

体を離して香喃を見ると、首には長い傷、手のひらには剣を強くはたいたせいで出来たえぐれたような傷が出来ていた。

「・・・我慢しろよな。」

沙捲が言っつて、香喃がえ？というといきなり手に持った剣で傷を広げた。

「いつつたい！！沙捲さんやめてくださっ！！い・・・やあ！！」

「すこしおとなしくしろって・・・」

沙捲が傷口に指を入れ何かをつかみだした。

「いたああ・・・」

香喃はぼろぼろに泣いて沙捲をにらんだ。

「痛い・・・です。う・・・ぐ・・・なにするんです・・・か」
痛みのあまり続けて喋れない。

「これだ。見る。」

沙捲の手には長い虫のようなものが握られていた。香喃がヒツと声を上げると、沙捲が言った。

「おい、目え覚めてんだろ？」

すると、優奈が起き上がった。

「ツチ・・・」

「こいつが俺に入れたような病虫を入れたんだ。きつともみ合った時だな。」

「あと少しでうまくいったのに。残念よ。」

優奈の悪意で濁った眼を見て香喃の罪悪感は吹き飛んだ。

「優奈・・・最低。」

「ふん。あんたに何と言われようと関係ないわよ。」

その時、風が渦巻いた。埃が舞い上がり、眼を閉じ、次に開けると帝王がいた。

「帝王・・・」

3人で啞然としていたら、帝王は言った。

「こやつを殺人未遂で投獄する。」

そういつて後ろに現れた警察に指示すると、あっという間に優奈は取りおさえられた。

「すまんの・・・城にあった死体は二つとも回収した。まさかこんなことになるうとは・・・」

「いえ・・・」

二人が茫然としていると帝王と他の警察も消えた。

「よし。すんだぞ。」

沙捲はとりあえず出血を止め、上から包帯を巻いた。

「帰ったらきちんと手当てする。」

「・・・ありがとうございます。」

「・・・帰ろう。仕方ねえから、飛竜でも呼んでやるよ。」

「飛竜？」

「いいからこい。」

沙捲にひかれ、香喃は外に出た。すると、凄まじい風がおこり、龍が降りた。香喃はこれまでのこともあまり驚かなかったが迫力に震えた。

「大丈夫だ。人は食わない。」

「・・・これで行くんですか？」

「ああ。厭なら歩きだ。」

香喃は唇をかみしめて龍にまたがった。

「行くぞ。」

「・・・はい。」

香喃が返事をする、龍はすごい勢いで舞い上がった。

迷子

「きゃあああああ！！沙捲さん止めて！！止めて止めて止めてえ！
！！おろして下さい！！！！」

二人は猛スピードで飛び去る。そこを通ったという証拠は、その場に香喃の悲鳴がかすかに残るだけだった。

「おい、暴れるな。」

「いや！おろして下さい！！おろして！！！」
すると、沙捲は急に龍を止めた。

「ここでおろしてやるうか？」

下をのぞきながら言う。香喃もつられて下をのぞき、慌てて眼をそらした。下には雲がうつすらとかかり、地面ははるか下だった。

「いやです！！！」

「そうだろ？じゃあ、静かにしてる。」

「・・・それは無理ですって・・・」

香喃が弱弱しく食い下がると、沙捲もさすがにきついことを言うのはやめた。

「急いでんのはな、お前の出血があぶねえから。具合悪くねえか？
言われてみれば、目の前がグラツと揺れたり、体が上手く動かなか
ったり。でもそれは、気流や恐怖からなるものだと思っていた。

「す・・・すこし・・・？」

「・・・急ぐぞ。舌噛みたくなかったらくつちゃべんないことだ。」

「・・・」

香喃は無言でうなずき、それをみて沙捲は龍を飛ばした。

激しい気流に体を吹き飛ばされそうになる。しばらく喋っていない香喃に呼びかけてみる。

「おい、平気か？」

「・・・」

「おい？・・・おい!？」

沙捲が後ろを見ると、ちょうど香喃の体が宙に浮くところだった。貧血で気を失っているらしく、反応しない。

「おい！香喃！」

沙捲の伸ばした腕は香喃の服をかすめて空を切った。

「ツチ・・・」

急いで急降下するが、香喃は濃い霧の中にのまれていく。

「香喃!！」

呼びかけるがもちろん反応は無い。

香喃はあっという間に濃霧の中に消えていった。

沙捲は1日中香喃を探した。だが、濃い霧と、独特の地形のため、香喃どころか人間も見つからない。

仕方なく沙捲は城へと戻り、今こうして帝王に相談しているところだった。横にはガザとミラが付き添っていた。

「それで・・・おぬしはラナを見失ったと。」

「はい・・・申し訳ありません。私がもう少し注意していればこんなことにはなりませんでした。」

深く頭を垂れる沙捲を見て、ガザとミラが口を開いた。

「レインだって、仕方ないわ。龍の操作は大変なもの。」

「ああ。そうだ。」

だが、帝王はキツイ言葉を浴びせた。

「レイン。おぬしには責任を取ってもらう。・・・だが、おぬしだけに責任があるというわけではない。あの場でおぬしらを送らなかつたわしにも責任はある。」

「いえ、そんなわけには!・・・」

「わしも捜査に全力で協力しよう。それがわしに出来る精一杯のこ

とじゃ・・・おぬしは・・・きゅつてんまし宮殿魔師の役を降りてもらおう。」

沙捲が眼を見開く。二人はそれに猛烈に反対した。

「帝王！それはいくらなんでも重すぎる罰です。いくら責任があるからって・・・」

「そこまでする必要などありません！」

すると、帝王は声を上げて笑った。茫然とする3人に朗らかに言った。

「何を言っておるのじゃ。わしは降りてもらおうと言っただけじゃよ。解任したわけではない。ラナ・アーシャを見つけて出すまで、おぬしをややこしい宮殿魔師の業務から解放しようと言っておるのじゃ。」
3人はすぐに帝王に頭を下げた。帝王は、これからしななければいけない魔師としての手続きなどから沙捲を引き離し、搜索に専念させてくれるのだ。

「レイン・ストライフ。」

「はい。」

「・・・二人で無事に帰ってこい。それが条件じゃ。」

「・・・もちろんでございます。今日は本当にありがとうございます。」

沙捲が深く礼をすると、ドアが勝手に開く。

「さあ、行って来い。ストライフ家の息子よ。」

声を背に聞きながら、沙捲は途中からかけだした。

「・・・いつ・・・たあ・・・?」

起き上がるうとして激痛に悲鳴を上げる。まるで体中に電線が張り巡らされ、動くたびに電流が走るようだった。

「ど・・・?」

見知らぬ部屋に寝ていた香喃は小さく漏らした。すると、ドアが勢いよくあく。

「・・・起きた？」

入ってきたのは真つ赤な髪の青年だった。香喃がぱちくりと瞬きすると、青年はベット脇の椅子に腰かけた。

「体の調子は？」

「あ・・・あ、大丈夫です。」

「肋骨と足の骨折は治しといたけど、出血がひどいからまだ寝た方がいい。」

「あ、りがとうございます。あ・・・」

あなたは？と言おうとすると、逆に聞き返された。

「名前は？俺、レノ・ストリーダってんだけど。」

「あ・・・えっと、ラナ・アーシャ。」

すると、レノは眼を見開いた。

「ラナ・アーシャって！？まだ若くて、最近魔術師になったばかりの？ホントの名前は？」

「か・・・香喃です・・・」

「じゃあ、ミノタウロスを一撃で！？帝王の倉庫に入って罪人を捕まえた！？」

「あ・・・ちよつと・・・大げさすぎる気が・・・」

香喃は首を振ったが、レノは完全に信じ込んでいる。香喃は一番聞きたかったことを口にした。

「あの・・・ここってどこですか？私、城に行く途中にはぐれて・・・」

「君、家の庭に倒れてたんだよ。・・・怪我を見ると、戦ってきたみたいだね。かなりの高さから落ちたみたいだから、無理しない方がいい。・・・ここは、城から一番遠い場所。城はもつと南なんだ。」

「そんな・・・どうしたら・・・」

「とりあえず、城から近くても近くなくてもその体で行くのは無理だよ。休んだら僕が送ってってもいいし。」

「ほんと？」

「ホント。」

香喃が喜ぶと、レノは立ち上がった。

「でもその前に休んで。」

「・・・外に出ても？」

「はぁ・・・いいよ。無理しないように。レノを追い越し、ドアを開ける。」

「案内しよっか？」

香喃は頷き、外へと出た。

そのころ沙捲は、龍で上空から探していた。相変わらず、人がいない。香喃はこんなところで今頃どうしているのだろう？あの高さからなら、怪我は確実だ。とにかく心配だった。

「ツチ・・・どこにいたよ。」

沙捲は毒づき、また龍を飛ばし始めた。

秘密

沙捲が12時間近く空から探し、あきらめかけたころ、地上に何か赤いものが見えた。

「・・・花か？・・・血？」

眼をこらしても赤い点しか見えない。ゆっくりと下降し、上からそれを見た。沙捲は龍からずり落ちそうになった。そして、龍から降り、その赤いものに叫んだ。

「レノ！おい！レノか！？」

すると、その人物が振り返った。沙捲を見るなり、眼を見開いた。

「兄貴！？どうして？」

その時、もう一人の人物が叫んだ。

「沙捲さん！？」

ちょうどレノの影になって見えなかったのだ。

「かつ・・・香喃！？？」

3人は互いの名前を呼び、近寄った。

「どうしてこんなところに居るんだ？」

沙捲が香喃に言った。

「いや、あのレノさんの家の庭に倒れてたみたいで、しばらく家で休ませてくれたんです。」

「そうか。もう大丈夫だな？帰るぞ。」

そこにレノが気まずそうに口をはさむ。

「あの・・・兄貴とラナちゃんはどういう関係で？」

「あ・・・」

「ラナは俺の弟子だ。」

「レノさんと沙捲さんはどういう関係ですか？」

「・・・兄弟だ。」

二人で声をそろえていった。確かに似ている。性格はほぼ反対と言

つてもいいほど違うが……。髪の色はどういうことなのだろうか……。そんなことを考えながらレノの真っ赤な髪を見た。すると、香喃の視線に気づき、レノが自分の髪を指でつまんで笑った。

「色、気になる？」

「えっ……。あ……。すいません……」

沙捲があきれ気味にため息をつく。

「レノはな、生まれつきこうなんだ。こいつは髪色、俺は眼の色が違う。」

「え？でも沙捲さん普通の黒じゃないですか？」

「いつもは目立つからコンタクト入れてんだ。こいつは隠しもしねえからな。」

そう言つて沙捲は黒いコンタクトをはずす。すると、レノの髪と同じ、鮮やかな紅が現れる。

「……。は……。初めて知つた……」

「で、なんで紅いかというと……」

「やめとけ。」

「いいじゃん兄貴。別に隠す権利なんてねえだろ？」

「……。ツチ……」

沙捲がひらひらと手を振ると、レノが話しだした。

「俺たち、怪物と人間のハーフなわけ。」

香喃はパツとミノタウロスや、蔓のモンスターを思い出した。沙捲が続けた話した。

「怪物と人間の交配は禁忌なんだ。その証は、体の一部に血を表す紅が現れること。だから俺たちは眼と髪が紅い。」

「……」

すると、レノがガシガシと髪を搔いて言つた。

「兄貴のは隠しようがあるけど……。俺のは染めてもすぐ生えてきちまうからよ。だからこんな僻地に居るわけ。」

「え？でもなんで隠すの？綺麗なのに……？」

すると、沙捲が呆れ顔で言つた。

「まだわかんねえのか？禁忌つーのは忌み嫌われる存在だ。人の多いところでは厄介が多いんだ。」

「・・・じゃあレノさんは・・・」

「人目を避けてここに住んでる。俺だってコンタクトを入れてねえと差別される。」

「そんな・・・」

「どうだ？軽蔑するかよ？」

レノが苦笑いした。香喃は首を激しく振って否定した。

「そんなことないです！だって、外人さんだって別に眼が青かったりするじゃないですか。」

「俺たちの戒めはそんなもんじゃねえ。俺たちはこの紅に一生呪縛されんだ。」

香喃は考え込んだが、あっけなく結論を言った。

「別にいい・・・じゃないですか。私・・・二人のこと好きですし、そんな血がどうだとか関係ない・・・ようなきがするんです・・・私部外者だからそんな二人の気持ちなんてわかりませんし・・・あの・・・」
香喃がもごもごといいかけると、沙捲が香喃の頭に手を乗せた。

「・・・物好きだなお前。」

「そつそんな・・・」

「いや、ラナちゃん結構物好きだぜ？」

レノもそう言い、笑った。香喃は困り、黙っていると、沙捲の手がどかされ、二人から小声で何か言われた。

「「ありがとな。」」

「あ・・・あの沙捲さん？帰るって言ってましたけど・・・」
3人はレノの家に来ていた。

「せつかくこんなところに来たんだ。少し寄ってから帰る。いいか？」

「あ・・・はい。」

レノが部屋から出てきて二人と向き合った。

「それにしてもラナちゃんは災難だよな・・・兄貴の弟子かよ？」

「うるさい。」

沙捲が不機嫌そうに言った。香喃は苦笑いして冗談交じりに言った。

「そうですね。」

「なんだと？」

「あつ・・・いえ。でも、沙捲さん頭いいですし、・・・あはは・・・」

香喃はごまかすようにコーヒーを飲む。だがあることに気づいてレノに聞いた。

「あの、レノさんってレノ・ストリーダって言うんですよね？確か沙捲さんってストライフだったような・・・」

「ああ、ストリーダってのはいつも使ってるミドルネームみたいなもんで、ホントはストライフであってるよ。」

「俺は19の時この世界に入った。こいつも一緒に入ったから・・・17の時か。そこで初めて禁忌だということが判明した。紅かったのは普段の世界じゃ隠してたからな。」

「え？でも染めたって駄目だって・・・」
すると、レノがせき込んだ。眼で沙捲に訴えるが、沙捲は構わず続けた。

「こいつ、ずっとわりいことばっかしてたからほとんどボウズだったんだよ。反省ボウズってやつ。」

「ぷっ・・・ふふ・・・あははっ・・・」

レノのボウズを想像し香喃は吹き出した。それをレノは横目で見て顔をそらした。

「親はうすうす気づいてたがな。」

「だから何かと罪をなすりつけられてたんだよ・・・」

「ふ・・・」

そんな話に花が咲き、気づくともう2時間が過ぎていた。すると、ボンッと音がして、煙が舞いあがった。

「んだよ？なんかしたか？」

「兄貴じゃねえのかよ？」

二人がせき込みながら言うと、聞き覚えのある低い声が聞こえた。

「レイン・・・おぬしというやつは・・・」

「てっ・・・帝王！？」

「おぬしがあまりにも遅いから来たんじゃ。まあ無事なら良い。お・
・？レノじゃないか？」

「て・・・帝王様・・・久しぶりでございます・・・」

煙が収まり、帝王の姿がはっきりと見えた。香喃がポカンとしてい
ると、帝王が香喃を立たせた。

「おぬしを探しにレインを使わしたのだがな、レノ、おぬしが助け
てくれたのか？」

「・・・ハイ。」

「礼を言おう。・・・だがなぜこんなところにいるんじゃ？王宮に來れ
ばいいものを・・・」

「だが私は禁忌の身です。」

レノは複雑な面持ちで言った。だが、帝王はほっほっほと笑い、レ
ノを見た。

「禁忌などわしが認めれば関係無いのじゃよ。」

香喃はんなアホなと思ったが、レノに取っても香喃にとっても嬉し
い。きつと沙捲だって嬉しいだろう。レノは黙っていたが香喃が喜
んで言った。

「本当ですか！？ありがとうございます。」

「なんでお前が・・・」

「嬉しくないですか？」

「いや、そりゃ・・・」

「ほっほっほ決まりじゃな。荷物を送ろう。さあ帰るぞ。」

次の瞬間、その場は家もろともレノがいた痕跡は消え、煙が残るの
みとなった。

試練 1

「出かけるぞ。」

元の世界に帰ってきてから一週間。学校も沙捲の魔力のせいで魔界へ行っても影響は無い。

出かけるぞ。その一言は普通のお出かけ、という意味ではない。

「ど……どこに……?」

「わかってんだろ?」

「う……うすうす……なら……」

「じゃあ聞くな。聞くと辛いぞ。」

「は……はい……」

香喃は沙捲の手を握った。

「ばっ!?!……コホ……」

「?沙捲さん……?」

沙捲が腕を引き離して小さく咳払いする。怪我でもしているのだからか?香喃は慌てて聞いた。

「沙捲さん?怪我してるんですか?見せてください!」

「バカッ……ちがつ……」

香喃が手を引き寄せると、それを拒否してズンズン歩いて行く。

「沙捲さん……?なんか変です……」

「うるさい……早く行くぞ。」

「?……わかりました……」

香喃は首をかしげ、沙捲に続いて玄関を出た。

「あれ?沙捲さん、部屋ここじゃないですか。」

沙捲は部屋の……異次元ホールとでも言っておこうか……そのホールに入らず、部屋から何かを持って出てきた。

「今日は倦^{けん}さんのところへ行く。」

倦さん・・・・？香喃はそれを聞こうとしたが、沙捲はスタスタと歩いていつてしまった。

「倦さんって誰ですか？」

「いいから早くしろ。・・・それと、何があっても驚くな。」

「はえ？」

「おびえるなと言っているんだ。正直、初心者にはきついからな。」

「・・・？」

香喃はさらに口を開こうとしたが、沙捲に押さえられ、下へと引っぱられて行った。

試練2

沙捲がコンコンとドアをノックする。香喃の部屋だとしても、いきなりドアを開けて入ってくる普段の沙捲とは違う。

「倦さん、沙捲です。入りますよ。」

「・・・」

返事はなかったが、沙捲はドアに手をかけた。

「ちよつと沙捲さん、いいんですか勝手に入って？」

「返事がないってことはいいってことなんだよ。入ったらもう黙ってる。余計なことは言っな。」

「はい・・・」

沙捲はドアを開けた。部屋は殺風景で、気がなかった。家具は最低限置いてあるが、新品のように使った痕跡がないのがわかる。テレビのリモコンにはうっすらと埃がかかり、唯一動いているのは、三つ並んだコーヒーカップからでる湯気だけだった。

『三人暮らし？』

香喃は沙捲に聞こうとしたが、目で静かにしろと注意された。沙捲はいままで香喃が見たことのないくらい緊張している。それがうつり、香喃も同じように身を固くした。

その時、沙捲がこわばった声で囁いた。

「来るぞ。」

何がですか？と言おうとすると、沙捲が香喃を押し倒して、自分自身も床に伏せた。

その直後、二人がもし立っていたとしたら首の位置にあたる部分に半月刀（反り返った剣のこと）がヒュツと音を立てて投げられた。壁にビィンとかすかな振動音を立てて突き刺さった半月刀に目を見開き、香喃が驚いてドアを確認しようとする、沙捲が言った。

「次が来る。いいか動くな。」

香喃は何も言えなかった。半月刀の次つて？ここはなに？なんで私たちが狙われる？疑問が猛スピードで脳をかすめる。その時、沙捲が動いた。

「部屋の奥に走れ。いいな行け！」

香喃の体が勝手に動く。反射的なことだとわかったのは、部屋の奥に座り込んだ時だった。

「沙捲さ……」

香喃が沙捲を見ると、腕から血が流れていた。

「沙捲さん！」

「よせ！来るな！」

沙捲の言葉は聞こえなかった。香喃が沙捲に駆け寄ったとき、香喃の頬を切り、また剣が壁に突き刺さった。痛みなんて気にしていられなかった。

「沙捲さん、逃げましょう！早く！」

「違うんだ。」

沙捲は弱く首を振った。香喃の頬から出た血が涙のように伝い、パタパタと落ちた。

「でも怪我が！治療してからまた来ればいいんです！」

「駄目だ。」

沙捲は頑として聞かなかった。その間にも血が白いワイシャツを染めていった。香喃は自分の上着を裂き、沙捲の腕を止血した。

「どこで覚えたんだそんなこと……」

沙捲は半ばあきれ気味で言った。

「沙捲さんがしょっちゅう怪我して帰ってくるから、応急処置の教室に通ったんです。」

香喃は緊張しながらも手当てを済ませた。

「何なんですかここ？なんでこんなところに??」

香喃が言つと、男の笑い声が聞こえた。そして、首にひんやりとしたものが当たる。振り向かなくてもわかる。半月刀だ。香喃が動く、首が切れて生温かい感覚が伝った。

「ハハハ、こんなとこつてのはひでえな？」

「倦さん・・・こんな歓迎も大概にしてくれませんか。命がいくつあっても足りませんよ。」

二人は香喃を無視して話し続けた。

「まだ足りてるだろ？生きてるんだから。」

「はあ・・・」

香喃が倦と言われた人物に目を向ける。若い。沙捲から倦さんといわれるのだから、50 60くらいの仙人のような人物を想像していた。だが、この男は20歳ほどの若者だ。

外見は、真つ黒な髪に、グリーンの目、そして、黒ぶちの眼鏡。目はグリーンだが、顔立ちは日本人だ。スラツとした体格だが、半月刀をあんなに正確に投げるくらいだ。きつと力はあるのだろう。

香喃がずつと見ていると、倦は香喃に気づき、くしゃりと笑った。

「悪かったな。俺のところに沙捲が来るときはいつもこうなんだ。」

「あ、あ・・・ハイ。大丈夫です。」

まだ頬の血は流れている。先に固まった血が頬に張り付き、香喃は少しひきつった笑みを浮かべた。

「香喃、この人が、倦さんだ。俺の友人だ。」

「よろしくな。香喃ちゃんできよかったか？」

「ハイ。よろしくお願いします。」

二人は握手をした。握力が強い。香喃の手がグツと握られる。

「で、沙捲、いい彼女を持ったな。」

倦がニヤリと笑い、沙捲の肩をバンバン叩いた。沙捲は痛みに顔をしかめ、必死に否定した。

「違いますよ！こいつは俺の弟子です。」

「そうか？へえ、お前が弟子を持つようになるとはな・・・ところで名前は何なんだ？」

「ラナ・アーシャです。帝王様に気に入られています。」

「ほお、そりゃ運がいいな。さつき死ななかつただけある。」

「あ、ありがとうございます。」

「おっと、二人とも怪我してるのか？」

「「当たり前ですよ。」」

二人揃って言うと、倦は困り顔で笑い、座り込んでいる香喃を起こした。

「手当てしよう。さあ奥へ。」

倦に言われ、二人は奥へと歩いて行った。

試練3

「あ……あの……これ……って……」

香喃はヒクリと口の端をひきつらせた。目の前にドンと置かれた物からなるべく体を離れた。

「平気だ。別に死にやしねえよ。」

「ああ。俺んところでは普通だが……」

香喃の目の前に置かれているもの。それは眼を見開きたいわゆるドラゴンの首だった。沙捲は死んだにも関わらず首の切り口から流れ出る赤紫色の血を傷口にすりこんでいた。

「しょ……ま……さ……」

香喃は失神寸前で踏みとどまり、浅い息を繰り返す。沙捲はしょうがないというように血を手にとった。

「やつ！ちよと、沙捲さん!？」

「ほら。」

「ほらじゃないんです!」

沙捲が香喃の首に手を近付ける。香喃はそれを必死に阻止した。

「ドラゴンの血は出血を止めるんだ。毒なんてない。」

「で……も……」

容姿がグロテスクすぎる。テラテラと口の端に垂れさがった舌。見開いたまま、まだ潤いを保っている眼玉。そして、香喃に無念を伝えるように訴える目線とその表情。怖い。はつきり……いや、はつきり言わなくてもわかる。怖い。

香喃が拒否し続けていると、倦が俯いた。

「そうか……ゴメンな……香喃ちゃんにはきついよな……」

香喃は気まずくて眼をそらす。香喃は倦の厚意を傷つけているのだ。香喃は眼をぎゅっつつぶった。……その横で倦と沙捲が顔を見合わせて苦笑いしているのも知らずに。

「……ひう……う……」

香喃は手に血をとった。べったりとしていて予想と同じ。気持ちが良いとは言えない。香喃は悲鳴を堪えて首にそれをぬった。

「……っ……」

塗った部分はつきりとわかるくらい熱く熱を持ち始めた。カアッと発熱し、数分するとスツと治まった。

「あ……あり……がとござい……ま……した……」

香喃は体をひきつらせてまだ睨んでいるように見える首から離れた好きにはなれそうにもない感覚だというのはよくわかった。そんな香喃の眼に、クスクスと笑う二人が映った。

「香喃ちゃんはかわいいな。悪い虫につかれそうで心配だよ。」

「疑いを抱くということ知らないのかもかもしれませんね。」

香喃は倦の言葉が演技だったということに気づき、赤面した。

「ちよつ、ちよつと倦さん！」

「いやあ、悪い悪い。だって、血が止まらないと困るだろ？」

「酷いですよ……」

「少しは疑うことを覚えろ。」

「沙捲さんだつて教えてくれれば……」

香喃は俯く。それを横目で見ながら、二人は何食わぬ顔で会話を始めた。香喃もつられてそちらを見る。

「さあ、始めるか。」

「でも、本当にこんなに早く……？」

「仕方がないだろう。力は十分だ。後は気転と行動力だ。試すにはちよつどいいだろ？」

「でも、誰も手出しできないとなると……」

「仕方ないことなんだ。おまえだつてわかるだろ？」

それを最後に二人は黙った。

「あの……なにを……」

香喃が堪え切れずに聞くと、沙捲は悩んでいるような、悔やんでいるような複雑な表情で言った。

「お前の試練のことだ。」

「しれん？」

倦が続きを説明する。

「まえ、ミノタウロスと戦っただろ。」

「あ、ハイ。」

「実はまだやるべきことがあってな。今それについて話していたんだ。」

「そつだ。おまえはあのおときは比べ物にならないくらい苦労する。」

「え？」

沙捲は暗い顔で言う。

「ここですか・・・？」

「いや、違う。ルートはここ何だが、まだ時空の断裂がしてないんだ。」

「だんれつ？」

「とにかく、少し待ってる。」

沙捲はそういつてまた倦と話し始める。

香喃は自分のことなら話してくれてもいいと文句を言いたかったが、二人のいつにもない真剣な顔を見てやめた。

そして、香喃は何時間もドラゴンとにらめっこする羽目になったのだった。

試練 4

「沙捲・・・開いたぞ。」

倦の音が頭に響いた。香喃は無意識に寝返りを打つ。

「おい。起きろよ。」

沙捲の声が聞こえる。香喃は薄く目を開いた。

「ん・・・はっ!?!?・・・ね、寝て・・・」

目をあけると、沙捲の顔が目に入った。上から覗き込んでいるようだ。

「寝てたぞ。」

「すみません・・・」

「とりあえず入口が開いた。行くぞ。」

「ハイ。」

香喃は沙捲に手をひかれ、ソファから立ち上がった。

「こ・・・ここって・・・?」

香喃はトイレに連れて行かれた。

「トイレだ。」

沙捲が慥然として答える。

「い・・・いやそれはわかるんですが・・・あの・・・ここで何を?」

「ここが入口だ。狭いからな。」

倦も当たり前だというかのように答える。

「で、でもここは・・・」

香喃が頭をゆるく振って言うと、二人一斉に口を開く

「「トイレだ」「」

「はあ・・・」

これ以上言っても無駄だと、香喃は聞くのをあきらめた。

「なあ、落ち着いて聞け。」

「へ？」

沙捲はいつになく真剣に香喃を見た。それに威圧され、香喃も思わず目を合わせた。

「行くのはお前だけだ。向こうに着いたらお前は魔物と戦う。一匹じゃない。いくらでも出てくるんだ。」

「え．．．あ．．．どういう．．．？」

「向こうには、剣が岩に刺さっているはずだ。お前の力量と倒した魔物の数がつり合えば剣が抜ける。それまでは帝王からもらった剣を使え。剣が抜けたら全ての防具が現れるはずだ。それを全てつけて、最期の魔物を倒す。いいな？」

「え、そんな．．．なんで．．．？」

「わかったか？」

「は．．．はい．．．」

勢いで返事をしてしまった。沙捲は満足げに笑い、倦に視線を送った。すると倦も頷く。

「じゃ、行くか。死ぬんじゃないぞ。」

「ど、どこ．．．に．．．」

恐る恐る聞くと、ドンツと突き飛ばされた。

「っ！？」

目の前に迫ったのは当然．．．便座（泣）。香喃は助けて、と叫ぼうとしたが、一瞬で肺から空気が絞り出された。凄まじい引力に、香喃は目を閉じる。ぶつかるとは床の感触がない。次に目をあけても、真つ暗なだけで何も見えない。

意識の薄れかけた中で、倦が囁くのが聞こえた。

『魔界だよ。』

試練4（後書き）

遅くなつてごめんなさい！

PCのバグが原因で・・・（汗）
またガンバって更新して行こうと思います。

試練5

「……？」

香喃は体の痛みに小さく呻いて起きあがった。

「沙捲……さん？……け……け……んさん？？」

香喃は小さくつぶやいた。周りにはだれもいない。香喃は茫然としてそのまま固まっていた。

一人。この魔界にいる人間は私だけ。それがどうしようもなく不安だった。

その時、頭に誰かの声が響いた。

香喃。立ち上がれ。いつまでも座っているんじゃない。

声と口調で沙捲だということが分かった。思わず泣きそうになると、また強い口調で叱咤された。

立て！泣いている場合じゃない。剣を抜け。早く構えろ！

香喃は震える足で必死に立ち上がった。剣を鞘から抜くと、シャランという澄んだ音が聞こえた。

それを聞いて香喃は不思議と落ち着いた気分になる。

……つく……

「しよ、沙捲さ……？」

沙捲が急にせき込む。香喃は慌ててきよろきよろと周りを見たが、何も起こらない。

すると、沙捲は苦しげに呻いた。

わ……るい……案内……でき……そ……にない……生き……ろ……か……なん……

それを最後に声は聞こえなくなった。

「しよ……まさん……？……」

香喃は小さく囁いたが何も帰ってはこない。

あきらめて軽く、両刃の中心に炎のように溝の入った美しい剣を持ち直す。

『・・・どうすれば・・・』

しばらく呆然としてしていると、突然ぐらりと地面が揺れる。

「っ?」

ふらつきながらもしっかかりと足を踏ん張ると、突然前方にいわゆる魔物と言うものが飛び出した。

それはおぞましい容姿をしていた。体のいたるところにイボが浮き上がり、筋骨隆々の手足には、針金の様な毛が肌を覆ってしまうほど生えている。

「ヒッ・・・」

小さく息をのむと、それは耳をふさぎたくなるような声で笑った。

「・・・」

香喃がとまどっている、それが襲いかかってきた。

「っ!?!」

反射的に剣を振り下ろすとポーンと首が跳ね跳んだ。

「・・・っ・・・」

体に震えが走る。それはぐしゃりと崩れ落ち、びくびくと痙攣した後やっと息絶えた。

香喃はガクガク震える足で、ゆっくりと歩き出した。

「ハアッ・・・」

香喃は息を整えるために大きく深呼吸をした。

もう数え切れないほど敵を倒した。剣は返り血に濡れ、香喃の頬にもべっとりとした血がこびりついていた。

「・・・?」

また歩き出そうと前を見たとき、香喃の目に微かな光が映った。

「?」

『なに・・・？あれ・・・』

近づくにつれ、それが岩に刺さった剣だということが分かった。

「！」

香喃はそれがわかるとかけだしていた。

「これだ・・・」

今までもっていた剣を鞘におさめ、香喃は岩に同化しかけた柄に手をかけた。

「えっ？」

突然柄から手が離れなくなる。張り付いたようにぴったりとくっついている。

「・・・あ・・・っつ！」

香喃は思わず声を上げる。剣が発熱し始めた。火傷しそうなくらい。その証拠に剣が赤くなりはじめた。「いつ・・・」

手が溶けない方が不思議だ。香喃が熱さに耐えながらジツと剣の刃をみていると、ポロポロと周りの石がはがれる。現れた刃は、磨き抜かれ、鏡のように香喃を映し出す。

「・・・」

次に香喃の持っている柄の部分の石がはがれ始めた。そこには螺旋した装飾がいくつも浮き上がっていた。

「わ・・・」

感嘆の声を漏らすと、いきなり剣が光を放った。

「っ！？」

閃光に目を閉じ、思わず後ずさると、ザクつと音がした。

「そ・・・んな・・・」

剣が岩から抜けていた。そして、ザクつと言う音の正体は、剣が岩を切り刻んだ音だった。

『岩って・・・切れる・・・の？』

ポーっとしていると、やっと剣が手から離れた。

カラんカラんツと音を立てて剣が転がった。その先に、沙捲が言った通りいつの間にか防具と、武器一式が置かれていた。

「・・・すごい・・・」

香喃は剣をまじまじと見た。刃には真つ黒な鳶模様が刻まれ、柄には炎がグルグルと巻きついていていた。

そう言えば、熱くなっていたのは炎だったような・・・

香喃はカチャカチャと音をさせながら防具を身につけた。

剣と同じように鳶の巻きついた弓には、美しい装飾の入った色とりどりの弓矢がついている。

丈夫だが軽い防具には、みんな同じ紋章が入っている。どうやらドラゴンらしい。ドラゴンの尾と、吐いた焰がドラゴンの体をぐるりと囲っている。剣の鞘はシンプルな物でそれが剣の美しさを際立たせていた。

『すごい・・・』

防具の中でひととき目を引いたのは、金と銀で作られた盾だった。同じ文様と、グリフィンの絵が刻まれていた。

「・・・」

試しに剣を振ってみる。いつも剣道で使っていた竹刀と重さが変わらないのが驚きだった。

盾に軽く刃を当てる。すると、剣は軽く当たたのにもかかわらず勢いをつけて跳ね返った。

「これ・・・すごい・・・」

盾を左手に持ち、右手で剣を拾う。

思わず見惚れていると背後でザツザツという足音が聞こえた。靴のようだ。

もしかして人間か？と思い香喃が振り返ると、そこには思いがけない人物が立っていた。

「沙捲さん！！」

「よかった・・・無事だったか。」

香喃が近寄ろうとすると、手に持った剣がブウウンと振動した。

「？」

「どうしたんだ？早く帰ろう。」

剣は香喃が沙捲に近づこうとすると、それを止めようとするように強く振動した。

「な・・・なに？」

その時、さつきと同じように声が聞こえた。

よせ！それは沙捲じゃねえ！倒すんだ。

『倦さん！？』

香喃はどちらを信じていいのか分からなくなった。

目の前に居るのは紛れもない沙捲。聞こえてくるのは間違いなく倦の声。

「・・・」

「なあ、どうしたよ？こんなところうんざりだよ。」

『沙捲さん・・・はこんなこと言わない・・・』

「早く帰ろう。」

『最後の魔物を・・・倒すって・・・』

「助けに来たんだ。」

『沙捲さんたちは助けられないっていつてたし・・・』

「なあアーシャ。早く帰ろう。」

『沙捲さんはアーシャなんて言わない！』

香喃は剣を構えた。

「！？」

「沙捲さんじゃない！」

「な・・・何言ってるんだよ？」

「沙捲さんはそんな口調じゃない！」

「は？そ、そうか？悪かった・・・」

「悪かったなんて言わない・・・」

香喃は沙捲に近づく。

「や、やめる・・・やめてくれ・・・」

「違う・・・」

「俺は沙捲だ！信じろ！」

「違う・・・沙捲さんじゃない・・・」

「や、やめっ・・・うああ！」

香喃は一気に沙捲を突き刺した。断末魔の悲鳴が響く中、香喃はジツと沙捲を見ていた。

10分後・・・

「も、もしかして・・・本物だった・・・の？大変・なこと・・・して・・・

」

死体は相変わらずそのままだ。何か変化してもいいのに。そう思っている、死体からシュワシュワと煙が上がった。

「・・・っ？」

とたんに視界が狭くなる。貧血の時のようだ。気持ちが悪い・・・

結果は・・・

「・・・？」

気がつくくと香喃は自分の部屋のソファに横になっていた。

倦の部屋に居たはずなのに。どう考えてもここへ来たいきさつは思
い出せない。

「・・・！」

ソファからおり立ち上がろうとすると足にまったく力が入らない。
そのまま床に突っ伏してしまった。

「い・・・た・・・」

頭に霞がかかったようで、香喃の思考はうまく働いてくれない。

「・・・」

ゆっくりと起き上がりソファにもたれるとツツと血が頬を伝った。

「やば・・・」

ティッシュを頭にあて、ポーっとしているとすごい勢いでドアが開
いた。

「どうした？スツゲエ物音が・・・っておい！」

倦だ。香喃はその気迫に驚き後ずさった。

「なんだよその傷は・・・」

倦は香喃の手の上から傷を押さえきよろきよろとあたりを見回す。

「包帯・・・包帯・・・あつた。」

倦がピツと指を立てると救急箱がひとりでに浮いて倦の手の中にお
さまった。

「・・・ケホツ・・・」

「風邪か？」

「あの・・・夢・・・？」

香喃はあのことは夢だったのかと聞こうとした。すると倦は首を振
ってこたえた。

「いや、夢じゃねえよ。おまえは合格だ。そこに防具も置いておいた。好きに使えよ。」

「沙捲……さ……は？」

「もうすぐ帰る。寝てる。水でも飲むか？」

「おねが……します……」

倦から手渡された水を飲み、香喃は改めて部屋を見た。防具がいつの間にかつけられたフックに引っかけられている。

「け……さん……今……な……じで……か？」

「は？」

「じか……ん」

「ああえーと午前3時だ。」

「なん……にちの？」

「○○日。」

香喃が倦の部屋に行った日にちと一緒だ。香喃がそのことに疑問を持つと倦はそれがわかったかのように説明し始めた。

「お前が行った魔界とこっちの世界だと時間の流れが違うんだよ。」

「はあ……」

「……」

倦が黙り込み、急に香喃を抱えて立ち上がった。

「ひゃっ!？」

「静かにな。ベット連れてってやるからちゃんと寝ろよ。沙捲が来たら教えてやる。」

「あ、ありがと……ござい……ます。」

ポフツとベットに沈み込み、香喃は礼を言った。とたんに瞼が落ちる。

香喃は夢も見ない深い眠りについた。

「……ダメだ。起きねえみたい。」

倦は数回香喃に呼びかけてから言った。

「そうですね・・・」

「じゃあ、俺帰るから。こいつ風邪ひいてるみたいだからしっかり見てやれ。」

「ハイ。ありがとうございます。」

カチャンとドアが閉まる音がして倦の足音は遠ざかって行った。とたんに沙捲は大あくびして目を擦った。

「眠い・・・」

そして、横で寝ている香喃に目を移して沙捲は動きだした。

「飯食わせねえとな。」

キッチンに行つて、適当に料理を作る。

沙捲だつて料理はかなりうまい方だ。味噌仕立ての粥を作り、沙捲は部屋へと足を踏み入れる。

その瞬間、香喃の目が開いた。

「っ!？」

「しょ・・・まさん・・・帰つたんですね・・・」

「・・・なにいつてんだ・・・おい、熱はかれ。」

額に手を押し当てて沙捲が言う。かなり熱い。

実際温度計ではかると40度近くまで上がっていた。

「・・・食つか？」

香喃は黙つて首を振った。

「じゃあ、何か欲しいものは？」

「み・・・みず・・・くださ・・・」

「ミミズください？」

「ち、ちがつ!・・・水!」

香喃がかぶりを振ると、沙捲は苦笑いしながら冷蔵庫から水を取り出した。

「いいか。学校には連絡してある。ちゃんと寝てろ。」

「・・・はい。」

「よし。」

沙捲は香喃の額に冷たい布を乗せ、ソファに寝転がった。

香喃の寝息が聞こえ始めたのを確認し、沙捲も眠りについた。

大事なヒト。

「おい・・・」

「・・・」

「おい！」

「っ？」

数回呼びかけられ、香喃は目を覚ました。

「おい。起きたか？」

「・・・沙捲・・・さん。」

「ああ。そうだ。起きれるか？話がある。」

いつになく神妙な面持ちで言うので、香喃も背筋を伸ばして起きあがった。

沙捲が昨夜水と共にくれた薬が効いたらしく、風邪はほぼ完治していた。

「俺はしばらく用があって留守にする。今日は調子が悪かったら学校に行かなくてもいい。何日間開けるかは分からないが待ってるよ。飯は3食分冷蔵庫に入ってるから勝手に食べ。」

「は、ハイ。」

早口で話したことを必死に頭の中に入れ、香喃は返事をした。すると沙捲は珍しくスーツ（これは前の住人が置いて行ったものらしい。）を着こみ、玄関のドアに手をかける。

「気をつけて行ってきてくださいね？」

香喃が何と無くさういうと沙捲は珍しく笑顔を見せた。だがその笑顔は瞬く間に鋭いまなざしを含んだまじめな顔になった。

「・・・今から言うことは絶対に覚えておけ。」

「？」

「俺と俺さんが来たとき以外はドアを開けるな。友達も家に入れるな。帰ったら必ず鍵をして窓もしっかり閉めておけ。あと、学校から帰ったら外出は控える。他人をまきこむことになる。」

「え？」

「わかったか？」

「あ・・はい。でもどうし・・」

「帰ってきたら教える。学校に行くときはひとりで行くな。倦さんに送り迎えはできるかぎり頼んである。絶対に人通りの少ない場所へは行くな。大通りを行け。ついでに、この部屋の固定電話には絶対に出るな。」

「え？え？」

「じゃあ行ってくる。またな。」

「あ・・えーと、いつてらっしやい・・？」

香喃は沙捲に言われた事を叩きこみ、学校の準備を始めた。

そして、玄関を出ると・・

「おう。」

「！」

倦が待っていた。きつと横にあるのは・・車。長ーいリムジン。恥ずかしくて顔が真っ赤になった。執事のような運転手がいなかったのがせめてもの救いだっただ。

「け、倦さん・・あのこれは・・」

「ん？車。」

それは分かっている。横にあるのは車。しかも左ハンドル。高級外車。

「沙捲に送り迎えを頼まれたんでな。さあ行くぞ。」

「は？え？あ、ああ！」

あつという間に香喃は助手席に引きずり込まれ、車は学校に向かって出発する。

その場には、茫然とする住宅街の人々が残されていた。

・・ちなみにこの場に香喃の学校の生徒も多数含まれていたこと

を補足しておく。

学校へ着くと、質問の嵐だった。リムジンで連れ去られる香喃を見ていた生徒があつという間に情報を学校内に広めてしまったのだ。

「なあ香喃、さっきの人って神埼グループの息子だろ!？」

そう話しかけてきたのは香喃の男友達である佐伯蓮だった。多分・・7年以上一緒にいると思う。親戚の家の近所で、香喃の義兄のこともよく相談に乗ってくれていた。

ついでに、香喃と蓮は交際しているなかでもある。

香喃は鷹西に想いを寄せたこともあった。

だがあくまでも鷹西には憧れ、蓮には恋愛感情・・べたに言えば愛している、ということなのだろうか。きっとお互い認識している交際期間は・・中1からだから約5年だ。

なんとなく、という部分も加えれば5年以上だ。

「神埼グループ・・うそ!？」

香喃はHR中だというのも忘れて声を上げ、自分の状態に気づき俯いた。

「倦さん・・あ・・」

香喃は家に言った時に見た名刺に神埼グループ社長、と書かれていたのをぼんやりと見たのを思い出した。熱のせいもあり、今初めて気づいた。

「神埼・・倦・・」

しっくりくるような気もする。だが倦と沙捲からは何も聞いていない。

「なあどうしてあんな人と一緒にいるんだ？」

「え・・・あ・・・成り行きで・・・」

「？」

「ほらそこ。私語は慎んでくださいね。」

講師に注意され、香喃はハイ、と小さく返事をした。またあとで、
と言い、その時間の話はそこで終わった。

「ちゃんと教えてくれよ。」

沙捲君、どうして休んだの？コールを振り切り、香喃と蓮はいつものように・・・というか沙捲が来てからは蓮とあまり一緒に居られなかったが・・・二人で昼食をとっていた。

「私も分かんない・・・」

出来れば嘘などつきたくない。

「？」

「アパートの住人さんで・・・えーと、それで学校方面に用があるから乗せてつてもらえって言われただけ。」

「へえ・・・なあ、20日んだけど夜〇〇のライブのチケットとれたんだ。一緒にいかねえ？」

「あ・・・何月の？」

「5月。今月だな。」

香喃が好きなアーティストだった。でもそれはチラッと話のネタに出したただだったのに、蓮は憶えていてくれたのだ。

香喃は嬉しくなって思わず微笑んでしまった。

だがすぐに沙捲の真剣な顔が浮かんだ。

『学校から帰ったら外出は控える。他人をまきこむことになる。』

「な、いいだろ？」

香喃は目を伏せた。蓮は本当に嬉しそうな顔をしてきている。だが蓮をまきこむことはしたくなかった。

「ゴメン。無理なんだ・・・」

「え・・・でもなんでだよ？」

「・・・」

危ないから、なんて言えない。

「ちよつと・・・お金がなくて。」

「ああ、大丈夫だよ。食事とか、そういうのは今回は俺が出すし、金は一切かからないし。」

「つ・・・ちよつと用事もあつて・・・」

「え？・・・約束、したよな？」

「え・・・？」

蓮の声が少し低くなったような気がした。

「お互いの誕生日。いつも2人でどこか行こうって。」

「あ・・・」

すっかり忘れてしまっていた。沙捲の言っていた用件が気になりすぎて、自分の誕生日やましてや約束など・・・

「もういい。おまえ、この頃少しおかしくないか？」

蓮はそういつて立ち上がった。

「まっ・・・」

「・・・お互い・・・無理してる気がするんだ。だから少し距離を置
くよ。ゴメンな。」

きつと蓮はそれをずっと感じていたんだろう。それを無くそうと誕生日に無理をしてチケットをとってデートを企画し、香喃を喜ばせようとしていてくれた。

「な・・・」

香喃は蓮の言葉に絶句してしまった。確かにこの頃蓮をほつたらかしてしまっただかもしれない。

この5年間そんなことはお互い共に1度もなかった。ケンカもめつたにせず、温厚な2人だった。

「待つて・・・まつて！」

香喃はしばらく呆然としていた。だが我に返り、蓮を追いかけた。

「待つて・・・蓮！」

名前を呼んだが、蓮はすでに廊下にいなかった。

香喃は勘で屋上へ向かう。

屋上は2人にとって大切な場所だった。

告白されたのも中学の屋上だ。2人つきりになれるのも屋上だけだし、初めてキスをした時も屋上だった。

サビついた扉をあけ、香喃は必死で蓮の姿を探した。

「蓮！？私が悪いの！いたら返事して・・・お願い・・・」

蓮がいなくなるのだけは嫌だ、そう思っで名前を呼び続けた。

すると、柵の少し手前に蓮はいた。

「蓮・・・ごめん・・・なさい。」

「いや・・・俺も悪かった・・・」

香喃が謝ると蓮もぼそぼそと言った。

「お前にはお前の予定があるもんな。無理強いしちまっでごめんな。」

「ちがつ・・・違つよ。約束、してたのに。忘れるなんて最低だもん。」

「ごめんね。」

「ああ・・・」

「また、今度にしよう。チケットは・・・お前の友達にで

も・・・」

「行く！」

「でも用事があるんだろ？」

「そ、そんなの平気！だつて約束だもん。大事な用事でも・・・ないし。」

内心沙捲に謝つて、香喃は決心した。大丈夫。きつと・・・。

「本当か？」

「うん。」

「でも・・・」

「もー！平気だって！」

香喃は涙がこぼれそうになるのを我慢して作り笑いをした。蓮はそれを見て苦笑いする。

「んな顔するなって。」

やはり蓮にはばれてしまう。どんなに頑張ったってお見通しなんだ。

そう思った瞬間、香喃は蓮の腕の中に収められ、ギュッと抱きしめられる。心臓が高鳴ってしまうのがわかり、香喃は焦ったが蓮の心音を聞いて笑ってしまった。背中に手を伸ばし、同じように抱きつく。

魔法を使った生活も刺激的だし、憧れている。

でも私は女子高生で蓮の様な優しい人もいる。

香喃はどちらをとるべきか、蓮の腕の中で悶々と考え続けていた。

ついにライブの日。倦には学校で用事があり、帰りも送ってくれることになった、と嘘をついた。良心が痛むような気もしたが、蓮の顔を思い出し我慢した。

駅のロッカーに荷物を預け、そしてあらかじめ中に入れておいた服を持ち出し更衣室で着替える。待ち合わせ場所は 駅前。香喃は高鳴る胸を押さえて蓮を待った。

ライブが終わり、食事も終わり、香喃は蓮と一緒に帰途についてい

た。

夜なので小声でお互い話していた。

蓮に、また行こうな、と言われた時は嬉しくて周りの状況なんて気にしないで思わず抱きついてしまった。

ちょうどその時、二人を見る不気味に光る目には誰も気づかなかった。

大事なヒト。(後書き)

遅れてごめんなさい！

ようやく登場人物のプロフィールが・・・というか今のところ誕生日くらいですけど、決まってきました。

香喃ちゃんの誕生日、5月20日に決まり！

あと、申し訳ないところがいくつか・・・。

1、更新が遅い・・・orz

2、季節がばらばらになることがしばしば。

3、誤字が多い・・・。一応編集はしています(汗)

申し訳ございません！季節、特にそろえていませんが大きな間違いがあつたら直していくつもりです。

あ、あとまだ言いたいことが・・・。

あまり関係がないかもしれませんが、私、尾田栄一郎先生のワンピースのファンで、コミックに出てくるSBSが好きなんです。(

S)質問を(B)募集(S)するのだ、という意味です。

ということなので、もしよろしければドンドン質問お願いします。

意見でもふざけているのでも楽しいので全然OKです！

たとえばこう言うキャラを入れてほしいとか、こう言うストーリーが欲しい！というリクも受け付けます！大歓迎ですw

今回は誕生日ネタがついに出来ました。そこでたとえば沙捲の誕生日は がいい！とかそういうことがあったりだとかしたら、もしよろしければコメお願いしますw

あ、ワンピース、もし好きだったら分かると思いますがあんな感じで面白い質問もお願いしますw

更新が遅いかもしれませんが質問は丁寧に答えていきたいと思っています。

一言でも結構です。お気軽にお願いします。

コメント待ってます

ついでに回答と云うか、そういうものは質問がききたい新しい小説を作り、そちらに掲載しようと思います。こちらはまだ作っていませんし、みなさんおわりの通り私は非常に更新が遅いので遅れることがほとんどだと思いますが、すいません・・・そこら辺はご了承ください。ユーザーページと云うところを押せばきっと作者のページに行けると思います。(まだ作ってません。ごめんなさい。)

これからもよろしくお願いします。

崩壊の迷宮1(前書き)

久々の・・

崩壊の迷宮 1

崩壊の迷宮

「はぁ・・・楽しかった。」

「俺も。ありがとな。」

二人は香喃のアパートの前に来ていた。

「何かお礼しないとね・・・」

「お前の誕生日だろ？」

蓮が呆れたように言った。

「でもさぁ・・・」

「・・・」

今回はそこそこお金もかかった。

蓮も少し考え込むようなそぶりを見せている。

「じゃあ・・・お休みのちゅー。」

「なっ・・・」

香喃は蓮のらしからぬセリフに赤面してしまった。

「嘘だよ。あれ？赤くなっ・・・」

香喃は背伸びして蓮の頬に唇を押し付けた。

「な・・・なっ・・・な・・・」

「じゃあ・・・また明日。ありがとう。」

香喃は仕返しとばかりにくすくすと笑った。

「かーなんちゃん。」

部屋に入ろうとすると背後から声を掛けられた。全く気配を感じなかったため香喃は小さく悲鳴を上げた。

「ああゴメン・・・」

尻もちをつきそうになった香喃を支え、倦はクスリと笑った。

「結構大胆なんだなあ？」

「はい？」

「おやすみのちゅう。」

「なっ・・・」

香喃は真っ赤になった。

「なんで！？知って・・・」

「ゴメン。盗み聞きなんてするつもりはなかったんだ。」

「そん・・・そんなのプライバシーの侵害です！」

香喃は叫んだ。

「あはは・・・でもいい彼氏だと思うよ。大事にしないと。ってこ

とで、お説教タイム。」

「はい？」

「無断外出。部屋、入ってもいい？」

「・・・」

こうなる事は自分の中で予想がついていたような気がする。

香喃は黙って倦を招き入れた。

「・・・で、それで・・・」

「わかった。」

香喃が全てを話すと倦はため息をついた。

「あのなあ、今回は沙捲には言わないでやるが、・・・」

「ほ・・・本当ですか？ありがとうございます・・・」

「でもな、何かあったらどうするんだ？ん？」

「そ・・・それは・・・」

「断ったんだろ。無理矢理連れて行かれたのか？」

「違います！蓮は悪くないんです。私がただ言いつけを守らなかつ

ただけで・・・」

「ああそうか・・・。まあ香喃ちゃんくらいの年だったら外出禁止

はキツイと思うがな・・・とにかく周りのやつを巻き込みたくなかったらちゃんと守れよ？いいか？」

「はい。」

香喃はホッと息をついた。

「で、言わないといけない事がある。」

「・・・はい？」

「明日、明後日家をあける。沙捲に呼ばれていてな。」

「・・・沙捲さんが？」

「ああ。だからちゃんと言いつけ守ってくれよ？」

「はい・・・。ごめんなさい。」

香喃は倦に頭を下げた。

「おはよ。」

突然背後から声をかけられ、慌てて振り返る。

「何ビクついてんだよ？」

「ああ・・・なんでもないよ。おはよう。」

昨日倦に注意されたから神経質になっているのだろうか？

香喃は誰かに見られているように感じて仕方なかった。

「どうした？昨日ので疲れた？」

「違うって。すごく楽しかった。」

「また行くのかな。」

「うん。」

それが外出禁止令が終わってからだといいが、と香喃は心の中でつぶやいた。

「香喃付き合い悪いー！」

「ゴメン、ホントにゴメンー！」

香喃は学校中を回って向こう1ヶ月の約束を全て取り消しに回った。

『これで・・・おっけ・・・』

くたくたになつて自分の席にもたれた。

「西兼さん。」

「は、はいっ!？」

担任から声をかけられびくりとした。

「なんででしょうか・・・?」

何か悪いことしたかな、と反射的に考えてしまう。

「来年入部する剣道部員の増員についてなんだけど・・・ここがね・

・こうで・・・こう・・・」

「はあ・・・」

今年参加した大会で香喃は優勝した。

あまり目立っていなかった剣道部が急に名を上げたことでなんと新入部員が40人。

カツコいいだとかそういうことで来られては困るのだが・

「今日放課後に見学に来るんだけど、大丈夫よね?」

部長としてでなければいけないのだろうか・・・

「えっと・・・多分・・・平気だと・・・」

「そう!ありがとう。」

担任は鼻歌交じりに去っていく。

香喃は慌てて携帯を開いて沙捲あてにメールをうつ。

【今日放課後7時30分まで部活があるんですけど、行っても大丈夫ですか・・・?】

メールをするなどは言われていない。

すぐに返信が来た。

【・・・まあいい。気をつけるよ。】

香喃は言葉少ない沙捲にすこしムツとした。

【気をつけるって何にですか?言ってくれないとわかんないですよ・・・】

【・・・悪い。今は言えない。とにかく気をつけてくれ。】

【ワカリマシタ。】

香喃はムツとした表情で携帯を閉じようとした。

「っと、誰とメールしてたんだよ？」

「もう・驚かせないでよ。」

香喃は少しひやっとして極力注目させないように携帯を閉じる。

「誰と？」

「・・・大家さん」

嘘についてもどうせ見破られてしまう。

「ふーん・・・」

「・・・みる？大した内容じゃないよ？」

別に見せても良い。

「じゃあ見る。」

香喃は黙って最初のメールを見せた。

「今日延長？」

「うん。」

「なんで大家にメールするわけ？」

「門の門を閉められちゃうと中に入れないの」

「え、それじゃ大変じゃん。」

蓮は携帯を返した。

「でも家賃安いし（笑）」

「閉めだされたらうちうちこいよ。」

「ありがとう。」

香喃はくすくすと笑った。

「小手！！」

審判の旗がバツとあがった。

「一本！小手あり！」

香喃はふうと息をついて防具を外した。

新入部員はポカンと口をあけて香喃を見ていた。

師範相手に圧倒的な差で勝った香喃に茫然としているようだ。

「え、えっと、まずはこんなに打てることはないんです。素振りだとか、そういうのはコートに入れるようになってもやりますし、初めからコートに入れることはまずないので

初めの半年から1年は筋トレになります。」

そうきっぱりと言ったが新入部員の顔つきは変わらない。

「せ・・・先生・・・」

香喃に助けを求められ、顧問が口を開く。

「この部に来てもしいきなりこいつみたいに活躍は出来ねえぞ。最初
は下積み、最終的に活躍できるとも限らん。それでもいいのか？」

顧問の坂本千秋（女性のようだが男だ。）は頼りになる。

生徒からの人気もあるし、顔も沙捲ほどではないが綺麗だった。

「はい！」

元気な返事が返ってきて香喃と千秋は面をくらって顔を見合わせる。

「仕方ないか・・・指導してやってくれ。防具を使わないやつ。」

「はい。」

部活が終わり、くたくたの状態で帰途へ着く。

沙捲に言われたとおり大通りを歩くがやけに人が少ない気がした。

『なんだろうこの気配・・・』

誰かに見られている気がするようだ・・・

だが疲れているのだろう、と一掃し、重い歩を進めるとガツと腕を
つかまれた。

「っ!？」

「静かにしろ。」

背筋が寒くなるような気がした。

「しょ・・・」

沙捲さん？と聞こえて名前を出してはいけないと思いきもつた。

「佐伯蓮を預かっている。ここから2つ目の信号を左に曲がり、地下にあるラビュリントウスというBARに入れ。つづりはI・a・b・y・r・i・n・t・h・u・sだ。」

機械のような感情のない声がそう告げる。

横から手が伸びてきて、つづりを書いた紙が渡される。

「今から1時間以内に来なければ佐伯蓮は殺す。」

パツと手が離れ、気配がとおざく。香喃は震えが止まらなくてしばらく動けなかった。

蓮が・・殺される・・なんで？どうして蓮が・・？

「私のせいだ。」

香喃はぼつりとつぶやき涙目になった。

ぐずぐずしていたら蓮は殺されてしまう。

香喃はハツと思いついて携帯を取り出した。

「なん・・で？」

いつもだったら全て立つはずのアンテナが圏外になっている。

これでは電話も・・

キヨロキヨロとあたりを見回すが開いている店も不思議なことに1つもなかった。

「ラビュリントウス・・・迷宮？」

香喃は困り果ててとりあえず歩き始めた。

このつづりはラテン語だろう。迷宮・・・

香喃はぐいと流れかけた涙を乱暴にぬぐい、走り出した。

崩壊の迷宮2 (前書き)

ちよいサド。

崩壊の迷宮2

崩壊の迷宮2

息を切らして地下へと続く階段の前で立ち止まる。

「・・・」

ハシゴに近い急な階段が折れ曲がって下へと続いている。

全てを飲みこみそうにぼつかりと開いた入り口には不気味な電灯が
かかりほのかに足元を照らしていた。

『・・・沙捲さん・・・』

ここにはいない人物に心の中で助けを求める。

もう一度暗い光に照らされ反射している携帯を見た。

『だめだ・・・』

相変わらず圏外になっていた。

全速力で走ってきたので時間はあと30分近くある。

だが階段がどれくらい続くか分からないのだ・・・。

香喃は入り口の前で迷っていた。

『・・・蓮・・・っ・・・』

彼の人の顔を思い浮かべ、香喃はゆっくりと足を踏み出した。

ぴちゃり・・・と足元で水音がした。

階段は不気味に湿っており、所々たっぷりと水を含んだ苔が生えて
いた。

剣道の竹刀を袋から出し、袋だけを入口へと置く。袋には一応名前
だけが刺繍されている。

まだ心の中では沙捲が来てくれるのではないかと期待していたの
だ。

証明があつたのは最初だけで、携帯の明かりを頼りにと思ったが充電が急激に減ってきている。

助けを呼べるとしたら携帯しかない。

香喃はゆっくりとポケットに携帯をしまい、竹刀を構えた。

カバンも邪魔になると思い入り口に置いてきた。

「・・・ひっ・・・!？」

ぽたりと冷たい滴が首へと垂れ、びくりとする。

『情けないなあ・・・』

試合の時はどんな相手にだって竹刀を持てば立ち向かう事ができたのに。

今は水に脅えている。

情けなくてしようがなかった。

香喃は竹刀を構えなおし自分に喝を入れ、慎重に滑りやすい階段を下っていった。

階段は本当に”迷宮”のようだった。

一本道ではあるが、何度も折れ曲がる壁にぶつかりそうになる。

『あと・・・15分』

ついに香喃は走り出す。

「きっ・・・や!？」

ずでつと転び、痛みに涙がにじむ。

「あ・・・れ？」

指先に何かの取つてのようなものが触れる。

香喃は立ち上がって思い切つてぐい、と引いてみた。

”ガチャ”

「あ・・・」

壁のように見えていた場所はドアだった。

『もしかして……!』

入り口からきて、ずーっと右回りだった。

『それなら……!』

香喃はダツシユで前の曲がり角に戻って下を探った。

『……そういうことね……』

階段は螺旋状に下に続いていて、曲がり角の壁はドアになっていた。そこからならば、一番下に降りずとも全て同じドアの先へと行けるようになっていたのだ。

「くそ……」

くたくたの足でそのドアの先にすすんだ。

”やめる!”

大きな声が響いてきた。

香喃は目を見開いた。

「蓮……!」

その声のもとへと思い切り走った。

「うぶっ!?!」

いきなり壁にぶつかりそのまま尻もちをついた。

『ドアだ……!』

壁の隙間からは光が漏れていた。

隙間に指を入れ、思い切り引くとサビをばらばらと落としながらドアが開いた。

『まぶし……』

しばらくの間目が開かなかった。

「おまえ!?!なんで……」

香喃は目を擦って蓮の姿を探した。

「蓮……!」

いた!鎖で椅子に固定するようにして座らされていた。香喃は走った。

「やめる！」

「っ!？」

その瞬間、何かに足をかけられ床に押し付けられた。

「何よ!？だれ!？」

香喃の体がふわりと浮き、椅子にどさりと座らされた。

「動くな。」

感情のない声。香喃は凍りついた。道で聞いたあの声と同じだ。その時、腕にひんやりとした感触がした。

カチャリと片手ずつ椅子の肘かけに手錠で固定された。

「こつちにもだな・・・」

スカートでむき出しの足にも同じようにして冷たい手錠がかけられる。

「私はここに来たわ!!蓮を離しなさいよ!!」

「まだダメだ。お前は”力”をつかって逃げるだろう。」

香喃は椅子ごと動かされた。

蓮と向かい合う形になる。声の主が蓮の口にガムテープを貼っている。

その時はじめて声の正体を見た。

『なんか・・・普通・・・』

おかしいのは声だけで、形は人だ。

ハツとするような綺麗な青い眼をした白人。

「だれ・・・あなた・・・」

「俺か?クライムだ。」

『・・・”Crime”・・・?罪・・・』

さつき、宙を浮かされたのは間違いなく”魔法”。それに自分の力の事を知っていた。

「蓮・・・ごめん。キケンな目に・・・」

「・・・」

蓮は小さく首を振った。

「さて・・・ラナ・アーシャ。」

「……」

香喃は唇をかみしめた。

「レインの居場所を吐け。」

男はマスクを外した。そこには変声機がつけられており、それを外した。

「なによ…それ？」

「もし万が一他の人間に聞かれても困るからな。ここなら別に必要ない。」

普通の声だった。ただ、外人なのに滑らかな日本語を話すのは少しおかしかった。

「さて。居場所を吐け。」

「…知らない。」

香喃が首を横に振るとクライムは目を細めた。

手に持った小型の折りたたみナイフの刃を出す。

「お前、切られた事はあるか？」

そういうといきなり香喃の腕に軽く刃をすべらせる。

ひんやりとした感触に身を凍りつかせる。

「吐け。」

香喃は黙って首を振った。

「……」

「うづうづ!!!」

蓮が目を向いてくぐもった声を上げる。

そして肩に擦りつけるようにしてガムテープをはがし、思い切り叫んだ。

「てめえ!!! やめろ!!!」

軽くクライムの指に力が入れられた。

切れ味の鋭いメスのようなナイフは香喃の皮膚を容易に切り裂いた。

ジワリと血が滲み、珠になって流れ落ちる。

香喃は蓮をこれ以上不安にさせてはいけないと下を向いて耐えた。

「……」

「……………」

「……………」

香喃は黙って首を振る。

「知らない。」

「そう来るか。いつまで耐えられるかな……？」

「よせ！俺にしる！」

「ふん。男などなぶって何が楽しい。まあいつまでもこいつが黙っているならやってやるさ。」

「……………」

それまでには誰か来てくれる……そう考えるしかない。

何にせよ、沙捲の居所は分からないのだから。

「本当に知らないの。」

「……そんなはずないだろう？」

「本当よ……」

香喃はうなだれた。

「……なぜ力を使わない。」

「……力？何よ……それ？」

香喃はしらばつくれた。クライムは不思議そうに首をかしげたがまたナイフを構えなおす。

「さて……お前出血は少ないが切られると一番痛いところはどこか知っているか？」

クライムは嬉しそうに言った。

「そうね……」

香喃が口を開くと驚いたように笑った。

「香喃……？」

蓮は目を見開いた。

「蓮、ごめんね。絶対に助けるから」

クライムは香喃がそう言ったのを聞いてバカにするように笑った。

「良い根性だ。」

「痛いところね……首かしら。」

「違うな。切ったら出血量が一番多いだろ？ここだよ。」
「っ！？」

香喃はクライムが太ももに手を伸ばしてきたので足を閉じようとした。

だが短くつけられた手錠のせいで一定の距離を超えると閉じることができない。

クライムは香喃の足を開かせ、内側に刃を当てる。

「・・・変態」

香喃が吐き捨てる。

「まあ確かに変態かも・・・な！」

ザリツと音を立て薄く皮膚を裂かれた。

「っあ・・・」

「本当は紙何かでやると最高なんだがな・・・」

さつきとは比べ物にならない痛みで小さく声を漏らし、香喃はそっぽを向いた。

「痛い？」

「・・・蓮を・・・別室に連れて行って。」

「なんで？」

「・・・」

「だってその子がラナ、お前の事で辛そうな顔するの最高だろ？」
蓮の目が見開かれる。香喃はカッと頭に血が上るのを感じた。

「この変態！」

足ですぐ近くにある顔を蹴りあげようとするがガツと鎖に阻まれる。足首が擦れ、赤く血がにじんだ。クライムはにやっとなつて香喃の耳元に唇を近づけた。

「もっと気持ちよくしてやるよ。」

「っ・・・」

香喃は唯一自由である頭で思い切り頭突きした。

「っ！？」

ごっ、と小気味いい音を響かせクライムがひるんで後ずさった。

「ほんつとにいい度胸だな。」

「少なくとも……」

香喃は小さく息を吸った。

「ガキ縛り付けていたぶつて楽しむ変態野郎よりは度胸あるわよ」「挑むようにクライムを睨みつけた。

クライムの目が微かに光る。

「面白いな……。さて……。じゃあ再開するか。」

何事もなかったかのように言ったが、その手つきは先ほどまでとは明らかに違っていた。

「おっと……。血を流し過ぎか。」

クライムは数時間たった後そう言った。

出血の多い傷に手を当て、治療をしていく。

「……」

貧血で目の前がぐにやぐにやと歪んだ。

『沙捲さん……』

ふいにツツと涙が伝う。香喃も予測していなかったことだった。会いたい。あのふてぶてしい声でもいいから聞きたい。

蓮はずつとガチャガチャと鎖を鳴らしている。

「五月蠅い！女と一緒に殺してほしいか!？」

クライムも香喃が何も口にしない事に大分イラ立っていた。

「……香喃……」

蓮の悔しさをこらえた声が聞こえた。

香喃は蓮の事を見なかった。

もし……。生きて帰れたら蓮に死ぬほど謝ろう。

こうして他の事に気をそらさなければやっていられない。

「早く吐けっつーの……」

「……」

ズツ、と刃が腕に入った。

「なあラナさんよ。辛いだろ？早く言えよ。」

ヒクリと震えた香喃を満足げに覗き込む。

「っ……」

香喃はその顔を思い切り睨みつけてやった。涙を拭く手も上がらないので跡が目立つ。

「知らないつつつてんでしょ？何度言えば分かるのよ？このカス野郎。」

ピキッとクライムの額に青筋が立つ。

「……ホントにいい度胸だ。」

「それ褒めてるの？」

「まあそんなところだ。」

「……」

香喃はまた視線を床に戻した。

ふと蓮が視界に入った。

「……あ！」

蓮が激しく暴れたせいで鎖は大分緩んでいた。

香喃はチラリと蓮に目くばせした。

『これしかない……』

蓮も香喃の視線に気づき、自然なそぶりで香喃に返事を返した。

「おい。」

「……なに」

「休憩だ。くれぐれも変な気は起こすな。」

話しかけられた瞬間背筋が凍った。

だがこれは良い機会だ。

「……」

香喃は床に視線を落としてクライムをやり過ごした。

ばたりとドアが閉まった。

香喃は急に振り向いたりせず、無気力を装ってふらりと室内を見回す。

「……ほどける？」

「・・・くっ・・・悪い・・・無理だ・・・」

香喃はがつくりと下を向いた。

「傷は・・・」

「うん・・・平気。」

「居場所を吐けとかどうとかって・・・」

「・・・それは今は無理よ。」

香喃は髪につけたピン止めを口にくわえる。

これを鍵穴に差しして手錠を外す。

上手く行くかはわからない。こんなの本で読んだくらいだし。

もともと恋愛小説より推理小説が好きなたちなのだ。

「蓮・・・ドアを。」

蓮は小刻みに頷くとドアの方を見はった。

「・・・外れた・・・」

奇跡的だった。顎がつかれ始めたその時、カチャリと手ごたえがあり手錠が外れた。

片方が外れてしまえば簡単だ。香喃は次々に手錠を外した。

・・・もしかしたら罠なのかもしれない。でも外すしかなかった。

「っう・・・」

ぐらりと視界が揺れ、膝をつく。

「かなっ・・・」

「シーツ・・・」

静かに、と口に指を当てゆっくりと立ち上がる。

切られた個所が痛い。今更涙が出てきた。自分を奮い立たせるように竹刀をひつつかんで堪えた。

部屋の隅にあった・・・（きつと蓮を縛るときに余ったのだろう。）手頃な鎖をつかんでドアをその場しのぎに塞いだ。

軽くしゃくりあげ、香喃はふらふらと蓮の前に膝まづく。

「外すからすぐにドアを鎖と椅子で塞いで・・・。私は出口の確保をする。」

『蓮の前で魔法はまずい・・・』

香喃はカチャカチャと蓮の手錠にヘアピンを差し込んだ。

「・・・おっけ。」

香喃は蓮のすりきれてしまった手首を複雑な思いで見ている。

「っ・・・れ・・・ん・・・？」

「ゴメン。俺何にもできなかった。ゴメン。」

蓮は香喃を優しく抱きとめる。

「ゴメン・・・」

香喃はグツと涙を堪えた。

「ううん・・・平気。」

そういつて笑った香喃が痛々しくて、蓮は腕を離した。

「生きて帰る。」

「・・・ああそうだな。」

2人は各々の仕事へと取りかかった。

崩壊の迷宮3

崩壊の迷宮3

「っ・・・やべえ・・・って・・・」

蓮が全体重をかけてドアをふさいでいる。

「っ・・・とっ！・・・やべっ・・・」

クライムが外側から何度も体ごとぶつかってドアを開けようとしているのだ。

ズンツと音がするたび蓮の体も揺らぐ。

「・・・香喃っ・・・もうっ・・・限界だ・・・」

香喃はガチャガチャとドアノブを回していた。

「このドア金庫みたいになってるのよ・・・」

冷静に言い放つ香喃に蓮はいつものような呆れた顔を見せた。

「そんなこと言われたって・・・」

その顔を見て、香喃は学校に戻ったようだと思った。

いつも蓮はこんな顔をした。香喃が変な事を言ったり、馬鹿な間違いをしたり、ふざけたり。。。

つい数時間前の事がまるで何年も前のようだ。

『・・・ダイアル式の金庫なんて・・・無理よ・・・』

口調は落ち着いてはいたが香喃は内心泣きだしそんな思いだった。

「蓮・・・」

香喃は決心した。

蓮を押しつけ椅子で上手くつつかえ棒をする。

だがそれも一時しのぎにしかならないだろう。ほら、もうドアは開

きかけていた。

「蓮、後ろ向いてて。」

「な・・・何する気だよ!?!」

蓮はやめろというように香喃の腕をつかんだ。

自分よりずっと細くて華奢な体。でもその体は傷だらけで、蓮はハツと手を離れた。

「・・・いいから!」

香喃が初めて声を荒げた。

「っ・・・どうし・・・」

蓮が抗議しようとするが香喃はバツサリと言い放った。

「早くして」

蓮が後ろを向くと香喃は意を決して手に魔力を集中させはじめた。

『まだよ・・・まだ・・・』

クライムが出てくるのをゆっくりと待った。

「いい度胸じゃねえかガキ!」

クライムは扉を蹴破って勢いよく部屋に入ってきた。

幸い、香喃たちや部屋の状況は分かっている。

怒りにまかせて押し入ったようだ。

『今だ!』

香喃はクライムの腕に飛び込み、胸に力を纏った腕を押し当てる。

香喃の手首が虹色に輝いた。

「なんっ・・・だと!?!」

クライムは香喃の魔力を見て綺麗な目が零れ落ちそうなほど見開いた。

今までの怨みも込めて唾然としているクライムを笑ってやった。

「ワレVale, ベックートルPeccator。」

(バイバイ、罪人さん。)

ラテン語は好き。少ないお金のあまりはいつもそういつ本に当たっているから。

久しぶりにスカツとした気分だ。

「っ！」

ドツと低い音がし、クライムは仰向けに倒れた。

クライムの胸に衝撃波を放ったのだ。

香喃はクライムをゆっくりと覗いた。静かな息をしている。

『よかった・・気絶してる。』

後ろを向いていた蓮に声をかける。

「蓮、いいよ。」

「っ・・それ・・」

「有段者よ？私。」

香喃は嘘をついた。竹刀をくるくるとまわして見せる。

蓮が振り向いた瞬間慌てて掴んだものだ。

「縛るか。」

「うん。」

酷い疲労感に香喃は壁に手を着いた。

元々貧血気味の香喃の体に魔法の副作用が重くのしかかる。

とにかく香喃は自分の体が自然発火しなかったこととクライムを殺さなかったことに安堵していた。

香喃は疲れをごまかすように座り込み、鍵をのぞく。

「縛った？」

「おう。」

「とりあえず努力はするけどそいつが起きたら教えてもらおう。」

「そうだな・・・」
2人はとりあえずホツとして息を吐いた。

何枚ものダイヤルの歯。

こんなものヘアピンではあけられるわけがない。

「ダメみたい・・・ダイヤルなんて分かんない」

香喃は目を伏せた。

「俺やってみる。」

「うん・・・」

香喃は鎖で縛られたクライムを見下ろす。

「あっ・・・」

「？」

「ごめん・・・折れちゃった・・・」

蓮が青ざめた。

香喃のヘアピンは劣化しており途中からぽきりと折れてしまった。

「しょうがないよ」

「・・・」

そのとき、視線の端で何かが動いた。

「蓮!」

「ん? どうし・・・っ!」

クライムがいつの間にか鎖を引きちぎって蓮に襲い掛かる。

手には先ほどとは比べ物にならないくらい大きなナイフをつかんでいた。

香喃は蓮とクライムの間立ちふさがる。

「っ!?!」

香喃はレインを呼び出すために重要な人質だと分かっていたようだが、もはや勢いは止まらない。

「やめる香喃！」

蓮の目が香喃を捕える。

「っ……っ」

香喃にまっすぐとナイフが降ろされる。

『……死ぬ、かな。』

驚くほど冷静だった。香喃の口元に、ゆっくり、ゆっくりと薄い笑みがかんでいった。

サヨナラ。

サヨナラ

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「？」

数分の沈黙が続く。

『かかった・・・』

沙捲に教えてもらった封印陣だ。

クライムはそこに足を踏み入れた瞬間微動だに出来なくなった。最初からこうしておけば、とは思ったが喋れないと困る。

「?・・・」

「大丈夫・・・」

クライムの手から恐る恐るナイフを奪った。

『・・・・・・・・これ・・・もしかして・・・』

香喃は手にした瞬間たくさんの虫の羽音のような振動を感じていた。・・・・・・・・イム?何かあったか?

香喃が閉めなおしたドアの向こうからまた無機質な声が聞こえてきた。

「仲間がいたのね・・・」

蓮は聞き耳を立て、ドアを見張る。

香喃がゆっくりと開かなかったドアの隙間にそれを差し入れかるく力を入れると驚いたことにロックされている鍵が紙の様に切れた。

「出よう!」

香喃がそう言った瞬間、ドアが破られた。

「蓮!」

長い階段が続く。

香喃は蓮がついてくる事を確認し、階段を駆け上がった。

「閉めて！」
蓮が重いドアを思い切り閉めた。
だが、バキツと音がし振り向くとドアは粉々に吹き飛ばされた後だった。

『あと少し・・・あと・・・』
香喃の竹刀の袋が見えた。

「ぶっ!？」

だが外に出た瞬間何かにぶつかった。

「っ・・・」

『やばいっ!』

香喃はクライムから奪ったナイフをかざす。

「やめる。俺だ。」

「・・・へ・・・?」

香喃がぴたりと止まった。

「香喃止まるなって！」

蓮に押されるまま進む。

「あ・・・?えつと・・・確かくどつ・・・じゃなくて!なんであんたが・・・」

蓮がそういうと沙捲はあからさまに嫌そうな顔をした。香喃は慌てていった。

「お、大家さん・・・の息子で・・・きつと帰りが遅かったから・・・ね?」

「そんなところだ。」

蓮はムツとして香喃の手を引いて歩きだす。

そのとき、沙捲がすれ違いざまに香喃に小声で言った。

「コンビニに入れ。15分したら迎えに行く。」

「あの、地下に・・・」

「こっちは俺が適当にやる。」

「は・・・はいっ」

香喃も小刻みに頷き、蓮の横に並んだ。

「蓮、絆創膏・・・」

「・・・そうだな。」

香喃はコンビニの前で蓮に言った。

2人は中に入る。

「・・・」

「・・・」

2人は無言だった。

「「あのさ・・・」」

今度は2人同時に話し驚いたように目を見合わせる。

蓮の顔に笑みが浮かぶ。

香喃の口からもくすりと笑いがこぼれた。

「なんだったんだよ？あいつ。」

「・・・わかんない」

嘘は言っていない。本当に知らないのだ。

「・・・あ」

香喃が小さく声を上げる。

「？」

蓮もつられて入り口を見た。

「おう。」

沙捲は軽く手を上げて2人に近づいてきた。

「濡れてるぞ」

蓮がそういう。

「ああ、雨が降ってきたな。」

ふと窓を見るとつつすらと雨が降っていた。

「もう遅いぞ？帰った方が良いんじゃないか」

沙捲は蓮に向かって言った。

なんとなく、怒っているような感じがして香喃は不安に感じた。

「・・・蓮、送ってく。」

香喃は歩きだそうとする蓮の腕をつかんだ。

「お前帰りはどうする気・・・そうか？じゃあ頼む。」

沙捲が言うのを、蓮が無理矢理押し通した。

香喃はますます不安になる。

「俺も行くよ。帰り、あぶないし」

沙捲の口調は有無を言わせない雰囲気があった。

香喃は黙ってうなずいた。

生憎3人とも傘を持ち合わせていなく、小雨の中早足で歩いていた。

「沙捲さん、あの・・・」

香喃は蓮の家の近くに来ると沙捲に小さく声をかけた。

「？」

「蓮と話があるんです。ちょっと・・・」

「ああ・・・好きなように話せ。」

自分が負担にならないように、と沙捲は最後の言葉をつけたした。

沙捲が離れると香喃は蓮と向き合った。

「蓮、あのね・・・」

「・・・なあ、ほんとのことっていえないか？」

香喃を遮るようにして蓮は口を開いた。

「・・・言えない。だからね蓮。」

「？」

「別れよ。」

「は・・・？」

香喃は蓮をまっすぐ見据えた。

「別れよう。もう一緒にはいられない。」

「・・・どうしてそう思う？」

蓮も言いたい事をグツと堪えたようだった。

「理由は言えないのだから・・・」

「じゃあ・・・それなら理由なんていらない！」

そういつて強く香喃の肩をつかんだ。

「っ・・・」

「ずっと一緒だと思ってた。前出かけた時も・・・」

蓮は言葉に詰まったようだった。

香喃は軽く身を引き手から逃れた。

「うん。楽しかったよ」

「なら・・・」

「でももう終わり」

香喃は蓮の言葉を払いのけた。

「ずっと一緒にいてさ、これからも一緒だと思ってたけど、もう終わり。」

「・・・」

香喃は黙り込む蓮から眼をそらした。

「蓮が嫌いになったんじゃないの。でも私と一緒ににはいて欲しくない。」

「・・・もういい。」

蓮が低い声で呟く。

『怒つてるときの声だ・・・』

香喃はぼんやりと思った。知りつくした蓮の仕草。

涙は出ない。だが閉ざした心の何重もの扉の奥で小さく何か泣いていた。

2人の心境を表すかのように雨足が強まっていく。

蓮は泣いているのだろうか・・・？

雨のせいでよくわからない。

前髪から水がぼたぼたと垂れた。

「じゃあね。」

自分でもびっくりするような冷たい声だった。
そのまま踵を返し蓮に背を向け雨の中歩きだした。

『なんだろう・・・痛いなあ・・・』

香喃は胸の上を握り締めた。

だがすぐに手を離して振り返る。

「・・・いいのか？」

「ええ大丈夫です。」

沙捲は驚いたように去って行く蓮を見ていた。

沙捲が歩きだす。

香喃はすこし立ち止まって蓮の行った方向を見て囁いた。

サヨナラ

大事なヒト。

仮面舞踏会の夜1「不安なココロ」

不安なココロ

パンツと高い音が鳴り、香喃の胴に衝撃が走る。

『しまった・・・』

「胴あり！」

審判がバツと旗を上げた。

香喃はふらふらと礼をかわした。

「おい西兼い！！！」

千秋に怒鳴り声に剣道部員は一齐に肩をすくませた。

普段はフレンドリーで人気のある千秋は、怒るとかなり怖い。

「お前やる気あるのか！？」

「・・・すいません」

香喃は目を伏せた。

どうしても集中できない。これで負けたのは十数回目だ。

『どうして・・・？』

意味のわからない不調に涙がにじんだ。

だが千秋はずばりと言い放つ。

「居残りだ。」

「えっ・・・」

まだ外出禁止令はとけていないのに。

『沙捲さんに連絡しなきゃ・・・』

香喃はハア、とため息をついた。

蓮の一件があった後、傷の治療を受けながら沙捲に何と問いかけても返事はなかった。

「お前の身があぶなくなる。」

・・・もう危ない目にあっただけですけど。
そうは思ったが沙捲の真剣な表情を見ては何も聞けなくなっ
てしまった。
ただ、補足すると沙捲は帝王による機密の指令を受けているらしい。
それと、メールを送ったのは沙捲ではなく、クライムこと諜報員。
そのおかげで沙捲は香喃が家にいるとばかり思っていたらしく救出
が遅れたらしい。
だからこれからは電話で合言葉を言ってから喋ることになる。
結局香喃は何も知らされることなく、外出禁止令も解除されずに行
き先も告げず出て行ってしまふ沙捲を見送るしかなかった。

「もしもし・・・」

”神に誓うな”

すぐに早口で声が返ってきた。

香喃は小声で言う。

「己に誓え。」

沙捲はなぜこの言葉にしたのだろうか？

まあ良いとは思っが・・・

なんだか自分には合わないし、聞いたことが無いと香喃は想う。

” 用件は？ ”

「・・・居残り・・・デス・・・」

”・・・”

沙捲は黙っていた。不機嫌なのが電話の向こうからも伝わってくる。

” わかった・・・終わったら言え。迎えに行く ”

「あ・・・ありがとうございます。」

香喃はおずおずと返事をして電話を切った。

「・・・何があつた？」

怒られる怒られる、とドキドキしていた香喃は何度も瞬きをして千秋を見た。

「・・・え？」

「集中できないみたいだな。」

「・・・そうです・・・けど・・・」

「何かあつたんだろ？」

「言いたくないんです。」

「というか言えないし。」

香喃は小さくため息をついた。

それが原因だとは思えない。蓮と別れたのは当然の事だと思つし、あまり気にした事もない。

・・・本当に蓮が好きだったのだろうか？そう思うほど。

「言えとは言つてないぞ？ただいつまでも集中できないのは困る。」

試合も近い。」

「・・・はい、すいません。」

「・・・なんていうんだろうなあ？今のお前は・・・」

「はい・・・？」

千秋は香喃の心臓を指差す。

「心が無い。」

「は？」

「ずっと上の空、動きも鈍い、自分の気持ちを無視してんじゃねえか？」

香喃は目を瞬かせた。

「無気力って感じだよな。なんだ彼氏にでも振られたか？」

千秋は茶化すように言った。だが香喃が答える。

「私が振つたんです。」

「ほお・・・」

千秋はしまった、という顔をした。まさか本当にそうかとは。

「でも苦しくはないんです。しょうがない事だったし、それでよか

ったと思ってるんで原因じゃないですよ……」
香喃の目線はあらぬ方向にある。

「……」
千秋は香喃がうつろに見えて眉をひそめた。

「……こんな話してすいません。」
ぼうつとしているようでふらりと頭を下げた。

「……泣いたか？」
「いえ……泣けなくて」

香喃は苦笑した。

千秋はふと自分の昔の事を考えた。

『俺もあつたな、こんなこと。』

失恋しても涙が出ない。抜け殻のようになった憶えがある。

「……お前が立ち直らないと部活はできねえぞ。」

「……そう……ですね。すいません。」

「……泣けるなら今のうちだぞ。大人になったら泣く事も出来ねえ。」

千秋はぼそりと言った。香喃はその表情の中に過去が絡んでいるのが見えるような気がした。

「……ありがとうございます。」

力なく頭を上げた瞬間、千秋の複雑な表情が見えた。

だが香喃は気づかなかつたふりをし、教室を出た。

”はい、紅桐です。”

「もしもし……あの」

香喃は小さく口を開いた。

”只今電話に出ることができません。ピーという発信音の後にメッセージをどうぞ。”

香喃は小さく驚いて無機質な機械の音を聞く。

ピーッ

「お忙しいみたいなので待たずにいきます。怪我しないでくださいね」

そうとだけ告げ、香喃は学校を出た。

「ふう……」

香喃は自室に入ってボフリとソファに沈み込む。

『沙捲さん……どうかしたのかなあ……』

沙捲はいつになってもかえってこない。

先ほどまで湯気を立てていた食事は冷たく冷めてしまった。

香喃は小さくため息をついて自分の分にと作ったおにぎりをかじり、玄関を見る。

今日は早く帰ってくるはずなのに……。

沙捲は真夜中を過ぎてもかえってこなかった。

もしかしたら家にも寄れない理由ができてしまったのだろうか？
んだが酷く不安だった。

嫌な予感がする。第六感とでもいうのだろうか……？

香喃は知らず知らずのうちに服を着替えていた。

『……でも、どこにいるんだろう……？』

そう考え、すくと椅子に座りこむ。

そうだ、沙捲からは何も知らされていない。

居場所も……何をしているのかも……。

香喃はギツと唇をかみしめた。

今日は倦さんもないし、誰に言えばいいのか……。

『……そうだ！』

香喃は靴をはき、押し入れにしまえばなしの帝王からもらった防具を抱え、パタパタと走っていった。

仮面舞踏会の夜2「狼のエスコート」

狼のエスコート

香喃は紅桐と書かれた表札の前で立ち止まった。

ドアノブに手をかける。

「あ・・・」

ガチツと引つかかる感じがあり鍵がしまっているのが分かった。

「参ったなあ・・・」

倦さんの家の鍵もしまっていた。生憎ヘアピンも持っていない。

「ええい・・・仕方ないよね？許して！」

香喃はそう心の中で呟いて、手首に触れた。

ぼうつと暗闇の中で香喃の顔が虹色の光に照らされた。

香喃は溢れ出る光を隠すようにドアに近づき、鍵穴に向けて意識を集中させた。

「でもどうすればいいんだろう・・・？」

ふと思ったが集中して中を探っていくとだんだんと構造が見えてきた。

凹凸どおりに力を膨らませ、軽く指を動かしてみると・・・

”カチャ”

いとも簡単に鍵は開いてしまった。

なんで、しまった、と言ったかというと、香喃はひそかにもしも開かなかっただらあきらめがつくと思っていたのだ。だが開いてしまった。

「行くしかないよね・・・」

香喃はそつと部屋に滑り込んだ。

ずつとそこにあっただかのように存在感を示す真つ暗な穴。

香喃は電気をつけていなかったが、夜の闇よりもつと濃い、黒の濃

霧が部屋の真ん中に渦巻いていた。

ゴクリと唾を飲み込む。

『沙捲さん・・・無事でいてください！』

香喃は迷ったが、ギョツと目をつぶってその穴に飛び込んだ。

「う”・・・」

香喃はえづきながら体を起こした。懐かしい感覚だ。だがあの時は沙捲がいた。

『魔界だ・・・』

初めて来たのは早朝だった。だがここは昼夜関係なく、あの”黒の濃霧”につつまれている。

『お城に・・・行こうかな・・・』

香喃は不気味な雰囲気身に震いしながら周りを見渡す。ふと背後に気配を感じる。気のせいかと思ってこわごわ足を進めた。するとその時いきなり後ろから腰に抱きつかれた。

「きつ・・・いやああああ！！！」

今まで出したことのないような金切声を上げ、じたばたと暴れた。

香喃の振りまわした手がふわりとした物に触れる。直感的にそれが頭だとわかった香喃はそれを思い切り手に持った防具でひっぱいた。シャランと澄んだ音がし編み込まれた鎖が鳴る。

「イテっ！」

『人間！？』

香喃は腕を振り切り後ろを向いた。魔力を使って相手の顔を照らしだした。

「へ・・・え？」

間抜けな声を出し、何度も瞬きを繰り返して目を擦る。

恐怖のあまり滲んでいた涙がまつ毛に移る。

集中が切れたことで明かりがフツと消えた。だが一瞬見たその顔は

確かに・・・

「・・・レノ・・・さん・・・?」

「酷いなあ・・・イテテ・・・」

そこにいたのは沙捲ことレインの弟、レノだった。

「なんで叩くんだよ?」

「・・・どうして抱きついたらんですか。」

香喃の声があまりにも冷たくてレノはちよつと後ずさった。

「い、いやそれはさ・・・」

「どうしてですか。」

スパツとレノの言葉を切り捨てる香喃はきつとバハムートと同じ位手ごわい。

「真つ暗な中でさ、ラナちゃん見つけたから嬉しくて」

ごまかそうとしたが、香喃は怒っている。

「あゝ・・・ごめんなさい。」

レノはあっけなく謝った。

「・・・まあ・・・いいです。レノさんはなんでこんなところ!?」

「ああ俺?ちよつと帝王様に用があつてさ。」

「私もです。」

2人はゆっくりと同じ方向に歩きはじめる。

「あの、しょう・・・じゃなくてレインさんってどこに行ってるんですか?」

「え?兄貴?知らないけどどっか出かけてんの?」

香喃はてつきり知っていたかと思ひ、思わず声を漏らした。

「いえ・・・なんでもないです。」

「兄貴行方不明?大丈夫だよ、帰ってくつから。」

レノはあっけらかんと言った。

「前にもこういう事が・・・?」

「ううん、ないけど。」

レノは何の悪気もなさそうに言い放った。

『て、天然すぎる・・・』

香喃は少し希望を持ったことに後悔した。

「まあ、俺が言うのもなんだけどさ、兄貴は強いからサ。安心しなよ。」

「・・・」

少しだけ・・・元気が出た。

城についた。

すると2人は大勢の魔術師に囲まれた。

「え？え？なっ・・・」

香喃が驚いていると一人の魔術師が深くかぶったフードを上げて微笑んだ。

「ラナ。帝王様がお呼びよ。」

「ミ、ミラさん！」

香喃は安心してへたり込んだ。正直真つ黒な集団に囲まれて立っているのもやっとなつたのだ。

「あらレノ。」

ミラがレノを見つけるとレノはぎくりと肩をすくませた。

「・・・ひ、人違いでは？」

「いいえ？そんな綺麗な髪はアナタくらいしかないわよ」

ミラはくすくすと笑った。この二人、何かありそうだ。

「レノも帝王様に用があるんでしょ？一緒に来なさい。アナタの事も呼びなの。」

レノは半ば引きずられるようにして運ばれていく。香喃はそのあとを早足で行った。

「……」

香喃は借りてきた猫のようになってしまったレノを不思議そうに見つめている。

その視線に気づいたミラはケラケラと笑って言った。

「この子いたずらっこでね。小さい頃きつく叱ったらこんなビビっちゃって。」

そういうことか、と香喃は納得した。小さい頃の記憶は無くなってしまうものも多いけど、強い印象を与えた思い出は強く残るものだ。レノは嫌そうに視線をそらしている。

香喃が笑って見せるとレノもおおずおおずと笑顔を返した。

『やっぱ兄弟なんだ……。』

笑った顔は沙捲にとても似ていた。

帝王は2人の中に入れると他の護衛全員を外に出して扉に鍵をかけてしまった。

香喃は緊張がピークとなり、固まったまま動けない。

「ラナ、おぬしから訪ねてくるとは勘が良い。」

香喃は床に膝まづいて下げていた顔を上げて首をかしげた。

「え……。？どういう……」

「お前の師匠の事だろう？迎えに行こうと思っていたところだ。」

「……レインさん、連絡が無くて、家にも帰ってこなくて……」

香喃はそういつて顔を上げて立ち上がった。

「ちよ、ラナちゃ……」

「迎えに行きます。何処にいるんですか？」

「そういうと思ったわい……」

帝王はなんだかいつもと違って思いつめた顔をしていた。

「レインはわしの命で、ガザと一緒に敵城にいる。」

「て、敵城・・・？」

「ま、まさか敵城って・・・！」

レノが目を見開いた。香喃はその様子に不安になった。

「ああ、そうだ・・・1000年戦争時に敵国だったぞ　マイン。」
1000年戦争・・・確か沙捲に聞いたことがある。

つい最近まで続いていた魔界での大戦。

魔界にも領土争いはあるらしい。何故今の世の中のように話し合いがなされないのだろうか、と聞いたこともあった。だが魔界では強い者こそすべてなのだ。

この戦いは、帝王の納めるクレイドルが勝利を収め、今は終戦中だ。だがどうして終戦中なのに・・・？

香喃の疑問をレノが代弁した。

「なぜ？」

「話せば長いんじゃないよ・・・座っておくれ。」

帝王が指を軽く動かすと2人の後ろに椅子がスツと滑ってきた。

2人はすくとんと座り、帝王の話に耳を傾け始めた。

帝王によれば、ここ数年で戦争の敗北で討ち取られたぞ　マインの王、ギルトにかわり、息子であるハーヴィイが長年空席だった王座に就いた。

ハーヴィイはギルトに似て・・・いや、それ以上に血気盛んな戦好きだ。そして待ちに待って王位を手に入れたハーヴィイは弱点を探り、勝ち戦をしようとクレイドルの城の中に諜報員を入れて情報をかぎ取るうとしていたのだ。

それを聞きつけた帝王は、諜報員を全て追放した。

だが、魔法球マジックボールという諜報機がクレイドルに残っているのだ。

それは透明で見つけるのも、壊すのも困難だ。

それを一掃するため、沙捲とガザは魔法鏡マジックミラーという魔法球の本体を破壊しに行ったのだ。城内に諜報員がいる可能性があり、このことはもちろん秘密。誰も信用できないという事だ。

「でもどうしてそんな話を・・・？」

「おぬしらは諜報員が潜入していたと思える時期から今まで、城へ来ていない。」

「・・・」

「それに、おぬしらのような顔を知られていない魔術師がいないのだ。」

「私は魔術師じゃありません。」

「俺もです。」

帝王は深々とため息をついた。

「レインとガザは、到着時間を24時間以上過ぎている。あちらの城でつかまったのかもやしれん。」

2人はサツと青くなった。

香喃に至ってはガタンツと椅子を倒して立ち上がった。

「あなたは・・・それを放ってここにいたんですか？」
声が震えている。

「あ・・・」

それが不安ではなく怒りによるものだと分かった瞬間、レノは慌てて香喃の腕を押さえた。

「あなたは・・・それを分かってここに？」

「すまんのぉ・・・」

「っ・・・」

香喃がキれる前にレノに抱えられ、椅子に座らされた。

「迎えに行ってくれるかのお・・・？」

帝王は2人を見ようとしない。香喃は無言で立ち上がっていた。

「レノさんどうしますか？」

「ああ・・・あゝ・・・行くよ。暇だし。兄貴だし。」
「何とも気楽な返事だった。」

「頼む。」

帝王が頭を下げた。レノが横で目を見開いていた。

「・・・ハイ。」

香喃はおずおずと返事をし、部屋を出た。

「・・・つていつても・・・」

香喃は途方に暮れていた。それより、帝王への怒りの方が勝っていた。

「そんなに怒るなよ。」

「・・・でもっ！」

「帝王様は城から離れられないんだ。」

レノが珍しく真剣な顔をしていた。香喃は小さく首をかしげた。

「あの城は魔術で結界が張ってあるんだ。まだ小さい魔物や、子供達を守るための強力なモノがね。帝王様は結界を途切れさせないために、あの城の中でしかいられないんだよ。」

「・・・そんな」

もしかして酷い事を言った？香喃は俯く。だが・・・だけど誰かを送って助けたすとか・・・

だがそんなことを考えても沙捲は助からない。香喃は深呼吸をして聞いた。

「レノさん、ザ マインってどんな国ですか？お城っておっきいんですか？どこにあるんですか？」

幾つもの質問にレノは頭の後ろで手を組みながら答えた。

「ザ マインはクレイドルの4倍くらいかな。兵力も4倍で、独裁政治状態なんだと。城もそれなりに大きいだろうなあ。。。なん立つてベルゼブブの要塞だからなあ。」

「べ、べるぜ。。。？」

「ベルゼブブ。ハエの王様っていう悪魔さ。場所は城からずっと南下すると見えるかな。」

「な、南下！？だって、城って一番北にあるんじゃないんですか！？そんなことしてたら沙捲さんたちが・・・」

レノは俯く香喃の頭をポンポンと叩いた。

「大丈夫。ひとつ飛びで行けるよ。」

「え。。。？」

香喃が顔を上げるとレノがニツと笑い耳につけたピアスをいくつか外し始めた。

「な。。。？」

それと共にレノの体が大きくなって行く。そして全身にふさふさとした真つ赤な毛が生え始めた。

「っ。。。！」

「あ。。。びっくりしちまった？」

レノの体は5メートル程になり、足と手が異常に発達し、鋭い爪と牙が伸びる。

レノは決まりが悪そうにそのつめで頭を掻いた。

「うわふかふか！すごい！！」

香喃はそんなレノを無視してふかふかの足にバフツと抱きついた。

レノは驚いたように香喃を見下ろす。

「動物好きだったり？」

レノは思わずほほ笑みをこぼした。自分を初めて見た者は気持ち悪いだとか恐ろしいだとかいって逃げて行くのが普通だった。だがこの子は違う。

「動物大好きです！」

もふもふとする毛がたまらない。

『変だとは思わないのかな?』

レノはまあいいか、と香喃をその鋭い爪で傷つけないよう慎重に肩に乗せた。

「ラナちゃんってちょっとおかしいよな。」

「え?嘘・・・そうですか?」

「まあいいや。つかまってて」

そういうや否やレノは四つん這いで凄まじい勢いでかけた。

「レノさん、そういうえげなんで変身なんてできるんですか?」

「遅いなあ・・・俺と兄貴が禁忌のハーフだってこと教えただろ?」

「はい。」

「おれ達はゾウルっていう魔物の父親と、人間の母親から生まれたんだ。」

「へえ・・・」

香喃は風切り音で声が聞こえないため体を低くしてレノに近づいた。「で、俺の父親はいろんな血が混ざったゾウルだったんだけど、俺はその中のフェンリル、っていう狼の魔物の血を多く引き継いだから、こんな姿なわけ。あ、ピアスは制御装置なんだ。」

「そうなんですか・・・なんかカッコいいです」

「そうか?ゾウルと人間のハーフはゾウリートっていうんだぜ。俺は、フェンリルのゾウリート。」

「沙捲さんは?」

「兄貴?兄貴は・・・兄貴はヴァンパイアのゾウリートだな。」

「ヴァンパイア?」

「吸血鬼。知ってるだろ?兄貴から聞いたらしいと思うぜ。」
正直なところ、レノもあまり兄の能力は知らない。

「ただ、伝説とは全然違う。怪我をしたら多少治癒能力は高いけど普通に死ぬし、太陽には当たれるし、十字架も、ニンニクも怖くない。姿かたちだって、きつと見たらイメージと違う」

「そうなんですか・・・あ・・・!」

その時、正面に大きな塀が見えた。

「レ、レノさん、ぶつかります!!」

香喃が目を見開いてレノに気づかせようと必死に肩をたたく。だがレノはスピードも落とさず駆けける。

「見てるよ。コレがフェンリルのジャンプ力だ。」

レノは壁にぶつかる直前で思い切り足を曲げて飛び上がった。

「わ・・・」

塀がはるか下に見える。

レノはまるで木の葉が落ちるようにふわりと地面へ降り立った。

「ここからは静かにな・・・」

「はい。」

香喃はひそひそと返事をした。

「さて・・・兄貴のにおいは・・・」

レノはひくひくと鼻を鳴らした。

「地下にいるな。怪我もある程度してるみたいだね。」

「そんつ・・・ん・・・」

レノの大きな手に口をふさがれた。

「・・・あ」

香喃が長い時間見上げていると首が痛くなりそうな城から眼をそらすと、ちょうどレノがヒトの姿に近くなっているのが見えた。

「シュー・・・」

レノは静かに、というように人差し指を唇にあてた。

レノの体は2 m強ほどになり、かろうじてヒトの見た目を保つ程度だ。

「裏から行くよ。乗って。」

「え・・・?でも・・・」

「大丈夫。」

レノは香喃を背負ってジャンプする。

さすがはゾウリートだ。軽々と障害物を越え、裏へと回った。

「さて・・・どうしようか・・・」

レノは香喃を下ろして座った。いつもより顔つきが真剣で香喃は不安をおおられた。

「私・・・何をすればいいですか？何ができますか？」

「・・・心配しないで」

レノはそれを感じ取ったのか、やんわりと笑った。

鋭い爪のはえる手で、優しく香喃の髪を梳いた。

「とりあえず、作戦を立てよう。」

「はい！」

2人はこそこそと話し合いを始めた。

仮面舞踏会の夜3 「虚無の仮面」

虚無の仮面

2人は地下室の目の前に来ていた。

香喃は暴れる心臓を握り締めるように自分の胸の上を握る。

『何も考えるな、何も・・・』

何度も何度も人という字を手のひらに書いて飲む。

「今ので”1299人”。」

「んぐっ・・・」

1300人目を飲み込もうとするのを、レノが口に手を当ててやめさせた。

「いいか？話した通りだ。ラナちゃんなら平気。」

香喃は極度の緊張で真っ青になっていた。

「くくっ・・・」

レノはそんな様子を見て小さく笑った。

そして次の瞬間、壁を背にする香喃に覆いかぶさるようにつけて壁に手をつく。

”ちゅっ”

「!!!!!!!」

香喃は目を見開いてレノを見つめる。

キスされた額に手を当て、顔を真っ赤にした。

「な・・・な・・・」

「そのほうが可愛い。」

レノは真っ赤になった顔を見てケラケラと笑った。

「っ・・・ふざけっ」

香喃はそれがレノが香喃の緊張をほぐすためにしてくれたことだと分からず、慌てていた。

「よし。じゃあいくか。」

香喃の意見を聞き流し、レノは銃のついた剣に手をかけた。香喃も釣られて宮殿からかろうじてもちだした剣を構える。

「行くぜ。」

「はい……」

香喃はバツと壁の影から外に出た。

そしてわき目も振りかえらず走り出す。

そのうちに衛兵が香喃に気づいて魔力のエネルギー弾を撃ってきた。だが香喃に当たる前に全てそれは消えてしまった。

『レノさんすごい！』

香喃の周りにはレノの結界が張ってあった。

レノの魔力は赤だった。沙捲と同じ。だが香喃は沙捲の魔法をあまり見たことがなく、レノの魔法の威力に驚いていた。

この結界が切れてしまう前に、香喃はなるべく多くの兵を地下室から離し、外に出て封印しなければいけない。封印は、これまたレノが陣を書いておいてくれたので香喃はそこに誘導するだけ……。時間を確認した。

あと2時間。

『これなら平気ね。』

2時間後、ドアをあけ、香喃は拍子抜けするほど簡単に衛兵全てを封印した。

城を逃げ回ったおかげでほとんど全ての衛兵は封印された。だが、その瞬間何故かレノの結界がバチンと激しい音を響かせ消えてしまった。

香喃の心がざわりと波だった。

言いようのない嫌な予感が体中を包み込む。

『レノさん……？』

香喃は眉をひそめて城の中へとそつと入っていった。

「あ、ガザさん！」

香喃は遠くに見える人物に大きく手を振った。

『なにあれ・・・？仮面？』

ガザは何か仮面のようなものをかぶっていた。香喃は首をかしげた。その瞬間、ピツと何かが香喃の頬を切った。もし、首をかしげなければ頬ではなく首を斬っていた位置に。

「痛っ・・・」

慌てて後ろを見る。だが誰もいなくて香喃は呆けた。そしていまだに状況が理解しきれない中ガザを見た。ガザはぶつぶつと何かを言いながら香喃を指差した。

「っ・・・！」

香喃はそこから飛んできた”見えぬ刃”を間髪避けた。

「な・・・何するんですか・・・？」

香喃は信じられない思いでガザを見る。

「殺す・・・」

「は・・・え・・・？」

ガザがそうはつきりといった。

「お前を殺す。」

ガザはそういつと襲い掛かってきた。

「や、やめてください！」

香喃は攻撃をよけたり魔法で消滅させたり相殺することしかできなかった。

だんだんと息があがってくる。

「ガザさん！！！」

香喃が思い切り叫ぶと一瞬動きが止まり我に返りそうになるのだが
また殺す、と口にし攻撃を開始してしまう。

「いたっ・・・」

ビツと香喃の皮膚を刃が通り血が溢れる。

ガザには攻撃できなかった。

沙捲の大切な友達だから。なんとか攻撃しようとする、くしゃく
しゃに顔をゆがめた笑顔を思い出し、香喃の動きは止まってしまふ。

『と、とにかくレノさんのところへ・・・』

香喃はそう思って攻撃を振り切りながら走った。

『ここだ！』

香喃は扉を破るようにして部屋の中に転がり込んだ。

そして地下へと続く階段を駆け降りる。

わずかに光の漏れるドアに辿り着いた。

「レノさん！」

後ろにガザの足音が迫っていた。

『怖い、怖い、怖いよ～～！！』

ホラ・並みにこわい。迫る足音、息使い、影。

そして、ホラ・映画の常識に外れず、ドアにはかぎが掛かっていた。

「レノさんあけてください！！」

「・・・」

反応はない。ガザが迫る。

「うう～～・・・！！」

香喃は小さく唸った後、両こぶしを胸の前で固めてバランスをとっ
た。

次の瞬間・・・

バゴツ！！

香喃の強烈な蹴りによってドアは吹っ飛ばされた。

「きゃ!?!」

それと同時に香喃に襲いかかるうとしたガザの手が香喃の髪をつかんだ。

そしてそのままドアの外に倒れた。

「ぐっ・・・」

香喃は身を反転してそのまま仰向けで倒れた。

香喃は上からのしかかるガザから必死に逃げようとした。

「痛っ・・・いや!?!」

「殺す・・・殺す・・・殺す・・・」

「ラナちゃん!?!」

レノの声だ。助けを求めるがガザの剣が香喃ののど元の調度真上に迫っていた。

首を片手で押さえられ、顔をそらす事も出来ない。

「クロス・・・」

その時、香喃の何かがブチっと切れた。

「目え覚ませ!?!」

拳を固め、思い切り顔面を殴った。

パキッ・・・パキ・・・ピシピシッ・・・

ガザの顔を覆っていた仮面が割れた。

「・・・ラナ・・・?」

ガザは確かにそう言った。香喃は薄くなる意識のなかそれを聞いた。

「ガザ・・・さ・・・苦し・・・」

「っ!?!す、すまない!?!」

やっと体を解放された香喃はグツタリと体の力を抜いた。

「ガザ・・・さ・・・平気・・・ですか?」

香喃はやっと元に戻ったガザを見て笑ってしまった。

「ラナちゃん!?!」

「あ、レノさん・・・封印、完了しました。」

香喃はホッと息をついて身を起こした。

「先に行ってる。回復したら来てくれ。」

2人は頷き、ゆっくりと息を整えた。

「この仮面・・・」

ガザが割れてしまった仮面を見た。

「操作・・・されていた・・・」

魔法の道具か何かなのだろうか？

香喃はとりあえずそれを懐に入れ、レノの後を追った。

仮面舞踏会の夜4 「首筋にキスを。」

首筋にキスを。

香喃はレノの事が気になっていた。

さっきの結界がはじめてしまったのも何かしらレノの体に異変があったのだろうし・・・。

今見ても何ともないが不安だった。

「ガザさん、レインさんは・・・？」

「わからない・・・すまない、記憶が飛んでいるんだ。」

あの仮面は操作装置だ、と香喃は直感的に理解していた。

もし、沙捲があれをつけられていたらどうしたらいいのだろうか？
そんな考えを振り払い、香喃はガザを休ませレノの後を追った。

「レノさん！？何処！？」

先に来ているはずのレノがいなかった。

「っ！？」

香喃は頭の中に大きく響いた声に思わず立ち止った。

笑い声だ。げらげらと誰かが笑っている。香喃は悪寒を覚えた。首
まで鳥肌が立つ。

「誰・・・？」

あたりを見回すと、黒い石畳の中に赤が垣間見えた。

それはまるで不毛の地に咲く花のようで、香喃は思わず目を凝らした。

「レノ・・・さん？」

信じられない気持でそれに近づいた。

それはレノだった。傷を負って床に倒れていた。

香喃はレノを必死に抱え起こした。

「レノさん！？どうしたんですか？ねえ！」

口元に耳を近づけると、微かな吐息が頬に掛かった。

香喃はホツとして傷を見た。治癒色の魔力を思い浮かべ傷を塞ぎはじめた。

しばらくして傷をふさぎ切り、香喃は信じられない思いでレノを見ていた。

あんなに強いのに。ゾウリートの能力もあるのに。

「誰にこんなこと・・・」

「つぐ・・・？」

レノが気がついた。

「あ・・・よかった。」

香喃はへなへなと床に手をついた。魔力の使いすぎもあり、力が上手く出ない。

「誰にこんなことを？レインさんは？」

質問攻めになるとレノはいつもと打って変わった弱弱しい口調で言った。

「にげるんだ・・・」

形の良い眉が苦しげに細められ、端正な顔が痛みに歪む。

「？」

香喃は一瞬何を言われているのか分からなかった。

「とても・・・敵わない・・・」

「何にですか・・・？」

するとガザがやってきた。

レノの横に座り、血の跡を見て眉をひそめる。

「どうしたんだ・・・！」

「やら・・・れた・・・」

香喃はだんだんと不安を募らせていた。

「誰にです？」

「兄・・・貴・・・だ。あんなの・・・俺の知ってる兄貴じゃない・・・
そういうとレノはゆっくりと眠るように気絶した。

「ガザさん、頼みます。」

香喃は意味もわからないままだったが取り合えずガザにレノを任せ
た。

香喃は部屋の壁に螺旋状に設置された階段を上っていた。

大分上に来ただろう。あと数段で頂上だ。下を見ると足がすくむ。

「っ・・・わ・・・？」

香喃は突然目の前に立ちふさがった青年に目を見開いた。

「嘘・・・沙捲さ・・・」

香喃は直立不動の男の肩をつかんだ。

服装も、体型も髪色も、顔も、絶対に沙捲だ。

「よかった・・・」

仮面はつけていない。

「よかったです、無事で・・・帰りましょ。帝王さまから沙捲さんを迎えに行けっつていわれたんです。」
香喃は安堵して沙捲に怪我がないか見た。だが沙捲は黙っているのみで何も云わなかった。

「・・・」

「レノさんもいるんですよ？みましたか？あ、気をつけてくださいね。沙捲さんに似た人がレノさんを攻撃しっ・・・」
黙っている沙捲の顔を覗き込みながら言うと、きつく抱きしめられた。

「っ・・・？どうか・・・したんですか？あの・・・!？」

沙捲が香喃の首筋に顔を埋めた。香喃は目を見開いて沙捲を引きはがそうとする。

「やっ・・・ちよっ!？」

つぶつと何かが首の皮膚を突き破った。

「いつ・・・」

香喃は訳も分からないまま痛みに眉をひそめた。
そしてレノの言っていた言葉を思い出す。

” 兄貴はヴァンパイアのゾウリートだな ”

” ただ、伝説とは全然違う。怪我をしたら多少治癒能力は高いけど普通に死ぬし、太陽には当たれるし、十字架も、ニンニクも怖くない。姿かたちだって、きつと見たらイメージと違う ”

沙捲の姿は映画で見るように牙も生えていなかったし、陽光にもあたっていた。

「あっ・・・」

予想もしていなかった声が自分の口から洩れ、香喃は慌てて口を覆った。

頭の芯が痺れる。口をつけられている首からジンジンという熱が広がり、快感が体に回った。

「んっ・・・はあ・・・あ・・・やめっ・・・」

息があがった。貧血だろうか？

もう何が何だかわからない。狂ってしまいそうだった。

沙捲は香喃の首にきつく吸いついた。血が傷口から吸い出されて溢れ、噛み口の周りは鬱血となった。

沙捲がようやく体を離れた。香喃は立っているのもやっとの状態だった。

「なに・・・してっ・・・」

「やはり女の血は良い。」

沙捲はそう言い放った。そして笑いだす。入り口で聞いたあの笑い声だった。

『違う・・・沙捲さんじゃ・・・』

レノの言葉がよみがえった。

”あんなの・・・俺の知ってる兄貴じゃない・・・”

沙捲はぐい、と頬についた香喃の血を拭った。

その瞬間、ドンツと体に衝撃を感じた。

「え・・・？」

沙捲の腕がつきだされ、香喃の事を思い切り下に向かって突き飛ばしたのだ。それを理解するのに香喃はかなりの時間を要した。

香喃の体は傾き、高い階段から中央の吹き抜けに向かって落ちようとしていた。

「沙捲さ・・・」

「残念だったな。レノを攻撃したのは間違いない”俺”だ。」

香喃は今までにないほどに目を見開いた。
全てがスローモーションに見えた。

ゆっくりと下へと墮ちる。翼を失った鳥の様に、真つ逆さまに。
胃が浮くような感覚を覚えた。

『嘘・・・嘘・・・嘘だ・・・沙捲さんがそんな・・・』
その瞬間、どんなに自分が沙捲を信頼していたのかが分かった。
そういえば蓮と別れて、からっぽになった。でも苦しくなかった。
今、香喃は生まれて初めての強い苦しみと悲しみを感じていた。
眼のふちからじわっと涙がにじんだ。

無意識に沙捲に手を伸ばしていた。だが沙捲はその手を取ることなく、薄く笑って香喃を見下ろしていた。
香喃は悔しさに歯を食いしばった。

『沙捲さん・・・』

香喃の瞳からついに涙が零れ落ちた。
貧血と恐怖で意識が途切れる最後の瞬間まで、香喃は沙捲の名前を呼んでいた。

仮面舞踏会の夜5 「透明な血」

透明な血

俺は何をしていたんだ？

腹が減って、喉が焼けそうなくらい渴いて、それで・

ああ、頭が痛い。

そうだ、寝てしまえ。痛くなくなるまで、気のすむまで寝ればいい。

そういえば名前を呼ばれたような気がする。

”沙捲”・・・？

誰だそりゃ。見間違えたのか？いやそれにしてもあの女は俺の事をしつかりと見ていた。何度も名前を言っていたし。

でも俺の名前は・・・

？

なんだったっけか？まあいい。そんな大事なことじゃないだろ。

まあなんと思おうと死人に口なしだからな。わけが聞けないのが気になるな。まあ聞きたくなくなったら死霊術で蘇らせて聞けばいい。自分からは口もきけないゾンビになるだろうがな。ははっ。

レノとか言うやつも死んだのか？俺の事を兄貴って呼んでたな。俺に兄弟なんかいたっけか？

あいつ、ゾウリートだったから毛皮を売れば上手く稼げたかもしれんな。もったいない事をした。

死体はとつくに埋めちまつただろつしなあ。

それにしても頭痛がひどい。

きつと目を閉じて、ゆっくりすればよくなる。

ほら………

畜生。まだ頭痛がおさまってねえ。

ここんとこ調子が良かったのに。

あの女のせいかな？名前はなんて言ったっけな？

……か……なん……？

いや、違う。ああそうだラナ、だ。ラナ・アーシャ。

それにしても”かなん”ってなんだ？何語だ？

……どうしていきなり出てきたんだ？

痛い。

頭が、血がついて、不快に冷えて行く指先が、体中が。

いや、痛みじゃないのか？頭は間違えなく痛い。が体は何かを求めている。

ああ、血だ。

何よりも赤くて、濃厚な血。俺の渴きをいやしてくれる唯一の物。だがさつき吸ったばかりじゃないか？どうしてこの渴きは癒されな
いんだ？

クソ・・・。

のどが渴いた。血は浴びるように飲んでいる。

諜報に失敗したクズ共の血だ。もちろん男だけじゃない。そこら辺から搔つ攫った女の血も吸う。

・・・なぜだ？どうして癒されない？

”何”が足りない？

イライラする。このままじゃハーヴィイ陛下に叱りを受けちまう。
どうしたもんかな・・・。

ようやく分かった。

俺が求めているのはあいつの血だ。

濁っていない、透明な血を持ったあいつ。

ラナ・アーシャ。虹色の魔力を持つとか言う女。

だが俺が殺した。

ツチ・・・惜しいことしちまった。

仕方ないから死霊術でも使うか・・・？

なんで反応がないんだ？

ペンタクルも、呪文も香草も蠟燭も、間違っていない。

もしかして発音か？よし、もう一回だ。

・・・どうして現れない・・・！

何度もやり直した。死霊術もあっている。

生きて・・・いるのか？

いや、あの高さからだ。生きているはずがないだろう？

だが香喃だったら・・・？

あ？今香喃って俺言ったよな？香喃ってなんだ？あいつはラナだろ？

どうして出てくる・・・？

まあいい。とりあえずラナが活着しているか確かめに行くか。

仮面舞踏会の夜5「透明な血」(後書き)

初のレインさん独白文でした。

独り言っていった方がいいのかな？

仮面舞踏会の夜6「渴望」

渴望

レノは暗い部屋で目を覚ました。

「・・・ぐ・・・うつ・・・」

ギシツと骨の折れた体が痛む。

静かな部屋には、レノの荒い息使いだけが響いていた。

「ハツ・・・くそっ・・・」

グツと歯を食いしばってレノはベットに座った。

『そうだ・・・ラナちゃんは・・・ガザさんも・・・』

レノは自分の体に限界を感じ、それ以上動けなかった。

「あの・・・クソ兄貴っ・・・」

レノは眉をゆがませ、苛立たしげに言い放った。

レノは部屋に入り兄であるレインを見つけ、手を振ったのだ。

レインが振り向いた瞬間、レノは十数メートル吹き飛ばされていたのだ。

レインの指から出た衝撃波によつて、肋骨が何本も折れ、肺に刺さった。

その後兄はためらいもなく何発もの攻撃をレノに浴びせた。レノは抵抗できなかつた。

ただ、ガラガラと自分の中の何かが崩れて行くのが分かつた。信じたくなかつた。

『こんなこと考えてもしょーがねえか・・・』
レノは持ち前の能天気さで開き直った。

『そういえばラナちゃんも・・・それにガザさんもいた・・・』
レノは動けない事を心からもどかしく思う。

『うぜえ・・・』
ぎりぎり歯を鳴らし、ピアスを苛立たしげにむしり取る。
ビツと血が飛んだが気にせず、獣化を始めた。

この苛立ちは兄に対して？いや違う。
不甲斐ない俺に対してだ。

骨がミシミシときしんだがそのままレノは完全に巨大な狼と化した。
レノは理性を総動員し、大きさをかろうじてドアから出れる程度に調節した。

レノは今、燃えるような赤い毛なみの美しい狼だ。本来の大きさは
本家のフェンリルをしのぐほどで、ドラゴンの様に大きい。

「グルルルル・・・」
低いうなりと共に、レノは姿を消した。
いや、見るものが見れば、レノが凄まじいスピードで部屋を出て行
ったのが見えただろう。

ここ、どこなんだろう・・・？

目が見えない。耳も聞こえない。何かを触る感触もない。匂いもし
ない。音も聞こえない。

ここはどこ・・・？

一緒に帰りましょうよ。沙捲さん。

ああ、初めて体に感覚が戻った。
涙だ。暖かい涙が目の端から流れた。

生きているのかすら分からないこの中で、初めて感情が沸き出た。
悲しかった。

辛かった。

嫌だった。

苦しかった。

悔しかった。

なによりも、信じたくなかった。

というか、何があったのかまだ頭が理解したくないとごねた。

「畜生……」

ガザは一人頭を抱えていた。

ここはザ マインの領地のはずれに建てた魔法家だ。マジックハウス

魔法鏡と同じように外からは気づかれなない仕組みになっている。

ガザの魔法でかなり大きな作りとなっていた。

だが良い部屋にいてくつろいでいればいいはずのガザは香喃の容体に悩んでいた。

香喃が沙捲に突き落とされたとき、ガザはレノの事で手いっぱいだった。

そして、地面にぶつかる直前に気づき、結果的には何もできなかった。

数百メートルの高さから落ちて助かった理由は、まさに奇跡としか

言いようがなかった。

香喃が地面に触れる数メートル前、香喃が手にしていた剣が主を守ったのだ。

剣を中心とし、ガザたちが数メートル引きずるように飛ばされるほどの爆風が巻き起こった。

だが香喃の勢いはゆるくはなったものの、体を強く打ちつけてしまった。

死ななかったことだけでも奇跡だが、香喃は今昏睡状態にある。

いつ小さな灯火のような命が消えてしまつかわからない。

ガザは歯を食いしばった。

『あいつになんて顔してあえやいいんだよ・・・』

親友の顔が浮かんだが、すぐにその気持ちは打ち消えた。

香喃を落としたのは外でもない沙捲なのだ。

『クソ野郎・・・』

ガザは再びうなだれた。

その瞬間、バキッ！という音と共にドアが歪んだ。

『保護呪文が・・・！』

ドアには保護呪文がかかっている。なぜそのドアが歪むんだ？

ベットで静かな呼吸を繰り返す香喃を一瞥し、ガザは慎重に扉に歩み寄った。

「誰だ。」

「ガザさん？俺。レノだけど。わりい、ぶつかっちまって・・・」

「お、お前！」

ガザは到底起きあがれるはずがないと思っていた人物がドアの前に

立っていたことに驚いたようだった。

「立つんじゃない！座れ！！なんでそう無理をするんだ！？」

ガザは父親の様にレノを叱り、無理矢理ベットに押し付けた。

レノは大して抵抗もせず、ピアスをつけ直してベットに座った。

「ラナちゃんは・・・」

ガザはレノに目くばせした。レノは眠り続ける香喃を見て目を見開いた。

「どう・・・して・・・」

「ずっと昏睡状態だ。」

「医者には・・・？」

「ここはザ　マインだぞ？医者なんて迂闊に呼べないし、こんな状態じゃ移動もできない。」

「・・・」

2人の間に沈黙が続いた。

「どうしようもない・・・ってこと・・・？」

「ああそうだな。」

ガザは苛立たしげだった。

「なさけねえな・・・俺達。」

レノがふといった。ガザもふつと自嘲気味に笑った。

ああ、また感覚が無くなった。

体が此処にあるのかどうかすら分からない。ふわふわとした不思議な感覚だった。

少しずつ記憶が戻り、理解ができてきた。

私は、沙捲さんに血を奪われたんだ。

それで、沙捲さんは私を突き落とした。

・・・突き落とした？

じゃあなんで私は生きているの？

いや、生きていないのかも知れない。もう私は死んで、魂だけが何処かに向かう途中なのかも知れない。

そんなメルヘンなことあるわけないか。

笑いたいけど、口がない。目もない。動かしているという感覚もないし、あるのは……

まるで意識だけ、という感じだった。

意思だけがこの空間に浮かんでいる？

それがぴったりだ。

で、話をもどそう。

私はあのあとどうなったのだろうか……？

「……？」

沙捲は鼻をひくつかせた。

レノの血が此処で強い匂いを示している。

だが周りには何も無い。

『おかしい……』

埋められていれば跡が残るはず。

だがそれらしき跡もなく、他のやつらのおいも此処で途切れていた。

”あいつ”の匂いがする。透明な・透き通った血のにおい。コクリと喉が鳴った。

『欲しい……あの血が……狂いそうだ。』

沙捲はガシガシと頭をかき、周辺の搜索を再開した。

「ツチ・・・」

沙捲が魔法で家が隠されているとわかったのはそれから数時間後だった。

沙捲はコンタクトを外して踏みつぶした。

『俺はなんでこんなものを・・・？』

自分でつけたつもりはなかった。どうも視界が悪かったわけだ。目が赤く光り、妖しげに細められた。

ぼんやりと家の輪郭が見えてきた。

「ガザか。」

沙捲はニヤリと笑った。

魔力のほころびを見つけたのだ。

「馬鹿な奴らだ。」

沙捲は魔法を壊すため、手に魔力を集めはじめた。

仮面舞踏会の夜6「渴望」(後書き)

なんか題名分かりにくいっすよね・・・w
仮面舞踏会の夜、ってシリーズの中の渴望、ってストーリーってこ
とで・・・

あ、余計わからなそうw

良い案が浮かぶまで(浮かぶかどうかは不明)これをお願いします。

キャラ説明↓v

レノは兄が有望だったのでめちゃくちや頑張り屋さんの負けず嫌いです。

仮面舞踏会の夜7「逢引(?)」

逢引(?)

突然、部屋が・・・いや、家自体がズシンツと揺れた。

「なんだ・・・?おいレノ、ラナを見てろよ。」

ガザはそう言い残し、部屋を出た。

『なんだったんだ・・・?』

何も異常がないので不思議に思い、外に出てみる。

「っ!?お前・・・っ」

そこには沙捲が立っていた。

ニヤリと笑い、容赦なく保護呪文を壊していつてしまう。

ガザはそれを止めようとしたが既に全ての呪文は壊されていた。

「てめえっ!」

「なんだ。五月蠅いぞ。」

『レインじゃない・・・違う・・・』

自分が洗脳されていたのと同じように目の前にいる男も操られている、と確信した。

だが洗脳装置の印である仮面はつけていなかった。

「・・・目を覚ますんだ。」

「何を言っている・・・」

沙捲は手に魔力を集め始めていた。

ガザの後ろには昏睡しているラナとレノがいる。

『何としても・・・止めなければ。』

ガザは決心して槍を構えた。

「やる気か?別に戦わなくてもいいぞ。俺が用があるのはラナ・ア

「シャだけだ。」

「お前・・・何故・・・」

「生きているのを知っているかって？」

沙捲は予測していたかのようにフツと笑った。

「匂いだ。血においてははしているが腐敗臭や死臭はしないし匂いは此処で強くなっているのに途切れている。」

「ツチ・・・」

ガザは自分が迂闊だったことを後悔した。

沙捲はそんなことに興味はない、と言わんばかりにガザのつけた印を蹴った。

「ラナ・アーシャの血をさしだせばお前らに手出しはしない。」

「なぜ・・・あの子の血を欲しがる？」

ガザは少しでも時間を作ろうと話しを持ちかけた。

「あいつの血は特別だ。均整がとれた”透明な血”だ。濁りのない清らかな血だ。虹龍の魔力を持つだけの事はある。」

「・・・」

ガザは信じられない思いで沙捲を見ていた。沙捲がヴァンパイアの血を受け継いでいることは分かっていた。だが血は数年に一度数口飲めばいいとも聞いていたし、何より香喃の事を食料として扱う事が信じられなかった。

ガザは弟子を取らない沙捲が香喃を弟子にした時に心底喜んだのだ。やっと心を開いて人と接するようになったと思いはじめた。それだけに今の沙捲には大いにシヨックを受けた。

「お前・・・あの子に何をしたか分かってるのか!？」

「ああ、突き落としたな。血を飲んで。生かしておけばと後悔していたところだ。生きていて好都合だった。」

ガザの額に青筋が立った。

「ラナは昏睡状態だ。手出しはさせない。」

「そうか。まあいい。死んでも死霊術で蘇らせればいい。」

「てめえ!!--」

沙捲はくいつ、と首をかしげた。心底不思議そうな顔をしているのがガザには許せなかった。

「ああそれと、ゾウリートはどうした？」

「これ以上お前に言うことはない。」

ガザは殺気を漂わせながら沙捲に言い放った。

そして次の瞬間、一気に間合いを詰め沙捲に飛びかかっていた。

沙捲さん……？

気配というか、沙捲がそばにいる、という事が何と無く感じられた。

……起きなきゃ。

沙捲さんに会って、ちゃんと話しないと。

怪我してないかな？また無理したら大変。

そういえば……どうして体が動かないんだろう？おきなくちゃいけないのに。

動け……動いてよ、私の体でしょ……？

動いてっ……

お願いだから動いて！

「っあ……」

「？……ラナ……ちゃん!？」

小さなうめき声を聞いて、レノは慌てて香喃を覗き込んだ。

何度も名前を呼ぶがそれきり反応はない。

『回復してるってことだよな!？』

レノはあわあわと部屋の中を歩き回り、拳句の果てに何もできるこ

とはないと気づきずとんと椅子に座った。

その瞬間凄まじい爆風と共にドアが弾き飛ばされた。

「っ!?!」

レノは香喃を背に庇ってドアを見据えた。

「兄・・貴・・!」

そこには沙捲が立っていた。

「ガザ・・!?!」

ガザは気絶し廊下にくろがされていた。

「そこをどけ。ゾウリート。」

沙捲は冷たく言った。

「ふざけんな・・ふざけてんじゃねえぞ!」

「あ?なんだよ?」

「お前・・」

レノは怒りで言葉が出ないようだった。

「そいつさえ渡せば何もしない。」

「目え覚ませ。」

沙捲はうんざりだ、というように手で払うそぶりを見せた。

「お前を倒してそいつをさらってくぞ?」

「させねえよ。」

レノはシュツと腕を振りあげた。指の間に挟まれていた数本の短剣が沙捲に向かってとんだ。

「なっ・・」

レノは茫然と声を漏らした。

沙捲が手を一振りすると短剣は数メートル手前で止まり、床に全て落ちてしまった。

「無駄だ。」

沙捲からは血のにおいが強くしていた。

血を飲むことでヴァンパイアは強くなる。きつとしこたま飲んだの

だろう。

この強さは異常だ。

そんなことを考えていると沙捲がスツと手を上げた。

「ぐっ!?!」

その瞬間レノは壁に強かにぶつかっていた。

見えない力がレノに働き、壁に体を縫いつける。

「いつ・・・あ・・・」

「100年早いんだよ。」

沙捲は不敵に笑って香喃に寄った。

「やめろ!!!」

「なに、生き返らせるさ。」

沙捲は香喃を殺すつもりだ。

沙捲はその血のにおいを嗅ぐように顔を首筋に近づけて息を吸う。

ニツと口元をゆがめると口をあけた。

どうせ死にかけているんだ。助かる見込みがないのなら一度殺して

しまつのが手っ取り早い。

「目を覚ませ!!!」

レノは唯一自由な口で、沙捲と香喃両方に叫んだ。

「う・・・ん・・・?」

その時、香喃の薄く目が開いた。

「あ・・・沙捲・・・さ・・・ん・・・?」

至近距離に見えた人の名を呼ぶ。

「ツチ・・・」

沙捲は目を細めた。名残惜しげに首筋にキスだけ落とし、血を吸う事を諦め香喃を抱き上げる。

「レ・・・ノ・・・さ・・・?」

まだ頭が働かないのか香喃は目を瞬かせた。

「逃げろラナ!!!」

レノは苦し紛れに言った。今の香喃の状態ではとても無理なことは分かっていた。

「は・・・い・・・？」

「思い出せ！！そいつはお前を・・・ぐっ！！？」

レノの腹に沙捲の衝撃波がめり込む。

「しょ・・・まさん・・・？なににして・・・」

沙捲は無言だった。香喃は沙捲がレノを攻撃したことに目を見開く。沙捲はレノの戒めを解いた。するとグツタリと気絶したレノは力なく床に落ちた。

「行くぞ。」

「え・・・」

冷たい口調に香喃の頭が覚醒し始めた。

『・・・違う・・・』

思い出した。

自分は・・・私はあの時沙捲に突き落とされたのだ。

そして、途中で気絶して・・・

香喃はベットをチラ、と見た。

きつと自分が寝ていたのだ。服の下には乱雑にまかれた包帯がある。なんとか助かったのだ。そしてガザたちは此処に一時隠れた。

今ここにいるのは沙捲ではない。いつもは隠している眼は赤く、めつたに笑わない口元は薄く歪んでいた。

体が震えた。

「離して・・・」

香喃は暴れて床に落ちた。

「何をする。」

「あっち行って・・・イヤ！」

近づく沙捲に言いようのない恐怖を感じ、身の回りの物を投げつけ

た。

全てのものは避けられ、香喃はグッと手を握り締めた。

「アナタは沙捲さんじゃない!!」

思い切り投げつけた花瓶が背後の壁に叩きつけられ破片が飛び散った。

「っ……っ……」

その破片が沙捲の頬を斬った。ツツと血が頬をつたった。

それを沙捲は指で拭ってぺろりと舐める。

「あ……」

香喃はビクツと身を震わせた。違う、傷つけたのは沙捲ではない……。

言い聞かせたが罪悪感はひどかった。

「いい度胸じゃねえか。」

ガツと肩をつかまれ痛みに眉をしかめた。

「……」

その時、微かに沙捲が傷ついたような顔をした。確かに”沙捲”の顔だった。

「沙捲さん戻って!!」

「沙捲？誰だそれは。」

だが一瞬のうちに沙捲は顔つきを戻し、薄く笑って香喃の肩をつかみ上げた。

「いつ……痛っ!!」

香喃が悲鳴を上げた瞬間、倒れていたレノの目がカツと開いた。

その手でブチツとつけられたピアスが全て引きちぎられた。飛び散った血に、沙捲が振り返る。

「グルル……」

レノは怒りに震える体を変化させていった。

大きさをセーブする理性もなく、家を壊し大型バス数台ほどの大きさになる。

「ふわ……ふわ……」

気づくのはそこじゃない、と突っ込んでくれる人もいなく、香喃はぼんやりと呟く。

「ツチ・・・」

沙捲は茫然としている香喃を素早く掴み上げ、無理矢理抱えた。

「えっ！？ちよっ・・・」

抵抗を試みると額に強く手が押し付けられた。

「っあ・・・」

頭にボワン、と低い振動が響き、香喃は気を失う。

「ゲガアッ！！」

レノはそれに気づき巨大な前足を振りあげる。

「でかくなる分動きは鈍くなるな！」

いや、動きが遅くなったのはそれだけではない。

先ほどの沙捲の攻撃でレノのヒビの入っていた骨は完全に折れてしまった。

レノは苛立たしげに唸って沙捲を目で追う。

「レノ、乗せる！」

いつの間にか目を覚ましたらしいガザを背に乗せ、あっという間に遠くなる沙捲の背中を追った。

仮面舞踏会の夜7「逢引(?)」(後書き)

私ことですが、先日この小説についての感想をいただきましたとても嬉しい限りで、またアドバイスやアイデアもいただきました。

この小説を読んで下さる他の皆さまも何かありましたら、ぜひリクエストや、アイデアをお送りください。

感想を下さった読者様、本当にありがとうございます。

仮面舞踏会の夜8 「敗北」

敗北

香喃は気絶していたものの、走り出す衝撃ですぐに目を覚ました。今度はすぐに状況が分かった。

後ろには追いかけてくるレノがいた。大きな狼となったレノの毛に埋もれたガザが見え、香喃は震える息を吐きだした。

『無事だったんだ・・・』

香喃はグツと歯を食いしばった。2人は沙捲が現れた時からもう覚悟を決めていた。足手まといになっているのは自分だ。

香喃は沙捲に仮面の代わりとなる物はないかと探した。

その時、耳の裏に埋め込まれた銀色の何かが光った。

『コレ・・・？』

香喃はそつと腕を動かしてそれをつまんだ。

覚悟を決めて、指先に力を入れた。

『あれ・・・？』

それは驚くほど簡単に抜けた。だが沙捲の体に変化はない。香喃は気の抜けた声を漏らした。

「っ！？」

沙捲がそれに気づいて目を見開いて香喃の腕を払った。

その一瞬、沙捲の拘束の手が緩んだ。香喃は抜きとつたそれをしっかりと握りしめ沙捲の腕を振り払って地面に飛び降りた。

「いつ・・・」

なんとか起きあがり、沙捲に向き直る。

香喃は魔力を解放してみた。

「大丈夫・・・」

自分に言い聞かせるように言って深呼吸した。

急所を外して、気絶させることができれば・・・

「やめる！」

その時、ガザが力をため始めた香喃を横抱きにして引きずった。

「いつ・・・」

「ああすまない！痛かったな、ゴメン！」

ガザは慌てているようでもいつものような落ちついた雰囲気は一変していた。

あわあわと左右を見て香喃を引っ張る。レノは大型犬ほどの大きさに変わり、うずくまっていた。

「今は逃げるんだ！」

「ど、どうして・・・」

「貴様ら・・・」

気づくと沙捲が手に膨大な魔力をため始めていた。

香喃は恐怖に震えた。レノとガザを見た。レノは怪我が酷く動くことができない。

「避けきれない・・・！」

沙捲の手から力が生み出された。

光の矢がレノとガザに向かおうと震えていた。

その時、唐突に頭の中に一つの言葉が生まれた。

” 失いたくない ”

胸の奥を今まで感じたことのない感情が突き刺した。

焦燥感？違う。

喪失感にも似た何か。だが微妙に違う。

ただ失いたくない、そう思った。

「ちよっ・・・まつ!？」

香喃は目をつぶって沙捲の前に立ちふさがった。
沙捲の目が見開かれた。

「くっ・・・この馬鹿!」

そう罵り、沙捲は矢の軌道を無理矢理変えた。

矢は香喃の肩を擦り、首すれすれのところを通っていった。

「クソ野郎・・・」

香喃は恐る恐る目をあけた。

「・・・ま・・・さん・・・」

脱力してすとんと座りこむ。自分がしたことに関震えが来た。

「・・・つあっ!」

香喃は鋭い痛み悲鳴を上げる。

沙捲が血まみれの肩をつかみ上げ香喃を立ち上がらせた。

「ツチ・・・」

沙捲はしばらく血から眼をそらしていたが我慢できないというように眉を寄せ、破けた服の上から傷に吸いついた。

「ひっ・・・痛っ・・・やめっ・・・」

香喃は体をこわばらせた。ガザとレノは目を見開いて足を踏み出した。

その瞬間沙捲はチラとそちらを見て手のひらを向けた。

「っ・・・?」

香喃の血を一口飲んだ沙捲はこれまでにない程の力を発揮した。2人はそれきり一歩も動けなくなってしまった。

「あ・・・」

ゾクツと快感とも悪寒ともつかない物が背筋を這い上がる。肩が燃え上がるように熱い。

我を失うまいと香喃は必死で頭を振って覚醒しようとした。

「いや・・・だ・・・沙捲・・・さ・・・」

それだけの言葉を絞り出すと沙捲がふつと顔を上げた。

ツツと口の端から細い顎まで一筋血が流れた。白い肌に赤い筋がく

つきりとついて、不覚にも香喃はそれを綺麗だと思ってしまった。
「・・・無力だな、お前らは。」

沙捲は動けずにいる2人を鼻で笑った。

「女一人も見張ることができないのか？」

そういつて貧血で立てない香喃を抱え上げた。

「・・・自分を呪うんだな。」

そういつて沙捲は一瞬にして香喃を連れて消えてしまった。

気づけば2人は動けるようになり、地面に倒れ伏した。

「クソ・・・」

ぎりぎり固い地面をレノの5本の指がえぐっていく。

「制御装置つけるよ。ザ マインから出るぞ。」

「はぁ！？何言ってるんだよ！？ラナと兄貴を連れ戻すんだ！！」

「今行ってもさっきみたい簡単に押さえられちまう。俺は・・・操られていた時の事を帝王に話す。お前も治療しなければいけないだろ？」

「でもっ・・・」

「今行ってもできることはない。」

冷静さを取り戻したガザはきっぱりと言った。

「新しい策を探す。レインはラナを殺さない。食料になるからだ。」

「・・・」

「大丈夫だ・・・」

ガザはまるで自分に言い聞かせているようだった。

レノもそれを汲み取り、黙り込んだ。

「歩けるのかお前？」

「……」

そう唐突に聞かれ黙りこむ。男2人、見事に負傷し歩ける状態ではなかった。

ため息をつき、半ば身を引きずるようにして移動を始めた。

「うつさいな、コレが一番楽なんだって！」

数分後、2人は口げんかを始めていた。ガザがレノの半端な形態を馬鹿にし、それにレノがギャンギャンと反撃する。

それだけ元気ならいい。

お互いそう思っただけでホッとしていたところだった。

「え、嘘……ガザ？レノ……？」

聞き覚えのある声がした。

2人はサッと上空を見上げた。

「ミ……ミラ……！」

「ミラさん……！」

2人は地獄に仏だと言わんばかりにミラの名前を呼ぶ。

ミラは愛魚(?)である飛鯨をゆっくりと下ろした。

「酷い怪我してるじゃないの！？なにしたのよ!？」

「い、今はとりあえず聞かないでくれ……」

ガザがグツタリといい、ミラに懇願した。

「城まで乗せて行ってくれ……。もう歩ける状態じゃねえ。」

「い……いいけど、城に着いたらちゃんと説明しなさい。それが条件よ。」

「……ハイ。」

2人は仕方なく頷いた。

こうして2人はなんとかミラの飛鯨に乗り、城へと向かったのだ
た。

仮面舞踏会の夜9 「始動」

始動

「……ん……?」

目を覚ますと、冷たい石造りの”城”にいた。信じられない様子で香喃はあたりを見回した。

『どこ……?どこ……』

立ち上がるうとするすると全身に激痛が走った。

「い……ぐっ……!」

きつとあの塔の階段から落ちた時の後遺症と、長い時間つめたい床にころがされていたため固まったのだろう。

思わずうずくまるとコツコツと足音が聞こえた。

「……」

沙捲だと分かっていたが顔を上げなかった。

香喃はこれまでにないくらいに怒りを抱えていた。沙捲に対してはもちろん、そして自分にも。

「……痛むのか?」

「……」

香喃が黙っているとグイ、と体を押された。

「っ……」

痛みに眉をしかめると沙捲は酷く心配そうな顔をしていた。

それがやけにムカついて香喃は腕をなんとか上げて沙捲の手を振り払った。

「……」

すると沙捲は黙ってまた離れて行ってしまった。

「・・・」

香喃はこっそりとあたりをうかがった。

誰もいないと分かると壁まで半ば這って移動し、なんとか背中を預けた。

『うわ・・・』

長袖の服をゆつくりと持ち上げると全身痣だらけだった。

『私・・・まだ高校生なのに・・・』

一生残る傷だったらいやだな、などと考え傷を一通り見た。

・・・魔法使いになることが、こんなに大変だと思わなかった。

とはいえ自分から首を突っ込んだのだが・・・

まず、一番の課題は”これからどうしよう”だ。

この怪我じゃ歩けもしないし逃げるのは不可能。

それに自分の半端な魔法で沙捲が倒せるとも思わない。

というか、倒してしまっただけだ。沙捲を正気に戻さなければ。

・・・とにかく、この中を探るにしても、沙捲の異変の原因を見つめるのも、体が持たない。

『・・・』

結局体を休めるしかないのだ。

「つ・・・」

凝り固まった筋肉をゆつくりともみほぐし、香喃は横になった。

天井が高すぎて目がかすんだ。

『上からは不可能・・・』

香喃は横になって深いため息をついた。

「・・・」

沙捲は穏やかに眠っている香喃を見て小さなため息をついた。

『・・・薬を持ってきてやったのに』

むすつとして少し離れたところに胡坐をかいて座った。

さつき拒否された事が何故か心に残っていた。

『当たり前だろ・・・？』

自分にそう問いかける。

いきなりさらって、傷口えぐって、血い吸って。拒否されない方が

おかしいだろ？

でも・・・でも傷ついたのは確かだ。

なんで？

『そんなのわかんねえよ・・・』

沙捲は苛立たしげに床を殴った。

皮が擦れ、薄く血が出た。

「・・・」

「っ!？」

気づくと香喃が薄く目をあけ寝たままこちらを凝視していた。

「・・・薬。」

沙捲は乱暴に救急箱を香喃の方へと流した。

「・・・」

香喃は黙ってその箱をあけて消毒液を取り出した。

包帯、絆創膏、ガーゼ、と自分の傷である打撲には関係のない道具を取りだしていく。

「?」

「手。」

「は?」

「・・・」

香喃は伏し目がちに言った。

「手、怪我してます。消毒だけしまししょう?」

香喃は驚くほどそつと沙捲の手を取った。香喃の指のひんやりとし

た感覚が沙捲の手を包む。

さつき床を殴った時の傷を香喃が消毒し始めた。

「・・・」

こいつは馬鹿だ。

なんで手が震えるほど俺を恐れるのにこんなかすり傷を放っておかない？

小さく震える細い指が痛々しかった。

「もういい。」

そういつても、香喃はひかなかった。

「動かないでくださいよ。」

「なんでそこまでする？」

沙捲はフツと鼻で笑った。

香喃はしばらく考えるそぶりを見せていた。

そして顔を上げ納得した表情を見せた。

「もし、今の沙捲さんが沙捲さんじゃなくても、ホントの沙捲さんが戻った時体が傷だらけだったらいやだと思われますもん。」

「はあ？」

「いいんです。なんでもないんです。」

香喃はゆっくりといい、包帯を巻き終えた手を離れた。

そして救急箱を返す。

その時、沙捲の目に香喃の髪に隠れた首筋が入った。

「食事だ。」

「・・・？」

香喃が首をかき上げているとその首に沙捲が口をつけた。

その瞬間香喃は体をびくりと震わせ、抵抗し始めた。

だが先ほど言ったようにこの女は沙捲の体を傷つけたくないらしく中途半端な抵抗にとどまっている。

「いつ・・・」

ツプツと牙が皮膚を通った。

香喃は恐怖で身を震わせた。沙捲の喉が横でゴクリと鳴った。自分

の血が、今喉を通ったのだ。

そう考えると急に寒気を感じた。いや、音が原因ではない。貧血とこの冷たい石獄のせいだ。

「……？」

沙捲が気づくと香喃はグッタリと気絶していた。

「……その仮面が……？」

帝王は神妙な顔つきをしていた。

「その仮面が、おぬしを操っていたのか……レインも……」

「いえ、レインは仮面をしていません。」

ガザの言葉に帝王はスツと目を細めた。

「直接洗脳をしているのか……」

「……？」

「……まあ良い。良くやってくれた。」

帝王は静かに目を伏せた。

「レノの治療はミラがやっておるのか？」

「はい。」

「レノには使命から外れてもらおう。兄となると判断力も鈍る。」

「……」

妥当な考えだったがガザはもやもやとしたままだった。

「ガザ、魔法鏡の破壊は？」

「していません。ベルゼブブの頭蓋の魔法鏡は機能していません。」

「では……この城に魔法球はないという事じゃな。」

「改めて調査しましたが皆無でした。」

帝王はうんうんと頷いた。

「ガザ、おぬしは信用できる仲間を10人程集める。ラナを助け出す。」

「……ですが」

「レノは抜かせ。」

スツパリと言い切り、帝王はまた言った。

「1ヶ月、準備期間を置く。それ以外は勝手に動くな。」

「……ハイ。」

有無を言わせない口調にガザは小さく返事を返した。

「ツチ……」

香喃が熱を出した。

元々数日間何も食べていなかったのと、寒すぎる気候と、貧血と、精神的不安と、……数えはじめればきりが無い。免疫が弱くなっていたのだろう。

額に手を当て、その熱さに気づいたのがつい数分前。

それまでの数時間、沙捲は香喃を放置していたのだ。

石床では冷えてしまう、と香喃の体を抱えた。

生憎……沙捲は毛布など持ち合わせていなかった。

気絶するように（元々気絶したまま眠ったようなものだが）眠りこんだ香喃は時折身を震わせてせき込んでいた。

「……」
その時、いきなり香喃が目を覚ました。沙捲は驚いたが小さく問いかける。

「オイ……」

香喃は呆けたように沙捲を見たが、また力を抜いてうずくまった。

青白くなつた指が沙捲のワイシャツをつかんだ。

沙捲が驚いているとくぐもつた悲鳴にも似た嗚咽が聞こえた。

「……?」

沙捲は首をかしげて耳を近づけた。

その瞬間、香喃の手が沙捲の頬を張った。

沙捲が愕然としている間に香喃はゆっくりと体を離れた。

「!?!?・・・おい・・・」

「あなたは・・・違う・・・」

沙捲が目を見開くのを見て、香喃は眉をゆがませてまたうずくまった。

日に日に香喃は弱っていった。

沙捲に医療的な知識があるはずもなく、何もできずにそれを見ていた。

城には沙捲より餓えた者が腐るほどいる。

こいつを連れて行ったら一瞬で肉片になっちまう・・・

沙捲は深々とため息をついた。

だが此処に置いておいても確実に死ぬ。

沙捲は香喃の体をゆすった。

「おい。」

「・・・」

「此処を出るぞ。医者に連れて行く。」

「・・・」

香喃はかろうじて開いていた目を閉じて顔を隠してしまった。

沙捲は小さなため息をつき、香喃を抱きかかえる。

大した抵抗もせず、香喃は黙って沙捲の服にしがみついた。

「よし・・・集まったな。」

ガザは皆の顔を見回した。

「よく集まってくれた。本当に感謝している。」

ガザは深く頭を下げた。

9人の魔術師がガザを驚いたように見ていた。

「何言ってるのよ?」

その中のミラが屈託なく笑った。それにつられみんなも笑いだす。

「長い仲だろ?」

「・・・ああ。」

此処にいる全員は、今までずっと戦いを共にした友人だった。

ガザ マインに乗り出すために死線を共にする予定だとは、今の雰囲気からは誰も想像できないだろう。

「ついてきてくれたのは嬉しい。だが今、少しでも迷いのあるやつは抜けてくれ。だれも責めないし、俺はそうしてくれることを願うよ。」

ガザが言うシーンと静まり返った。

「ぶっ・・・」

誰かが吹き出す。ガザは眉をひそめた。するとみんな一斉に笑い出した。

「!」

「バーカ!ほんつとあなたって馬鹿ね。」

ミラは今まで見せたことのないような優しい笑顔を見せた。

「生半可じゃない事くらいわかってる。でも私たちはガザについて行きたいと思ってるのよ。」

ガザはしばらく悩んだのち、小さくうなずいた。

「帝王から1ヶ月間の準備期間をいただいた。その間に作戦を立て、実行に移せるまでにするんだ。敵は強い。急がなくてはな。」

全員が返事をし、ガザの周りに集まり作戦会議を始めた。

仮面舞踏会の夜9「始動」(後書き)

ぐだぐだと同じ話題をいつまでもすいません・・・(´-`-´)

もうちょいで踏ん切りつけます！待っててください(´-`-´) 逃っ

仮面舞踏会の夜10「やぶ医者」

やぶ医師

「・・・どうしてここまで放っておいたんだい？」

沙捲はスツと目を細めた。

「てめえらみたいな餓えてるやつらがいるからだろうが。」

「はは、言えてるかもねえ・・・」

ぼさぼさの黒髪に、よれよれの白衣。目の取れかかった鬼の人形を持ち、気だるげにカルテを見るこいつは、一応医者だと言われている。

「この子が死んだら譲ってくれるかい？」

「ふざけるな。」

バツサリと沙捲が言い切った。目の前にいるのは、新にい新健一にいけんいち。

洋名は与えられていないらしく、それだけでも異端だがさらにザマインで働く唯一の完全な”人の子”だ。

その異常な性格を何故かハーヴィに気に入られつい最近入ってきた新入りらしい。

まあ沙捲にとつて知ったことではないが。

その代わりこの医者の評判は気になった。

治るのだが数日後に突然患者が発狂して死んだとか、患者の入っていった部屋から鳥人が出てきたり、そんな話ばかりだ。

「しばらく”入院”だね。」

ポーっとしているとそう唐突に言われた。

沙捲が怪訝そうに眉をひそめるのを新は楽しそうに見つめた。

「大丈夫だよ。レインさんの連れの人だもんねえ」。上に怒られち

やうじ。」

「……」

「じゃあ、今日は此処で休ませてあげるから。お気をつけて帰ってくださいねえ」

まさか、此処にいるとは沙捲には言いだせず、後ろ髪を引かれる想いを感じながらもドアを後ろ手に閉めた。

「……」

香喃は息苦しさを感じて目を覚ました。

『……あれ？』

また見慣れない天井が目に映った。

『……そうだ、医者に行くつて……』

ようやくその事を思い出し、また眼を閉じた。

体が熱い。関節が痛くて、典型的な風邪だとわかった。

『もう少し寝よ……』

あまり働かない頭でそれだけ考えて、力を抜いた。

「ふふん ふん」

誰かの声が聞こえ、香喃は目をあけた。

沙捲の声じゃない。

「あらあら起きた？まだ辛いデシヨ。」

「……誰……」

声が酷くかすれているのが自分でも分かる。

男が擦っていると思われる煙草のにおいが鼻をツンと刺した。

「新です。医者だよ。レイン君が君を連れてきたんだ。衰弱してるから、もうしばらく”入院”ね」

「……」

香喃はなぜかこの医者に好感を持てなかった。

妖しいというか、気味が悪い。

「眠れないなら・・・」

新がそう呟き、香喃の腕をいきなり掴んだ。

「いつ・・・?」

「睡眠薬の応用編ね。」

チクツと微かな痛みを腕に感じた。

新の手が離れたと同時に、体がベットに沈む込むような気がした。体が重くなって、目をあけているのが辛くなる。

降りてくる瞼を必死にあげ、香喃は声を出そうとして唇をわななかせた。

「シート・・・鎮静剤みたいなものだから。」

「・・・っ・・・必要・・・ないっ・・・」

香喃は何とか意識を保とうと粘ったが、気を失う様にして眠ってしまった。

「薬に多少の免疫あり・・・と。」

カリカリとカルテにそう書きつづり、新は口元をやんわりとゆがめた。

メスを手にとつてゆっくりと反射する鈍い光を見つめる。

「解剖とかしたいなあ・・・でも怒られちゃうし。」

心底残念そうにメスを置き、深い眠りについていてる香喃を見た。

目をふい、と反らし口角を上げ、また鼻歌などを唄いながら新は部屋から出て行った。

「地図か・・・」

戦争でも、戦いでも潜入でも全部そうだ。

地図がなくては始まらない。何処に人が集まるか、入り口はいくつか、広さはどれくらいか、・・・

地図かなければ分からない事は無限にある。作戦も地形に大きく左右されるため立てることができない。あと24日。

「盗んでこようか・・・？」

「ダメだ。二の舞だ。」

ガザはミラを止めた。

そんなことは無理だ。実は数日前一度一人を送り込んだ。メロという一番若くて、すばしこいやつ。

だが彼は帰ってきていない。まだどうなったかは分からないがおそらく・・・

もうこれ以上人を欠かしてはいけない。勝機が見えなくなってしま

う。
「帝王様に交渉してみる。もしかしたら戦争前のあるかもしれな

い。」
希望は無いに等しいがガザは一応帝王の元へと行った。

だが「無い」の一言でバツサリと切られ、数分後帰ってきたのは言

うまでもない。
と、その時ひらりと何かが舞い降りてきた。

「・・・？」

「コレ・・・地図・・・？」

ミラが啞然としてその紙を広げた。

紛れもない地図だった。しかもかなり正確な、最近のもの。

「なんで・・・どこから・・・？」

その声に、頭上にそびえる塔の上から返事が返ってきた。

「やる。」

「レノ!？」

塔の上にはレノが長い足を組んで悠々と腰かけていた。傷は完治とまではいかないが、だいぶ良くなったようだ。

「それやるから、俺を入れるよ。」

「・・・それはダメだ。」

ガザはきつぱりと言い切った。

「じゃあ返せ。」

「いやだね。落し物は俺のものだ。」

そう不敵に笑い、サツとポケットにそれをしまった。

「ふざけっ・・・」

そして、さっきまでの笑顔を打ち消し、遮るように鋭く言った。

「お前にこの件は関係ない。牢にぶち込まれなくなかったら失せろ。」

レノはキュツと眉をしかめた後、何も云わずに姿を消した。

<残り22日。>

香喃は顔に当たるチクチクとした感触で目を覚ました。

「にやあ〜」

「いたっ・・・いたた・・・」

だるい体でもがくとふわふわとした者に触った。

「ね・・・こ・・・」

さつきあたっていたのはひげだったのだ。

すっかり目がさえて、香喃は起きあがった。

「なんで・・・？猫ちゃん名前は・・・？」

まだ寝ぼけもあってそんなことを聞いて、一人苦笑した。

「メロ。」

そう猫がきつぱりと答えた。

「は・・・？？」

香喃は目を見開いた。それはもう零れ落ちてしまいそうなくらいに。

「新・・・さん？誰かいるんですか・・・？」

不安になって周りを見回していると猫パンチが飛んできた。

「てっ・・・」

「メロって言うてるだろ。」

「なに？どうしたの猫ちゃん・痛いよ」

「・・・」

「たっ!？」

ガリツと頬を引っ搔かれて香喃は怪訝そうに猫を見る。

「ガザの友人だ。此処の地図知らないか？」

「ガザ・さん・って!なんで!?どうしてここに・・・」

「お?ガザを知ってるのか？」

もはや猫が喋るといふ異常事態はスルし、香喃はメロを見た。

「メロ、あなた・・・」

香喃が口を開くと部屋の外から足音が響いてきた。

「まずい・・・」

「入って。」

香喃は小声で言っつて布団の中にメロを入れた。

「お早うさん。」

「・・・」

幸い気づかれていない・・・かも。

「体温測ってね。あと、此処は動物禁止だからね」

「っ・・・」

メロが身をこわばらせた。

とっくに気づかれていたようだ。

「この子・・・あの・・・」

「ウチの施設から逃げちゃったのかなあ。ごめんねえ」

「・・・」

「悪い子で困るなあ・・・じゃあ貸して？」

メロが布団の中で後退し始めた。

香喃は抵抗したが新はさつさとメロを抱き上げてしまった。

「やつ!・・・その子は・・・!」

「何？」

「し・・・施設では何を？」

「遺伝子組み換えとか、解剖とかかな。」

香喃はサツと青くなった

「ダメ・・・です」

「は？」

「ダメです！そんなっ・・・」

「ダメって言われてもねえ・・・しょうがないからねえ。じゃあねバ
イバイ。」

「あっ、ちよっ・・・！」

新はさっさと部屋を出て行ってしまった。

香喃はしばし呆然としていたが、すぐにそこらにあった鉄パイプを
手に新の後を追った。

仮面舞踏会の夜11「暗黒」

暗闇

「ツチ・・・」

沙捲は自分の家でうろつろつとしていた。

家と言っても、香喃を最初に連れてきた石造りの城の事だが。

どうしても新が信用できない。

どう見ても妖しい。自分に隠れて何かしでかしそうだ。

「くそ・・・」

一度気になつたらそのことが頭から離れなくて仕方なかった。

沙捲は苛立たしげに舌打ちし、城をでた。

「新さん！待って！！」

香喃は途中で新を見失い泣きそうになりながら呼んだ。

ドアが両面にびっしりと並ぶ廊下は、慣れた者でも迷いそうだった。

おまけに人影もなく道を聞くすべもなかった。

「・・・！！」

だんだんとイラついてきて、香喃は手近なドアをバツと開けた。

「あ・・・？」

『なに・・・これ・・・』

ドアの先には何もなかった。あの、沙捲のアパートで見たような暗黒が渦巻き、全身に鳥肌が立つ。何か香喃を呼んでいるような気がした。

気づけば、一步、また一步と足が動いてしまう。
あそこに行けば、楽になる気がする。辛いことなんて無くなる気がする。

『嫌だ・・・っ』

香喃はハツと我に返って乱暴にドアを閉め切った。

「っ・・・っ」

まだ心臓が早鐘を打っている。

自分の体を抱きしめるようにしてなんとか震えを止めようとした。

《みぎゃー！！》

甲高い悲鳴に、香喃は振り向く。

すぐ手前のドアからだ。

迷わずそれに手をかけ、開いた。

「止めて！！」

新の手にはメスが握られていた。その下には銀色の毛を赤く汚したメロがいる。

それを見た瞬間、香喃の体がカツと熱くなる。怒りが抑えられなかった。

パイプを握り締め、新に踏み込んだ。

高い音がし、メスが新の手からとんだ。

「何してるんですか！なんで・・・」

言葉が続かなくなつて、香喃はメロの拘束具を外して出血部を押さえた。

「何って・・・ねえ。だってその子実験体じゃない。」

「こんなことできるなんて頭おかしいんじゃないの！？ぶざけんじやないわよ！！！」

怒りにまかせて怒鳴り、香喃は新に背を向けて歩きだす。

とりあえずメロの傷を塞がなければ。

そう思つてドアに手をかけた瞬間、背筋がひやりとした。

ソツとして振りかえると顔のすぐ横にパンツと手をつかれる。新がすぐそばにいた。嫌な”気”を香喃は感じた。

「っ・・・」

「ねえ、その猫あげる。」

「は・・・あ？」

香喃はすぐ目の前にある新の顔を直視できなくて視線をうつろつかせた。

「勝負しようよラナさん。」

「・・・」

香喃は突然の事で目を見開く。

「何・・・で？」

「剣でも、魔法でもいいよ。」

「猫は・・・？」

「だから上げるって。」

香喃はゆるゆると首を振った。

「そうじゃなくて・・・怪我・・・してるもの。傷を塞がないと・・・」

「塞いだらいい？」

「はい・・・」

新は驚くほど素直にメ口の傷を縫い始めた。手つきは正確かつ迅速で、そこらへんの医者 of 技能をはるかに超えていた。

香喃も包帯や消毒液を持って、新を手伝う。

なんだか変な空気の中で作業は進む。

「コレでいいかい？」

メ口は鎮痛剤を打たれ眠っていた。

「・・・ハイ」

「じゃあ、パイプ持って。」

「此処でするんですか・・・？」

香喃は嫌々パイプを握り締める。

「負けたら、何してくれるの？」

「・・・何もしません。賭けをするなら勝負もなしです。」

「釣れないなあ・・・」

ピシヤリというとは新は目を細めてメスのような医療用のナイフを握った。

『・・・メスでやるの・・・?』

そう思ったが、新が踏みこんできたため何も云えなかった。

「っ・・・!」

手を打てばいいとは思っているのだが、動きが早くてナイフを弾くのが精いっぱいだ。

『嘘でしょ・・・!?』

香喃は押されていた。ありえないとは思ったが、じりじりと壁へと押された。

本気で掛かっていつているのにだ。

「っっ・・・!」

頬を新のナイフがかすった。

だが流れた血を拭う時間も与えず新は手首を返し首を狙う。

「ちよっ・・・!」

『待つて!』

このままだと首に刺さる。香喃がパイプをガードに引き上げようとすると、パシッと開いている方の手で手首をつかまれた。そのまま流れるように新は香喃の両手首を片手で掴み、頭の上で壁に縫いつけるようにして固定する。

「や、っ・・・」

新がナイフを振りあげた。

まさか死ぬまでやる気ではないだろうか。

そんな考えがよぎり香喃は背筋を凍らせた。

その瞬間だった。

「うわ・・・?」

新が横薙ぎに吹き飛ばされた。

「あ・・・う・・・」

香喃は痺れはじめていた腕を下げ、そこにいる人物を見る。

「沙捲・・・さん・・・」

「てめえ・・・」

沙捲は新を睨みつけている。香喃の首にナイフが刺さる寸前に、沙捲が強烈な回し後ろ蹴りを繰り出したのだ。

「イテテ・・・」

沙捲は落ちたナイフを新に向かって投げた。

ビイーンツと微かな振動音を響かせ、新の顔の数センチ横のコンクリートの壁にナイフが突き刺さる。

香喃は止めていた息を吐きだした。

助かった・・・

香喃は新と沙捲のにらみ合いの横を縫って、こっそりと外へと出た。

メロの傷を塞がなければ。

腕に抱いたメロを撫で、苦労して見つけた自室に入った。

「メロ・・・大丈夫？」

「ああ」

弱くだが返事が返ってきたことに安堵し、治癒を始めた。

仮面舞踏会の夜12「帰ろう」

帰ろう

メロが目を閉じるのを見守り、香喃は体の力を抜いた。

もはや凄まじい物音がする部屋を見に行こうという気力も出ない。

『大丈夫でしょ・・・きつと・・・』

そう思った瞬間、香喃は激しいめまいを感じた。

「っ・・・!?!?」

これは絶対に自然なことではない。

歯を食いしばろうとすると頬がひきつる。香喃は頬に手をやった。

渴いた血と、皮膚がひきつったことで新たに出た血を見て直感する。

「あいつ・・・っ・・・!?!」

メスに何かしみこませてあったのだ。

そう気づいたが既に遅く、手足がしびれ始めた。意識がもつろろろとして、体が上手く動かない。

香喃は何かドアにすがりついた。

「しょ・・・ま・・・さ・・・」

小さく声を上げ、香喃は気絶した。

「か・・・なん・・・?」

ふいにその言葉が口をついて出た。

新がきよとんととして動きをとめた。

「なに?」

「いや・・・」

つい我を忘れて沙捲は武器を落とし、出口に向かった。

「なんだ終わりかあ・・・」

その言葉を見無視し、沙捲は廊下を歩きだす。

『呼ばれた・・・』

眉をひそめ、ドアを開けた。

だがドアは、コツン、と音を立てて途中で軽く止まった。

「？」

長い髪が、沙捲の視線の先にあつた。

それが人の体だと気づくのに数秒かかり、沙捲は茫然とそれを眺めていた。

とにかくそのままではドアが開かないので、隙間から手を伸ばし体をずらした。

中へと入り、平然と香喃の体を持ち上げベットに戻す。

「グルルルル・・・」

その枕元で猫が唸っていた。

『なんでこんなところに・・・？』

つい手を伸ばすとシャツと手の甲を引っ掻かれた。

沙捲はゆっくりと手を引き、不機嫌そうに眉を寄せた。

殺して血でも吸ってやるうか、と思い猫にまた近づくとぼん、と肩を叩かれた。

特に驚きもせず、苛立たしげに振り返る。

「なんだ。」

「その猫ちゃん、ラナちゃんのなんだ。殺したら怒られちゃうよ。」

新は猫をまるで物のように扱っている。

沙捲は嫌気がさしていつまでも置かれてる手を振り払った。

「なんでこいつは寝てるんだ。」

「さあ・・・疲れかな？」

沙捲は目を細めた。

「ごまかすな」

「えっ・・・ああ、メスに麻痺剤を塗ったかも。」

麻痺剤だけか？と疑問には思ったがこいつにしてはまだまだましな方だろうと何も云わなかった。

もう何週間も過ぎた。

逃げようと思って何回も脱走したがその度新か沙捲があつという間にやってきて連れ戻される。だが罰は何も与えられなかった。沙捲の吸血は数日に一度だ。それが唯一の苦痛で、他に何の不自由がないのがまたおかしかった。しかもここ1週間以上血は吸われていない。

ついでに言うとメロは香喃が寝ている間に何処かに行ってしまった。恩知らずめ、と小さく悪態はついたがそれぐらい元気になれたならいい。新の研究室にも動物はいなくなった。

・・・全部香喃が逃がしたのだが。

「よし・・・こい」

ガザが手で合図し、ミラが合流する。

「ラナちゃんは炎龍の間ね」

「おそらくレインも一緒だ。」

2人は此処で待機だ。もう少して他の仲間が総出で爆発を起こして敵の気を引く。

見張りの兵は最初に入った2人があらかた潰したはず。

2人は爆破の音を合図にこの扉の向こう・・・ラナを救出する。

そして沙捲を捕える。

上手くいくかは解らない。だが2人は希望を捨ててはいなかった。数分後、低い地鳴りがした。

城が揺れ、埃がはらはらとおちる。

「行くぞ！」

ガザがドアを蹴破った瞬間、信じられない光景が2人の目に映った。

「来い。」

そう言われ、香喃はしばらく固まっていた。

「・・・来いと言っているんだ。」

不機嫌な声で言われ、香喃はそろそろと沙捲のそばに行った。

沙捲は香喃の首に顔を埋める。ゾクリと肌が泡立つのを感じながらも、香喃は懸命に耐えていた。

「うつ・・・あ・・・」

首に熱を感じた次の瞬間痛みが走り、香喃はきつく目を閉じる。

その時だった。

ズシン、と城が揺れた。沙捲はそんなことも気づけないほど空腹だったらしく香喃の血を飲み続ける。

するとその揺れが収まるや否やドアがぶち破られた。

「ラ・・・ナ・・・!!!」

しばし呆然としたガザが険しい表情で走り寄ってくる。

「ツチ・・・」

沙捲は面倒くさそうに香喃の首から口を離した。

香喃は止血もされていない首を手で押さえた。

沙捲は一瞬で魔力の球を作り上げ、ガザに飛ばす。ガザは沙捲がそんなことをするとは夢にも思っていなかったらしくガードが遅れた。

「ガザさっ・・・!!!」

香喃が叫びかけた時、魔力の球はガザに当たる直前で跳ね返った。

香喃はカウンターを張った魔力に見覚えがあった。

「レノさん！」

「・・・ほーら、俺がいた方が良かったろ？」

レノは得意げに笑い、高い梁から飛び降りた。ずっとそこに居たらしいが沙捲と香喃は全く気づいていなかった。

レノとガザは一瞬目を合わせ、攻撃を始める。

レノが攻撃を撃ち、ガザが沙捲からの攻撃を全てガードする。

しばらくするとそのガードが、たまたまカウンターとなり沙捲の腕にぶつかった。

『そうか、反射角を・・・』

ガザはずっと沙捲の攻撃の反射角を探していたのだ。

ガザはその一瞬で沙捲の片手をつかみ上げた。

血液不足な沙捲はガザをきつく睨む。そして魔力を手にため始めた。

香喃はそれに気づき、目を見開いた。

「沙捲さん！」

香喃がもう一方の手をきつく掴む。

「止めて！」

香喃が腹の底から怒鳴ると沙捲は一瞬ひるんだ・・・気がした。

その場は不思議な空気に包まれる。

だが沈黙を破るように、ガザのもう一方の手が鞭のように唸った。

バキッ！

耳をふさぎたくなるような嫌な音を響かせ、ガザの拳が沙捲を頬を直撃した。

その瞬間、香喃は沙捲の耳のあたりから銀色の何かがとんだ。

「あっ・・・」

香喃はハッとしてポケットの中を探る。

『これ・・・』

沙捲がゆっくりと立ち上がる。

「てめっ・・・ガザ！何しやがるんだこのドアホが！！！」

「・・・はあ？」

沙捲は殴られた頬をさすってガザをにらむ。間違えなく沙捲が怒鳴った。

「どこだ・・・?ここ・・・」

しばらくするとポカンとして周りを見回す。

その瞬間、ミラの平手が逆頬を襲う。

ヒステリックともいえる甲高い音だ。

「たっ!」

「ああすつきりした。」

ひどいなあ、とは思いつつも香喃はミラの一言で吹き出した。

その次に、レノの強烈な上段回し蹴りが沙捲の顎を襲った。沙捲はへなへたと座り込む。

きつとガザに仮面がつけられていたように、沙捲の洗脳装置はこのピンだったのだ。

香喃は全身の力が抜けた。ガザも洗脳装置の事に勘づき、ピンをぐしゃりと潰した。

沙捲の服を引き、ずっと言いたかった事を口にする。

「帰りましょ。沙捲さん。」

「あ?あ・・・ああ。帰るが・・・」

その瞬間、胸に焼けつくような痛みを感じた。

「・・・?」

チュンツと音がし、香喃の胸を光線が貫いた。

4人が目を見開く中、香喃は床へ崩れ落ちた。

仮面舞踏会の夜12「帰ろう」（後書き）

もうちょい・・・もうちょいで終わります！

それと、感想を下さる方が居てとても嬉しいです。

もう少しだけお付き合いよろしくお願いします。

仮面舞踏会の夜最終話 13 「愛別離苦」

愛別離苦

「香喃！！」

「「「ラナ！！」」」

4人の声がこだまする。不幸なのか、幸いなのか、香喃には意識が残っていた。

「おい香喃！しつかりしろ！！」

沙捲が膝に香喃の upper body を抱える。香喃は横を向いて激しくせき込む。「だ・・いじよ・う・ぶ・・です。」

香喃は逆流した血を拭った。自分でも驚くほど冷静だった。だが気を抜くと痛みで叫んでしまいそうだ。

「よかった、肺も心臓も平気・・・」

ミラがテキパキと傷を確認した。沙捲は黙って光線の飛んできた方向をにらむ。

「あゝあ・・外しちゃった」

新は苦しむ香喃を見て嬉しそうに笑った。

「苦しいねえ〜ごめんね。中途半端にやっちゃって・・」

「てめえ・・殺す。」

「まったくレイン君も洗脳から解けちゃったしい〜・・つまんないなあ。」

その言葉を言い終わるか終わらないかのところで沙捲の光の矢が新を

襲う。

「ハーヴィ様！」

その叫びと共に、盾が新を守る。

盾を持ち、前に飛び出したのは衛兵だった。

だが、5人を驚かせたのは衛兵が口走った名前だ。

「ハー・・・ヴィ・・・だと？」

「あゝ・・・その名前はダメだって言っただつしよ？」

「ぐあつ!？」

新、・・・いや、ハーヴィは光線で衛兵の額を貫いた。

「っ・・・狂ってる!!！」

ミラが怒鳴った。

ぐしゃりと崩れ落ちた衛兵を振り向きもせず、ハーヴィはにっこりと笑った。

「改めまして〜こんにちは。新健一改め、ハーヴィ・ザ・マインですv」

「そんな・・・」

この狂った男が王だとは・・・

だがそれなら戦をしかけてこようとするのも解る気がした。

「さ・て・と、レイン君。裏切り者には厳しい罰をね」

ハーヴィは手を前に差し出した。

ぶわつと魔力が光る。その色は金色だった。

沙捲は固まったように動けなかった。

「死 あるのみv」

ハーヴィがまた光線をつくりだそうとした。

「っ・・・」

香喃はガザの懐にあった帝王からもらった剣を抜いた。

血が吹き出るのもかまわず、ハーヴィと沙捲の間に割って入る。

光線は出来上がってハーヴィの手の中でもどかしげに振動している。

「そんなに死にたいの？」

「よせ・・・!!」

「いいよ、殺してあげる。レイン君の絶望した顔も見たいしね。」
まっすぐ頭に向かつてきた光線を、香喃はたまたま庇うようにして
あげた剣ではじいた。

その光線はハーヴィの足をかすめる。

「ツチ・・・」

ハーヴィは今までに見せたことのない冷たい顔を見せた。

そして恐ろしい勢いで香喃の懐へと踏み込む。

「っ!?!」

だがそれをレノが阻止した。

ハーヴィはぎろりとレノをにらんでぶんと手を振った。

その瞬間レノは吹き飛ばされ派手に壁にぶつかった。ヒビの入った
壁がその衝撃を物語っていた。

ガザとミラがハーヴィに飛びかかるが金色の魔力にはとても太刀打
ちできず、レノと同じように吹き飛ばされた。

「っ・・・」

沙捲は香喃を背に庇うようにたった。

いくら虹の魔力があったとしても、ろくに魔術を習っていない香喃
にはとても太刀打ちできないと沙捲は気づいていた。

「ハーヴィ・・・」

「その名前やめてくれるかな？嫌なんだよね。」

「・・・」

沙捲は何も云わず剣で切りかかった。

「おっとつと・・・」

ハーヴィも衛兵のつけていた剣を持っていたらしく、高い金属音が
響く。

香喃は沙捲を援護しようと思うが激しく動き回る2人のどちらかに
魔力を当てるなんて無理だ。

「っ!」

力不足だ。明らかに、力が足りない。

ハーヴィが香喃の方をみてニヤリとした。

『この子を殺しちゃった方が面白いかも』
沙捲の剣を強くはじき、香喃に剣を向ける。傷を負った香喃は弾くことはおろか、激痛で剣を持ち上げる事も出来ない。

「香喃!!!」

沙捲の声が響く。香喃はきつく目を閉じた。

【ザクッ】

「か・・・はっ・・・」

香喃は目をあけた。なぜか痛くない。

ただ、目の前を見て目を見開いた。

香喃の鼻の先には血に濡れた剣先が光っていた。

そしてその剣は沙捲の心臓を深々と貫いていた。

「な・・・んで・・・沙捲・・・さん・・・」

絞り出すように口を開く。

「あゝあ・・・やっちゃったよ。」

「ぐっ・・・」

ハーヴィはつまらなそうに言っつて剣をえぐるようにして抜いた。

「兄貴!!!」

レノの悲痛な声が響く。ガザとミラの声も、香喃は意識の隅で聞いていた。

血が吹き出て香喃の頬に、体に飛び散った。

深紅の他人の血。生暖かい血がぽたぽたと落ちる。

沙捲の体が力を失って落ちた。香喃も立っていることができずひざから崩れ落ちる。

「沙捲・・・さん?・・・なんで?どうして・・・」

香喃はまだ状況を受け入れることができない。

誰の目から見ても沙捲は助からないと解った。

「兄貴・・・!」

レノがわき目も振りかえらず走ってきた。沙捲の頭を横に向ける。

香喃はただ茫然と沙捲を見ているだけだった。

「兄貴！おい！！兄貴！！！！」

沙捲は目をあけない。香喃は震える手で治癒を施そうとした。

「あゝ．．．ごめんね？」

ハーヴィはしれつと言った。攻撃するつもりはないらしい。

それより皆それどころではない。

「レイン、．．聴こえるか？目をあけるよ．．」

ガザは血の気の失せた顔をしている。

ミラは必死に魔力を集める香喃の手を取った。

「なんでっ．．」

「もうダメよ．．っ．．．ダメなの」

ミラは泣きじゃくっていた。

香喃は涙を流すことを今まで忘れていたようだった。

だがミラの言葉を聞いて涙があふれ出す。

「沙捲さん！！起きて！！死なないで．．お願い．．．！！」

沙捲を思い切り怒鳴りつけた。一瞬いつも、学校へ行くときの朝の

風景を思い出した。

そしてもう日常には戻れないかもしれないと思うと鼻の奥がツン、

と痛くなった。

「っ．．．」

その時、奇跡的に沙捲が目を覚ました。薄く開いた目は、4人を順々に見回す。

「か．．な．．」

小さく漏らした声も聞き逃すまいと香喃は耳を寄せる。

「ごめんなさい、沙捲さん．．ごめんなさい」

私のせいだ。私をかばったから．．

「レイン．．．お願いだから死ぬんじゃない。俺たちにはお前が．．

．．」

必要なんだ、とガザは弱弱しく囁くような声で言い切った。最後の言葉は涙を堪えているのか震えていた。

「悪・・・いな・・・おい・・・香喃」

その時、沙捲はハツキリと言った。

「お前は生きる。」

香喃は目を見開いた。涙がぼろぼろと流れた。

「っ・・・嫌です・・・だつて約束っ・・・」

「くくっ・・・まだ・・・おぼえ・・・たんだ・・・な・・・」

沙捲は喉の奥で笑った。血が口の端から零れ落ちる。

「死なないでください！私も死にますよ!？」

「ははっ・・・む・・・りな・・・話し・・・だ・・・な」

「何言ってるんですか・・・やめてくださいよ・・・お願いですから・・・

！」

香喃は涙声で訴えた。その目をまた悲しみにゆがめる時、幾つもの涙が沙捲の頬に落ちる。

沙捲は穏やかに笑った。

「暖かい・・・雨・・・だな・・・綺麗な・・・虹が・・・出そうだ・・・」

レノがその言葉を聞いてついに大粒の涙をこぼした。

「よせよ兄貴・・・やめろ・・・」

「お前も・・・兄貴・・・離れ・・・しろよ・・・」

「っ・・・いい・・・そのままいいから頼むからっ・・・!」

レノが言うが沙捲は微笑むだけだった。もう口を開く力もあまり残っていないらしい。

「香喃・・・俺は・・・」

沙捲が何かを言いかけて言葉を止める。

「・・・？沙捲・・・さん・・・」

いきなり沙捲の瞼が降りた。

香喃は握り締めた沙捲の手が冷たくなっていく。

沙捲は既に息をしていなかった。眠っているかのような顔を香喃は何度も見かえした。

もしかしたらひよいとおきるんじゃないか。

目が開くのではないか。

「沙捲……さん……?」

氷の様に冷たくなった手を必死に握り締める。

頬に手をやった瞬間、その冷たさに驚いて香喃は手を引いてしまった。

「いや……いやだ……いやああああ!!!」

硬直の始まる手を握り、香喃は沙捲にすがりついて泣いた。

「あの……そろそろいいかな?」

ハーヴィの声だと解ると、香喃はふらりと沙捲から体を離れた。

3人は啞然としてそれを見つめる。香喃はとても動ける状態ではないはずだ。

「……し……ね……」

ほとんど無自覚にその言葉を呟き、香喃は剣を持ち上げた。

痛みなんて吹き飛んだ。ただ、沙捲がこの世から消えた、という事実が胸を刺し続ける。

そしてその怒りの矛先はハーヴィへと走った。

香喃は叫びながら剣を振り下ろす。

「おっと……!?」

避けられると一瞬で手首を返しハーヴィの剣を弾き飛ばした。

力が沸いてくるわけではない。底知れぬ怒りが我武者羅に香喃を動かした。

首を狙った斬撃がかるうつじて避けたハーヴィの頬を切り裂く。香喃は素早く体勢を整え、魔力をため始めた手首を斬り落とした。

「うつ……あああ!」

ポタツと鈍い音を立てて腕が転がり落ちる。

下から上へと切りあげるようにして振った剣が、今度はひじから先を飛ばした。

「ぎゃあああああ!!!」

人のものとは思えない叫びを上げ、ハーヴィはいつものポーカーフ
エイスを崩して飛び退る。

「え・・石兵^{いしへい}!!!」

ハーヴィが叫ぶと飾りだと思っていた雨どい受けのガ　ゴイルたち
が鈍い音を立てて動き出した。

石に刃は立たない。

「ラナ!!!!」

ガザが魔法で石兵を砕き、ハーヴィに近づこうとする香喃を羽交い
絞めにした。

「逃げるんだ香喃!兵が来る!!!」

その証拠に、馬の蹄の音や、ドラゴンの羽ばたきが聞こえる。

この状態では太刀打ちできない。

「沙捲さんは・・!?おいて行くなんて!!!!」

横たわる沙捲に手を伸ばす香喃を、ガザは荒く引き寄せた。

「ダメだ!」

「でも!」

香喃は大粒の涙をこぼす。

「生きると言われただろうが!!!あいつの死を無駄にするんじゃない
い!!!」

ガザも気づけば泣いていた。

「っ・・」

香喃は怒鳴られてびくりと身を震わせた。

『そつだ・・生きるって・・』

それが、師匠として、人として、沙捲から初めてされた”命令”だ
った。

最初で最後の命令。

大人しくなった香喃をぐい、と抱きあげガザはミラとレノに叫んだ。

「上に”狭間”がある!そこから戻るぞ!!!!」

レノは狼となりミラを背に乗せた。

ミラは振り返って魔球で柱を壊した。すると天井までヒビが入り、バラバラとがれきが落ちてきた。

「沙捲さ・・・」

香喃は無理矢理身を振ってがれきの下へと消えて行く沙捲に手を伸ばした。

それが、香喃が沙捲を見た最後だった。

仮面舞踏会の夜最終話 13 「愛別離苦」 (後書き)

もうちよいという台詞を幾つ使っただしょうね……。
もうちよい) (です。

自分で書いといてなんですけど……沙捲さん死んじゃったよ) :
— ()

雨と虹 最終話

雨と虹

お前は生きる

香喃。．．俺は．．．

「．．師匠．．．師匠？どうしたんですか？
自分を呼ぶ声で声でハツと我に返る。」

「あ．．ああ、ごめん。何でもないの。」

香喃はそう答え、弟子に目を戻す。

「そう．．．ええと何の話をしてたかしら？」

ダメだ。どうしてもここ最近ぼうつとしてしまう。あまり寝れていないのが原因かもしれない。

「四大魔力の話です。炎と、水、風までは聞きました。」

香喃は小さなため息をついて頭を抱えた。

こんな泣きだしそうな空の日はあの事を思い出す。

大切な人．．師匠を失った日を。

「あとひとつは土よ。ガティ。地震や地割れを起こせる。後は物質変化の呪文が使えるれば蟻地獄や、沼も作れるわ。」

香喃は感情を無視し、口を動かす。

「へえ．．沼は水の力も使えますよね？」

「そう。物質変化は熱を加えたり水分を加えたりするわね。だからこういう風に．．．」

そういって香喃は地面に掌を向けた。鮮やかな虹色が手首に巻きつく。

すると地面は見る見るうちに渴いてそこに生えている草が枯れ、砂に戻ってしまった。

「これは炎を使ったの。」

「うわぁ・・・」

目をまん丸くするガティを見て香喃は微笑みをこぼした。

「土の魔力の色は何色だと思う？」

「うくん・・・茶色か・・・黄色？」

「そうね。黄色よ。」

香喃の説明で目を輝かせる沙捲に何処となく似た端正な顔立ちの少年は、香喃が初めて取った弟子だ。

本名は真田晁燈^{まいたあき}。洋名はガティ・グロース。今は香喃の外見上の年齢と同じ17歳だ。魔力は純白。

魔界の仲間内からはガトと呼ばれているらしい。

勉強は嫌いらしいが、飲み込みは早く応用力のある子だ。

「おーいガト！！何やってんの？」

「コラ！ティナ！！邪魔をするんじゃないぞ！」

レノが手を振っている15、6程の少女を叱咤する。ティナと呼ばれた少女は叱られた子犬の様にしゅんとなった。耳があればきつと後ろに折れてしまっているだろう。

レノは少女・・・いや、ティナがしょぼん、としてしまったのに気付き、ばつの悪そうな顔をしてティナに耳打ちする。

するとティナはペアアと目を輝かせた。

「ホントに良いんですか！？」

「おい、演技したなお前・・・」

レノが苦笑しながら香喃のもとへと寄ってきた。

「よ。元気？」

「はい。そちらも・・・」

落ち着きのないティナを見て、香喃は苦笑した。

ティナもまた、レノが初めて取った弟子だ。

本名は枢紗由^{くわさゆ}。16歳で、洋名はティナ・クラウザー。

魔力はオレンジ。

「師匠！いつ！？いつ乗せてくれるの？」

おそらくレノはフェンリルに変身したとき乗せると約束してしまったのだらう。

「あゝも〜静かにしてくれれば。恥ずかしいだらうが・・・」

乱暴にティナの頭を撫ぜ、レノは香喃に苦笑した。

「あゝあ・・・ガティは落ちつきあるよな。兄貴にそっくり」

レノは苦笑した。香喃の瞳が一瞬揺れ、小さく笑った。

「ええ、そういえばそうかもしれませんね。」

「じゃあ兄貴みたいに嫌味なやつに育つぞ〜」

レノはケラケラと笑って革の手袋の上からガティの肩をぼんぼんと叩く。

不意に香喃がレノと目を合わせた。

「ガティ、ティナと一緒にミラさんのところで薬の調合を学んで来なさい。今日は麻痺剤をつくって持ってきて。」

「はい。」

「はい！」

レノにチラ、と目くばせをし香喃は2人を宮殿へと向かわせた。

「お話があるんです。」

「俺に？」

「ええ。」

香喃は酷く懐かしそうな顔をしている。

「今日、沙捲さんのお墓参りに行くこうと思って。一緒に行ってくださいませんか？」

「お墓・・・？」

レノは表情を曇らせた。

「墓はないんだらう・・・？」

「ええ。出来れば作るうと思うんです。弔ってあげることまでできな

かったし・・・」

香喃が言葉に詰まった

「ラナちゃん・・・」

レノは複雑な表情をした。

「行ってくれますか・・・？」

「ああ。行こう。いつにする？」

「今年中にでも・・・。倦さんと、ガティも連れて行きたいんですけど・・・」

「ラナちゃんが辛くないならいいんだよ。」

レノが優しく微笑むのを見て、香喃も釣られて泣きそうな顔で笑った。

場所は変わって人間界。

倦はサビついて開かない窓から広く晴れ渡る空を見る。

「はー！今日もこっちはいい天気だ。」

アパートは倦の希望で残してあった。

こんな大声を出すといつもは上の部屋から五月蠅い、という意味でドンツと衝撃が来たものだ。

それが無くなってから何年もたった。

『なに感傷に浸ってたんだ、俺は・・・』

小さな苦笑をこぼし、倦はかつての沙捲と香喃の部屋へと向かう。

「うおっ！？」

「ちよつと師匠！？」

「いいのよ。この家の礼儀なの。」

誰かの咎める声と、くすくすと笑う声が聞こえたが、倦はそれどころではなかった。

倦がドアを開けた瞬間、半月刀が飛んできたのだ。

「どわっ！」

かろうじて避けた瞬間、別の方から短剣が。

倦は素早く壁に刺さった半月刀を抜き、それではじいた。その後も数十本と投げられる短剣を全てはじく。

「・・・誰だよ？」

息をついて部屋を見回すと何も無いところにスツ、と香喃があらわれた。その後ろに術を解く青年が続く。

「か・・・かなつ・・・ん！」

「お久しぶりです。」

香喃はぺこりと頭を下げた。横に居たガティもつられるようにして頭を下げた。

倦は驚いて口があわあわとわなないている。

「・・・ドラゴンの血でも使いますか？」

香喃は苦笑交じりにそういつて血の出た頬を指先一つで直してしまつた。

「驚きました。部屋が昔のままでしたから・・・。」

香喃は嬉しそうに笑つた。

「ああ・・・この場所を壊しちまうのは嫌でなあ・・・。」

「・・・ありがとうございます。」

ガティは倦の部屋を珍しいものでも見るかのような目つきで見ている。

「ガティ。」

香喃が小さく咳払いをすると慌てて視線を戻した。

「ガティっていつのか？」

「はい。ガティはグロースです。ガトと呼ばれます。」

ガティはきつぱりと答える。

「本名は？」

「真田晁燈です。」

「じゃあ晁燈だな。よろしく。俺は神崎倦。洋名の方はジエネシス・

フロア。」

香喃は洋名があるのか、と目を見開いていた。

「ああ、香喃ちゃんにも初めて言ったな。俺あんまりこの名前好きじゃねえんだ。」

「そうだったんですか・・・」

香喃は微笑んだ。この部屋に来たのは何年振りだろうか。沙捲と一緒に来て”手厚く”もてなされた。

「大きくなったなあ」

倦が苦笑交じりに言った。

「いやですねえ、私17のままですよ？」

「わかってるけどよ・・・なんだ？精神的に？」

「・・・恥ずかしいですよ・・・」

香喃は少し俯き、口ごもったのち切り出した。

「沙捲さんの墓参りに行きたいんです。倦さんにも一緒にいた
だきたいんですけど・・・」

「!・・・」

倦は驚いたように香喃を見た。

「いつになるか分からないんですけど、今年中に行きたいんです。」

「おう。どうせ俺も暇だしな。でも墓って・・・」

香喃は表情を曇らせた。

「無いんですよ・・・。どうにかして作ります。」

「・・・おうよ。そのほうがゆっくり眠れるもんな。」

倦は香喃の頭をポンポンと叩き、笑顔を見せた。

「お願いします。あの、部屋によってもいいですか？」

「おう。お前の部屋だろ。」

「・・・本当にありがとう・・・ございます。」

香喃は深く頭を下げた。

「ガテイ、ちよつと外しててくれる？」

「じゃあ俺の家に来てるか？武器でも見せてやるよ。自分の武器は持たせた？」

「いいえ。」

香喃はまだガティに武器を選んでいなかった。集中力と正確さに長けているガティには遠距離では大弓、近距離では長剣あたりがよさそうだと思っていた。

「買うときは家で譲ってやつから。今日は下見って事だ。」

「いいんですか？」

倦は武器に関してはプロだ。頼めるのなら頼んでしまった方がいいと香喃は思う。

「ほんとに!？」

ガティが目を輝かす。

「すみません・倦さん、頼みますね。」

「おうよ。」

香喃は部屋へと入った。

懐かしい部屋を見回す。

倦が掃除していてくれたのだろう。埃っぽさはなく、香喃と沙捲がいたのがまるで昨日の事の様だ。

壁にかけてある制服や、竹刀を見て微笑む。

香喃がこの竹刀を使っていた頃の恋人、佐伯蓮はもうとっくに死んでしまった。

香喃が沙捲の死に耐えかねて、蓮のところに行ったことがあった。

その時蓮は何も云わずに泣き叫ぶ香喃を抱きしめてくれた。

いつまでも年を取らない自分を気味悪がる人が多かった。そのため香喃は一旦此処を離れ魔界へ行った。だがこの土地へ数年ぶりに帰って来た時も、蓮は香喃を覚えていた。

年を取らない香喃を拒まず、昔の様に話した。

香喃はそんなことを思い出し、懐かしくなった。

そしてふと目に入ったケトルをつかんだ。初めて魔法に触れたのも、沙捲と一緒に居るきっかけを作ったのもこれだ。

だが魔法をかけた本人がいない今では、香喃がどんなに自分の魔力を押さえても、そのケトルがかつてのよう蓋を口の様にバクバク開閉したり、歯を生やしたりすることはなかった。

不意に頬に暖かい物を感じて香喃は慌ててそれを拭う。

拭いきれない涙はプラスチックのケトルの上に幾つも落ちていった。

「・・・香喃ちゃん。」

「っ・・・倦・さん・・・私もう・・・」

泣き続ける香喃を、倦はきつく抱きとめた。小刻みに震える体をポンポンと撫でてやる。

「沙捲は君に会えて幸せだったよ。きつとあいつは意地っ張りだから言わなかつたろ？・・・俺から変わりに伝えとくな。」

静かな倦の声を聞き、香喃は鼻の奥がツンと痛くなった。

「っ・・・」

「晁燈は訳を知ってんの？」

「いいえ・・・師匠は昔に死んだとしか・・・」

「あの子は知りたがってる。」

「はい・・・」

倦は自室で根掘り葉掘り聞かれたのだ。だが香喃から話してもらえばいいと諭しておいた。

香喃もガティの態度からそれは解っている。だから今回の墓参りで教えるつもりだった。

「教えます。きつと今回・・・」

からお尋ねしますね。」

部屋から出た香喃はすぐにポーカーフェイスを取り戻す。

「……ああ。」

「……なんでそんな景気の悪い顔するんですか。」

香喃は倦の表情を見て苦笑いした。

「いんや……。無理するな。また来い。」

香喃は小さくうなずき、ガティと共に一礼して帰って行った。

それから数日後……

「あと2時間……」

レノは堅い黒パンをかじりながら言う。

「かつてえなコレ……。食べるかよこんなん……。？」

香喃も、大きなパンを苦労しながらかじっていた。

「ほうれふへ（そうですね）……。？」

「食ってからでいいから。」

レノが言うつと香喃は苦笑してパンを飲み込んだ。

「みんな来てくれるみたいですね。」

「おう……」

「もうちよつとですね……。時間」

香喃はそわそわした。

この堅いパンも、一口かじって食べる気が萎えてしまった。

「レノさん乗せてってくれるんですよね？」

「ああ。」

「ミラさんは飛鯨で……」

「もーそれ何回目だよ？」

レノが茶化す。香喃は焦燥感が胸の中に広がって行くのを感じた。

そして、気づいた時にはパンをちぎって足元で尻尾を振っていた犬

に与え、立ち上がった。

「レノさん、私早いけど行きます。」

「え？」

「すいません、でも行かないといけません。行かないと・・・」
香喃はぼんやりと言い、ガティを呼んだ。

「え、でもどうやっ・・・」

香喃は魔力で自分の体を包んだ。

本当だったら変化の術は体の一部にしか使えない。体の本質を変え、それを維持するには膨大な魔力を要する。

だが虹の魔力を持ち、以前とは違い魔力の使い方を覚えた香喃には何の苦痛にもならない。

香喃は虹と、雨の日の空の色が交じった美しい龍となった。

レノは目を点にする。

「ラナ・・・ちゃ・・・」

シャランという上質な金属が擦れるような澄んだ音を響かせ、堅く、だが透けそうなほど美しい翼を広げ香喃はレノをみた。

笛のような唸り声を響かせ、ぶるぶると土を払う。

香喃の声は音としてではなく、レノの頭に直接響いた。

「行ってきますレノさん。待っていますね。」

「え、ちよっ・・・」

いきなりの事に動揺するレノを置き、香喃は驚くガティを背に乗せ飛び立ってしまった。

「んだよ・・・あれ・・・」

魔界に太陽の代わりとして浮かぶ明るすぎる月に反射する鱗を見て、レノは茫然とつぶやいたのだった。

「ししよ・・・なんで・・・」

ガティはレノに承諾を得ず、予定を勝手に変更したことを気にしているらしい。

「あなたに話さないといけないの。」

「・・・何を・・・？」

「あなたが生まれるずっと前の話しを。私がこの世界で生きる理由を。」

香喃の声がいつになく静かで、ガティも釣られて口をつぐむ。

「着いた。」

香喃はガティを下ろすと変化を解いた。

「気をつけて。私の後ろから離れない事。」

「はい・・・」

香喃は腰に携えた長剣に手をかけたまま、歩きはじめる。

ハーヴィは消息を断ち、この城は廃墟となった。だがまだ式神が残っているかもしれない。

あの日の石兵も、ハーヴィが生きている可能性もないわけではないのでいいとは限らない。

石の城を歩きまわるたび、記憶がよみがえる。

そして、ついに”あの場所”へとたどり着いた。

「私の師の洋名はレイン＝ストライフ。本名は紅桐沙捲。」

骸があるとは期待していなかった。きちんと土に葬ってやりたかったが、やはり遺体はない。

そこにあるのは赤い染みだけだった。

ガティはその染みに気づき、びくりと身を震わせた。ガティには生き物を殺させていない。

避けては通れない道だが、香喃がそれを許さず、危険な時は一人でガティを守ってきた。

きつと血は見慣れていないのだろう。

「っ・・・」

「師は私を庇って死んだ。此処でね。」

香喃は自分でも驚くほど冷静だった。沙捲との出会いやいきさつをガティに話した。

そして話し終わると廃墟となった城に散らばる岩を運び、魔法でつるつるに磨き上げる。これを墓石はかばきにする。

「師はとても立派な方だった。魔力にも長けていて、素敵な方だったの。」

クレイドルの城から持ち出した彫刻刀をにぎり、香喃は石を削り始めた。

「魔法でしないのですか？」

「・・・文字だけよ。時間もあるし、自分でやりたいの。」

”偉大な術師ここに眠る”

香喃はその文字だけ彫り終わると石に手を当てた。腕が光りはじめ、石が光につつまれた。

ガティは眩しくて目を細める。

すると石は流れる水のように澄んだ水晶となり、床に固定された。

ガティはその周りでミシミシという音が響き始めたことに気づく。

「？」

ガティが驚いていると堅い石を割り、蔦が伸びあがる。蔦が墓石に触れるとそれは緑がかったガラスとなり、水晶に絡みつく。

「うわぁ・・・」

ガティが感嘆の声を漏らす。

「沙捲さん、ごめんなさい・・・私にはこれぐらいしかできないんです。」

香喃は消え入りそうな声で無意識に呟いた。

その言葉は沙捲が死んでから今まで毎日のように呟いてきた。ほとんど癖の様なものだった。

「え？」

「いいえ、何でもないので。」

ガティには聴こえていなかったらしく、香喃は息をつく。

「さて、みんなも来るだろうし花でも摘みに行こう。」
ガティはこんなところに花はあるのだろうかとは思ったが、この冷たい城に取り残されるのはごめんだ、と香喃に慌ててついて行った。

「花・・・ないですよね。」

ガティが苦笑した。香喃はぼんやりと荒野を見渡している。きつと落胆したのではない。頭の良い師匠はきつと花など無い事を知っていた。

ただ、城から出たかったのではないかとガティは推測する。

師匠は偶に憂いを帯びた表情をする。

黒い眼には何も映っていないことをガティは知っていた。

そんなとき、いつも自分から話しかけて話しの流れを取り戻すのだが、今日の師はいつまでも遠くを見ている。

『そうだ・・・』

ガティは師の笑みを見たかった。

笑えば綺麗なのだ。この人は。

少なくとも、ガティが見てきた人の中では一番。

この人はその事を知らないのだろうか？城でも美人だっただけと噂になって、師の事を好いている人はたくさんいるのに。

ただ自分はこの人の心からの笑みは見ることがない。

表情の一環として笑うだけ。心を動かして笑うということはない。

ガティは座り込み、薬草として使うために入っていた花の種をまいた。

ガティは深く息を吸う。手首が仄明るく光った。

そして荒れた土に魔力で水を与え、全神経を集中させてそこ一点に土の中の栄養素を集めた。いつのまにか流れた汗が地面を黒くしめ

らせる。

『あとちよつと・・・』

種から芽が出た。そして葉が伸びる。早回しをしたかのように蕾が膨らみ、花弁がゆっくりと開いて行く。雨の日の空に似た、儂い青の花が咲いた。花の大きさは6〜7センチほど。

『綺麗・・・』

あえか。師匠はこの花をそう呼んでいる。儂くてとても弱い花。花の大きさのわりに茎は細く、葉も、根も弱い。だがとても美しい花だ。

本当の名前は知らない。魔界で咲く花は、ほとんど名前がない。

「師匠・・・!」

少し強めに呼びかけると香喃はハツとしたようにガティを見た。

「ああ、ごめんなさい。ポーっとして・・・て・・・?」

「花、咲きましたよ。持っていきましよう?」

香喃は驚いたように瞬きを繰り返していたが、次の瞬間ふわりとほほ笑んだ。

「ありがとう。ガティ。」

ガティは香喃が笑ったことが嬉しくてつい頬を緩めた。

『やっぱり綺麗だ。』

ガティはそう実感し、たくさん咲かせた花を抱えて香喃について行った。

みんなが到着し、香喃は深々と頭を下げた。

そして、香喃のつくった墓に次々と花を手向ける。

「あれ?ラナちゃんこれ・・・」

一通り終わったところでレノが何かを拾い上げた。

「ブレス・・・レット・・・」

それは、沙捲がしていたブレスレットだった。肝試しに行った時に落として、一緒に取りに行った物。

レノは啞然とする香喃にそれを渡した。

「え・・・でもこれは・・・っ」

「手出して。」

レノが微笑んだ。香喃はあたふたしている間にちゃっかりとつけられてしまったブレスレットを月の陽にすかす。

「いいんでしょうか・・・」

「きつと君のだよ。兄貴からのプレゼントだろ。」

「・・・」

香喃は言葉が出ず、黙って頷いた。

「そういえばさ、今年で香喃ちゃんと沙捲、同年だろ。」
「倦が呟いた。」

「はい。そうなんですよ。」

昔、倦に沙捲がからかわれた。

香喃の事を沙捲の彼女だと言って。

その時に沙捲は口走ったのだ。

『こいつと俺、780歳差ですよ。付き合ったらお互いショックどころじゃないですよ。』

もう沙捲が死んでから780年の時が流れた。沙捲の時は止まり、香喃の時は流れた。

香喃は沙捲の実年齢と同じ797歳となった。

『もう同い年ですよ沙捲さん。今なら一緒にいられますかね・・・？』

ふと思つて、香喃は微笑んだ。

『沙捲さん、私の事許してくれますか・・・？』
そう心の中で呟くと、いきなり強い風が吹いた。

「キヤツ！」

「うわっ！」

皆が声を上げる。飾られた花束から花弁が散り、香喃に降り注いだ。あえかも散り、雨の日の蒼が舞う。手首のブレスレットを風が揺らす。

まるでそれが答えの様に香喃は思えた。単なる思い込みでもいい。

沙捲は苦しんでいないと、そう思いたい。

そう考えると少しだけ心が軽くなった。沙捲の死から解放はされない。だが縛られるのはやめた。

また風が優しく、まるで撫でるように髪を揺らす。

「好きです。沙捲さん。」

香喃は呟く。死に際、沙捲は何を言おうとしたのだろうか。

”香喃・・・俺は・・・”

あの言葉の続きは二度と聞けない。

『でも・・・同じ気持ちだったら嬉しいな。』

香喃は笑った。

「師匠・・・」

ガティはその時初めて師が心の底から笑っているのを見た。

レイン＝ストライフ。雨の日に生まれた子、と帝王に言われたらしい。

そのせいか沙捲は雨を嫌っていた。

でもいつも香喃は沙捲に負けずに言い返していた。

”知ってますか沙捲さん。虹の色を混ぜると灰色に、雨雲の色になるんですよ。素敵じゃないですか？そう思うと元々雨雲は虹だと思えませんか？”

沙捲は何故か吹き出していた。ただ馬鹿にして笑ってるだけだと思っただ。でもその後沙捲は決まって香喃の頭をくしゃくしゃと撫でるのだった。

「私は雨の日が好きです。虹が架かるかもしれませんよ。」
香喃が不意に言った。皆きよとんとしている。

香喃は沙捲がいるであろう空を見上げる。

青空は見えない。だが香喃にはその暗闇の黒が漆黒の髪を想わせた。その黒に、いつもと変わらぬ魔界の月が煌煌と輝いていた。

完

雨と虹 最終話 (後書き)

終わりました。自分の中では長かったです。

またあとがきを生意気ながら一番最後に書かせていただきたいと思います

最後まで読んでくださった方に深い感謝を……。

あとがき&告知(前書き)

この文章は本編とはほぼ関係ありません。

作者の自己満足の感想文です。よければ読んでみてくださいね。

第2作のお話もちろつと・・・

あとがき&告知

いやー長かったです。

前回も言いましたが同じ話題をだらだらと……。反省しております(笑)

沙捲を殺してしまったことはまだ自分の中で正解か誤りかはっきりしてないです。

理想を詰め込んだような人物として沙捲をつくろうと思っていましたので殺すか殺さないかは2〜3話くらいからずーっと迷ってて……。

まあ香喃が立ち直ったのでよしとします！(おい)立ち直らせたのは私ですけどね。

あ、それと私事(?)ながら、このシリーズの第2作をつくろうかなーとか思っています。

1作目終わってなんか私自身すごくさびしくなってます。だから続けようと思います。

もしもこの物語が好き、っていう物好き()方がいらっしやりましたら、ユーザーページを見るといつの間にかできていたりする……かもしれない(笑)

次はきつとガティとティナの物語かな。

あ、ご察しの通り私の更新は亀並なので期待はなさらぬようお願いします。

(受験だし)

最後までお付き合いして下さい。深く感謝しています。
またコメントを下さった方々にも、とっても感謝しています！
では、また次の物語でお会いしましょう。

BY 鈴羅

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6328k/>

摩訶不思議っ！？女子高生の魔法生活

2011年7月24日02時23分発行